

---

# 万華鏡と魔法少女

パトラッシュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

万華鏡と魔法少女

### 【Nコード】

N8011W

### 【作者名】

パトラッシュ

### 【あらすじ】

沢山の血を流し、同じ一族を手に掛けた一人の男

彼は唯一の弟と対峙して命を散らせた。

愛する人も友も家族でさえ手に掛け、たった一人の愛する弟の為に命を賭した

そして、死んだ筈だった彼は自分自身が居た世界では無く、

気がつけば違う世界の中に存在していた

そんな彼の前に現れた一人の金髪の魔法少女

彼女と出会った彼はどの様な結末を迎えるのだろうか…

NARUTO、うちはイタチとリリカルなのはのクロスオーバー作品です未熟者ですが、宜しく願いします

## 万華鏡と魔法少女

……俺は果たして今までどれほどの真つ赤な血を流して来ただろうか

……一族を殺し、天涯孤独の道を自ら選んだことは後悔していない

愛した者をこの手に掛けてきた俺のこの手は血に染まっている

その度に感情を殺し心を捨ててきた

目の前は歪み、何度絶望を感じた事だろうか……

……だが、サスケ、唯一の弟には俺は手を掛ける事が出来なかった

あいつにはどれだけ辛い思いをさせて来たんだろうか……

木の葉を信じた俺は、果たしてそこに住む者達の笑顔を護れる事が出来たのだろうか……

出来るならサスケ、お前にその笑顔を護る事を引き継いで欲しい

……俺はもう ……

雨の下の忍（前書き）

最近、自身の駄文にがっかり来てますパトラッシュです）  
—  
（;

では更新したいと思います）  
—  
（

## 雨の下の忍

それは、雨が降りしきる暗い夜の事であった……

黒い闇の雨の中に横たわる一人の男

赤い雲の模様が入ったマントの様な変わった  
衣服に身を包み……

ただただ、降りしきる土砂降りの雨に身体を任せていた。

男は動く気配は無く、じっと眼を瞑っている。

(……冷たい)

男は疑問に思った。

死んだ筈の身であるというのに何で指から伝わる”冷たい”という感覚が有るのだろと……

(……生きて、いるのか)

男は思う様に動いてはくれない身体を余所に自分自身の生に対して驚きが隠せなかった。

確かにあの時、弟と対峙して命は尽きたはずだった。

おまけに、暁で動く時に着用していた物まで傷一つ無く身に纏っている

……神様の悪戯にしてもたちの悪い

横たわる男、イタチは  
そう思った。

やる事を全てやり遂げ、最早、血を流す事から開放されたというのに……

……もう一度深い眠りにつけば、もしかしたらこれが幻想で終わるかもしれない

雨にひたすら打たれて横たわるイタチは諦めた様に感覚のある手から力を抜き、再び意識を深い闇にへと沈めていった

……あの降りしきる雨の中、深い眠り底に……

(……兄さん！)

ふと、聞き覚えのある元気の籠った声が聞こえてきた。



二度と聞く筈は無いと思っていたその声、

『今日は見てくれるって言ったのに……』

そう言って、いつもブスッとふて腐れた表情でいつも仕事のある俺を困らせる

『……許せサスケ、また今度な』

そんな当たり前だったやり取りと思っていた事も今は昔の思い出――

憎しみを弟に植えつけ、木の葉を護る為にその一時の幸せを投げ捨てた

ふと、立ち止まり自身の両掌を見てみれば、真っ赤な血で染まっている

……忍びならば当然の事だ、感情を殺して任務を実行する事など

……俺自身の命は木の葉を護る為に使い果たした

ならば、何故だ……どうして俺は生きている？

そんな、事を深い闇のそこでひたすら自身に問いかけるイタチ、

そして、そんな彼の頬に触れる様な感覚が彼の意識を深い闇から引き上げる

(……………何だ……………)

頬に感じる違和感に重い目蓋をゆっくりと開き始めるイタチ

そんな彼の前に現れたのは……

「……………あ、気が付きました……………」

……………笑みを溢す、小さな金髪の女神の姿だった

目蓋をゆっくりと開けたイタチの視界は次第にはっきりといき、目の前に現れた少女の姿をはっきりとさせる

(……………女……………それも小さい……………)

意識が戻ったイタチは表情を曇らせて、そっと自身の懐へと手を入れる

……少女と言えど信用出来るか分からない、万が一という事もある

「……おいアンタ、フェイトが折角ここまで運んでくれたのに御礼もなしかい？」

「……こら、アルフ、この人さつき目を覚ましたばかりなんだからそんな風に言われても混乱するだけだよ？」

アルフ、と呼ばれた人物？だろうか、フェイトと呼んだ金髪の少女に軽く注意され、ふて腐れた表情を浮かべてべてフン、と鼻を鳴らし、俺の前から立ち去って行ってしまった

「……すみません、あんな風な態度ですけど根は優しい子なんです」

「……いや、別に構わない……」

イタチは懐にへと入れていた手から握っていた苦無を離し、アルフという者の弁解をしている少女に答える

……とりあえず、思いのほかそこまで警戒する必要は無い様だ

懐から手を取り出したイタチはひとまず情報を得る為に彼女にへと

質問を投げ掛ける

「…すまないが、これは君が…？」

「あ…はい、物凄く熱があつてうなされたみたいだったので…」

イタチの額に置いてあつた濡れたタオルに対しての質問に頷き答えるフェイト、

イタチは微笑みフェイトに対して頭を下げる

「……すまない迷惑を掛けた様だ、助けてくれて感謝する」

「え?!…、いやそんな頭を下げないでください?」

イタチの御礼にあたふたと驚くフェイト、そして、イタチは彼女に再び質問を投げかける

「…さつそくで悪いがここは何処の里か教えてくれないか? 状況が未だに把握できない…」

「…里…ですか？　ここは一応、海鳴町っていう場所ですけど…」

イタチの投げかけた質問に答えるフェイト、

すると、イタチは表情を曇らせて、頭の中で思案し始める。

海鳴町などという地名は今まで聞いた事もない…

何処の里か…いやもしかしたら里などでは無いのかもしれない

どちらにしろ、地名だけでは自身の現在地を把握する事は不可能か

……

イタチは諦めた様にひと息つくと、現状が変わらないと悟ったのか  
目蓋を再びそつと閉じた

そして、フェイトと目を覚ましたイタチの間に静かに沈黙が流れる

「…あ、あの」

…この沈黙に耐えかねて先に口を開いたのはやはりフェイトだった

……

イタチは話し出すフェイトの方へと身体を向けて耳を傾ける

「……………何だ？」

沈黙を破ったフェイトに訪ねるイタチ

だが、イタチの纏う言い表す事の出来ない威圧感に似た雰囲気か口を開いた筈のフェイトに対して無言のプレッシャーを与えてくる

……………そして、またもや再び沈黙

そんな、2人のやり取りを遠くで見守っていたアルフは呆れた様に内心ため息を吐く

( ……なあにやってんだらうねあの恥ずかしがり屋は………… )

仮にもフェイトの使い魔である彼女は何となくだがフェイトが彼、イタチに言わんとしている事は大体予想出来た

優しい彼女の事だどうせあの得体のしれない男を此処に留まらせる事を言いたいには違いない…………

見たところ、フェイトと話してるあの男も寝所の宛がありそうでもないし第一、あの大雨の中、身体中びしょ濡れで倒れていたのだ。

あんな状態からようやく目覚めた彼をここから追い出すというのもなんだか気が引ける

(……しない、ここは私が一肌脱ぐか……)

アルフはそう決心すると、沈黙が漂う2人の方へ歩き出す

そして、彼女は割り込む様に2人の間に割って入った

「……ちよつと御免よー、」

「え？ちよつとアルフ？」

いきなり割って入ってきたアルフに困惑するフェイト、

アルフはそんな彼女を余所に、イタチにへと話し出す……

「……どうやら見たところアンタ、体調がまだ完治してない様じゃないか」

「……………」

アルフの質問に沈黙したままのイタチ、

だが、2人の間に割って入ってきたアルフはそんなイタチの態度に構わず話を続ける

「……………まあ、素性も分からないアンタをフェイトの側に置いてるのも不安なところではあるけども、

…まあ…なんだ…アンタが良ければ、暫くの間、身寄りが無いなら此処に居てもいい、そうだろ？フェイト？」

「…え！？…あ、うん…」

自分に話を急に振られ、驚いた様に反応するフェイト

…だが、先程まで自分を警戒していた様な態度をとっていた筈のアルフの言葉にイタチも予想外だったのか、その提案に眼を見開いていた

「…良いのか？」

上体を起こしたまま2人に訪ねるイタチ、



すると、フェイトがそんなイタチに対して微笑み答える

「…ええ、此処には私達二人しか居ませんし、良ければ居ても構いませんよ?」

「…別にあんたが嫌なら今すぐにでも出て行っても構わないけどね  
え」

そう言っただけから視線を逸らして無愛想に言葉を投げ掛けるアルフ

そんなアルフをフェイトが顔を曇らせて睨む

…だが、なんだかイタチにはこれが微笑ましく見えたのか、

先程までの警戒心を解きゆっくりと目の前の少女、フェイトへと右腕を差し出す

…要するにフェイトに対して握手を求めているという事だ

その事を察したのか、視線をアルフへと移していたフェイトは腕を差し出してきたイタチに、ビクリ! と身を弾ませて反応し、

彼の差し出して来た右手にへとそっと眼をやる

「…これから世話になる…」

仏頂面な表情でそう言って手を差し出してきたイタチの言葉に、若干、不安感のあるフェイト、  
だが、彼女は暫くしてそんなイタチの差し出した右手を太陽の様な明るい笑顔でぎゅっと握り返した

「…宜しくお願いしますね！ …えっと…」

「…うちはイタチだ…」

手を握り締める彼女に仏頂面のまま、自身の名前を名乗るイタチ、

すると、彼女もそんなイタチの言葉に続き、嬉しそうに自身の名前と不機嫌そうに目の前で腕を組んでいるもう一人の人物について語り始めた…

「…私の名前はフェイト テスタロッサです… …そこに居るのは私の使い魔のアルフ」

「…フン」

鼻を鳴らして、明らかに不機嫌そうにイタチから視線を逸らすアルフ

だが、フェイトはそんな彼女に構わず、手を握り締めたイタチに柔らかに微笑んで話し出す…

「…それじゃイタチさん…これから宜しくお願いします」

そう言った彼女の表情を見たイタチは何故かその中から懐かしさを感じた…

…そう、それはいつの日だったか分からないが弟と戯れていた時の様な…

イタチは握られた右手をジッと暫く見つめた後、

手を握り返してきた彼女の方へと顔を上げてゆっくりと口を開いた…

…まるで、その表情は仏頂面での先程とは違いどこかすごく優しい顔のある顔…

…フェイトがそうイタチの顔を見詰めて思った瞬間、彼から言葉が発せられた

「…宜しくな、フェイト…」

そうして、しっかりと握手を交わして、金髪の少女に言葉を述べる赤雲を身に纏う忍。

…大量の雨が降りしきる暗い夜のこの日

黒い服の魔法少女と死んだ筈の万華鏡の眼を持つ男はこうして出会った…

…この出会いが何を意味するかは…

…今はまだ、

…誰にも分からない

## 日常の忍(前書き)

相変わらずの駄文で申し訳なく思います( | ; )

では更新したいと思いますo(^ ^)o

## 日常の忍

とある日の午後、

一人の仏頂面の青年がある商店街の市場にて買い物をしていた

…そんな、彼の傍らには笑みを溢す金髪の少女の姿がある

「イタチさん！今日は何にします？」

「…そうだな…」

フェイトの質問に顎に手を添えて考えるイタチ

…自分がこの少女から助けてもらい、彼女の家滞在してから一ヶ月が経とうとしていた…

…最近、ようやくこの世界に馴染めてきた所だ…

やはり、自分が以前いた世界とはまるで別のものだと把握した時は驚きが隠せなかった…

文化も国の在り方も全てが根本から違っている

この国の科学も最先端をゆき、空を飛ぶ鉄の塊がある事にも携帯電話というものにも驚いた

そして、何よりもこの自分が居る国の在り方も…

…巨大な国によりパワーバランスをとっているこの世界では、よほどの事が無い限り戦争が起こらないという…

その規模も様式も俺がいた里同士の様な戦争とは違っている

…何処にいても人が居れば争いがなくなる事を感じた…

…だが、自分がいた忍の世界よりかは平和である事は間違い無い

ここ最近になって、この町に住んでいる人々の光景を目の当たりにした自分は昔を思い返す様になっていた



…自分が護りたかった理想とした平和の形、

人々が笑顔を振りまいて、穏やかな毎日を家族や友人と過ごす…

…だが、同時にそんな光景を目の当たりにした自分に対して戸惑いがあった

(…まあ、今更だがな…)

大勢の人間を手に掛け、真っ赤に染まった自分自身の穢れた両掌…

致し方無い事とはいえ、こればかりはどうする事も出来ない、

イタチは自嘲するかの様な笑みを溢して、目の前で首を傾げている少女に対してゆっくりと口を開いた

「…そうだな、今日は久々に焼き魚が食べたいかな…、秋刀魚を買って帰ろうか？」

「…秋刀魚…ですか？ イタチさんは和食が好きなんですね」

そう言ったイタチの夕飯の要望に対して クスリ、とフェイトは口元に手を添えて微笑む

「…まあな、フェイトが言う様に俺は洋食よりもどちらかと言えば和食が好ましい、バランス良く食事が摂れやすいからな…」

そう言つて、魚屋の前で立ち止まるイタチは後ろからついて来るフェイトへと振り返り質問を投げ掛ける

「…フェイト、アルフは今日は帰って来るのか？」

「…はい、一応、晩には帰って来るって確か今日の朝に言っていましたよ？」

…晩に帰る…か、

イタチは妙にその言葉が頭の中に引っかかるが、とりあえずアルフについて答えてくれたフェイトに向き直り、アルフの夕飯について述べる…

「…そうだな、彼女？ がいつ帰って来るかは分からないなら、作り置きにしとけば問題ないだろう。」

「…すみません、アルフったら、最近、ひよっこり居なったりする事が何故か頻繁で…」

そう言って申し訳なさそうにイタチに謝るフェイト

しかし、イタチは左右に首を振り、申し訳なさそうに謝る彼女へと告げる

「…別に謝る必要などないだろう？ 仮にも俺も未だに居候の身だ、申し訳ないのはむしろ俺だ…感謝してるフェイト…」

「…イタチさん…」

「かぁー、流石はあんちゃん、相変わらずかっこいいねえ」

そう言って、イタチとフェイトとのやり取りにへと介入してくる秋刀魚を抱えた魚屋の主人

…あの出来事から、フェイトがイタチと住み始めてから毎回、買い物の度にこの商店街にある魚屋に立ち寄っている為かイタチはすっかり顔馴染みとなってしまうているらしい…

…それもそうだ、まあ、イタチの容姿は他から見ても端麗であり、その傍らにはいつもひよっこりとして来る西洋人形の様に可愛い少女が居るのだ

…商店街の話好きな方々からすれば、話題に取り上げられない方がむしろ、おかしいと言ってもいいだろう…

…だが、毎回毎回こうも様にいきなり話に割り込んでもらわれるのはあまり好ましくは無い、勘弁して欲しいものだ…とイタチは心の底でため息を吐く

…しかしながら、差し出された秋刀魚とそれを嬉しそうに抱えた魚屋の主人を前にしたら、彼もどうやらそう言った事を口に出す事なんて出来ない様だ…

秋刀魚を袋へと詰めて差し出す満面の笑みを溢す魚屋の主人にイタチは諦めた様に微笑み口を開く

「…柴さん、相変わらず元気の様ですね」

「まあなあ！ 相変わらず嫁の尻には敷かれてたまんまだが…」

「聞こえてるよ？ アンタ？」

やばいやばい、と店の奥にいる自分の嫁に叱咤されて参ったと言わんばかりの反応をする魚屋の主人

イタチとフェイトはそんな魚屋の反応にクスクスと笑っていた

そんな、自分の嫁に叱咤された魚屋の主人は2人の方へと振り返ると手に持っていた秋刀魚の袋を手渡し、次は店の奥にいる彼女へと聞こえない程の小さな音量で囁く様にイタチ達へと話出す

「…あー、おつかねえおつかねえ…、フェイトちゃんはある凶暴な女にならない様にな…、  
…ま、そんなかつこいいお兄ちゃんがいれば心配いらねえと思うけどよ」

そう言つて先程、秋刀魚を詰めていた袋を差し出しながら、奥の方にいる彼女に聞こえない程の小さな音量で囁く様に話す魚屋の主人

「……買い被り過ぎですよ柴さん」

…少しだけ、間を置いて、自嘲気味に笑みを溢し、イタチは魚屋の主人が差し出してきた袋を受け取る

…この時、袋を受け取る彼の横顔がフェイトには少しだけ寂しそうに見えた…

…まるで、何かを懐かしむ様な…

魚屋の主人はそんなイタチの言葉を聞いていつも通りの声に戻り、腰に手を当てて嬉しそうに話を続ける

「いやあ、やっぱり良い男は言う事が違うねえ、しょうがねえから今日の所は安くしておいてやるよ？」

「…いつもいつもありがとうございます」

そう言ってイタチは柴さんと呼んだ魚屋の主人に感謝を込めて頭を下げる

その後、会計を済ませて魚屋を後にする2人

その帰路で、ふとフェイトは魚屋の主人に言われた一言が妙に気になっただけ…

(…私とイタチさんが兄弟…)

魚屋で購入した秋刀魚が入った袋を手渡されたイタチの方へとフェイトは視線をやる

…確かにイタチさんをどことなく物腰が落ち着いた雰囲気があった、とても優しいと思う…

本当にとっても頼り甲斐があって、しっかり者のお兄ちゃんの様だ…

…私には兄妹は居ないから、もしイタチさんが兄さんならってつい想像してしまう…

…ただ…兄弟の事に関する話になると彼はいつもどことなく悲しい表情を浮かべる

…イタチさんが、家に居候し始めて間もない頃だった…

アルフがそんな感じの質問をしたのを覚えてる…

…イタチさんは結局何も話してはくれなかったけれど、その時の顔だけは今でも頭から離れなかった…

…一ヶ月も一緒の家に住んで居るのに、私はイタチさんの事を何も知らない、本当にこのままで良いのかと未だに自問自答している…

…今は彼の事を何も分からない事だけど、いつかは…

「…フェイト？ どうした？」

ふと、頭の中で先程の魚屋の主人から言われた事を深々と考えていたフェイトの顔を伺う様にイタチが声を掛ける

「…ふ、ふえ？、あ、はい！… なんですかイタチさん？」

「…いや、先程から呼んでも反応がなかったものでな…、具合でも悪いのか？」



心配そうに自分の呼び声に反応して、慌ててアタフタしているフェイトにへと訪ねるイタチ

だが、そんなイタチに対してフェイトは慌てて左右に首を振る

「い、いやなんでも無いですよ」

「…？ ならば良いが、気分が良く無いなら遠慮なく頼ってくれていい…、それぐらいしか出来ないがな」

イタチはそう言って隣で歩いているフェイトに袋を持っていない左手で優しく撫でて微笑み掛ける

(…そんな顔されたら直視出来ないよお)

イタチに優しく頭を撫でて貰うフェイトは恥ずかしそうに顔真っ赤にし、彼から視点を外す様に俯く…

そんな、フェイトにイタチは首を傾げ、何か思いついた様に真っ赤になって俯いている彼女の前へとしゃがみ、自身の背中を見せる

「…な、何をやってるんですかイタチさん!？」

突然しゃがみ込んで背中を見せるイタチに驚いた様な声を上げるフ  
エイト

すると、イタチは頬を緩ませて彼女へと話し出す

「…疲れてるんだらう? あまり無理をしない方がいい…君に倒れ  
られたら俺も困る」

柔らかく微笑み声を上げる彼女に言い聞かす様に話すイタチ

…そんなイタチの心遣いにフェイトは思わず口を閉じる…

そして、フェイトは目の前で袋を持ったまましゃがみ込んでいるイ  
タチの背中をジッと見つめる

(…大っきい…背中…)

…まるで、何もかもを包み込む様な…

…小さなフェイトにはイタチの背中がそんな風に壮大に見えた

…暫くの間、そんな彼の背中を見つめるフェイト

…そして、彼女はゆっくりと腰を降ろしたイタチの背中の側に寄り、

…自身の身体を広い彼の背中にへと委ねた

…それを確認したイタチはゆっくりと立ち上がり再び先程まで歩いていた帰路へと足を戻す…

(…やはり軽いな、)

…一人の少女を背負い込んだイタチは身体を自分の背中にへと預けるフェイトを横眼にそう感じた…

…彼女は果たして今までどのような食生活を送ってきたんだろうか、と…

…フェイトと共に暮らし始めたばかりの話したが、彼女の家にある

台所に置いてあったのはビタミン剤やインスタント食品ばかりだった…

その事について、口を頑なに閉ざしたフェイトに一時間程説得して問いただした所、

彼女の母親からそんな物しか食べてはいけないと指示されていたと言う事が判明した…

…アルフはそんな彼女に無理をしてもちゃんとした食事を用意させようと何度もしたらしいが、

…母親に言われた事だからと言う事で頑固なまでにその食生活を変えようとはせずに突き通していたらしい…

…なんとも、こんな小さな少女に酷い事と話を聞いた俺も思わず口に出してそう呟いてしまった…

だが、今はこうして彼女の側に自分がいる…

彼女の食生活も俺が共に生活し始めてからアルフと一緒に協力し説得する事で変える事に成功した…

…まだ先がある彼女には健康な身体でいて欲しい…

イタチは背中に感じるフェイトの身体を心配しつつもそういった想いを心に閉まっただまま帰路を一步づつ歩いてゆく

…そんな、イタチの背に身を委ねているフェイト…

…彼女は歩く度に上下に揺れる彼の背中へと自身の頬をピタリと密着させる…

(…あつたかい…)

…イタチの背中から伝わる体温がすごく彼女の頬に伝わる

…その暖かさは何故か自分の心を包み込む様な安心感を与えてくれる

暫くの間、フェイトはその安心感を与えてくれるイタチの背に身を任せる

すると、そうしている内に段々と彼女臉が重くなり…

…遂には、彼女は眼をすっかりと閉じて揺れ動くイタチの背の中で

ぐっすりと眠ってしまった…

そんな彼女を様子を背負いながら見ていたイタチはふと、頬を緩ませる

…そんな2人をまるで、包み込む様に照らす真っ赤に染まった夕陽…

…照らされた夕陽によって写し出される重なって伸びる影

…そんな2人の後ろ姿は本当に兄妹に見える…

…血で血を洗う忍の世界の中で生きてきた一人の優しい男の安らぎのある時間…

…彼等のゆったりとした平和な一日はこうして終わりを告げた…



## 宿命の忍（前書き）

… やっぱりくぐららの駄文ですね、（ ） （ ） 反論のしよんまじわ  
いません…

とりあえず更新しますm（ ）（ ） m



## 宿命の忍

日が沈み、完全に辺りが真っ暗となったある日の深夜：

人々は完全に寝静まり、沈黙した暗闇とそれを照らす様な満月が出ている頃：

「…フェイト、…あいつは？」

「…大丈夫、イタチさんならぐつぐつと寝てるよ…」

…ひっそりと息を潜める様に行動する二つの影…

そんな彼等の視線の先には布団に横になり、寝静まっている一人の男の背中…

イタチが家に来てからというもの、彼が寝静まったこの時間帯に2人は気を配りながらこっそり外出する様にしていた

…それは、ただ一つの目的の為に…

先日からアルフが毎回の様に外へと出回り帰りが遅かったのもコレが原因である

(…ジュエルシードを見つけるのにはホント骨が折れるっの…)

(…ありがとうね、アルフ…)

小さく息を殺して念話によって、会話をする2人、

フェイトとアルフは互いに頷くと慎重に玄関の方へと向かい、

物音を立てない様に扉を開けて静かに外へと出てゆく

それと、同時に閉じていた瞼をゆっくりと開くイタチ

上体を先程まで寝ていた布団から起こして、彼女らが出て行った玄関の方へと視線を移しやれやれ、と溜息を吐く

(…また…か、まあ…大体、何をしに何処に行くのかは見当がついているがな…)

布団から出たイタチはすぐに側に掛けてあつた赤い雲が描かれたマントを身に纏う…

…右手で眼を覆い隠し沈黙…

一人、暗闇が広がる一室でそれに溶け込む様に沈黙する男

…そして、そんな真つ暗な闇の中で彼はゆっくりと瞳を開く…

…妖しく光るその眼光は深い闇の中で一際輝いてみえる…

彼はすぐに自身の眼を近くにあつた鏡にへと視線を移した…

…久々になるこの眼…

…多くの死を目の当たりにし、そして、見た者をその死にへと誘う…

…まさに、人を葬り去る為に産まれた瞳…

…自身の一族が持っていた争いを生み出すこの瞳…

…男はゆっくりと妖しく光る瞳を再び閉じてベランダへと出る

…夜風が彼の頬を掠り町の闇へと誘う…

無言のまま両手を合わせ月が照らす静寂した夜の中で印を結ぶ

…そして、刹那、

彼の姿は次々と羽ばたく鳥へと変わってゆく…

…まるで、彼を誘う暗闇の中にへと溶け込むかの様に…

…闇夜に鳥達が飛び去ったベランダには何も無い

…只々、また再び闇の中に長い沈黙が広がるだけであった…

-----

…暗黒の中に煌めく金色の髪、それは美しく闇夜の空を切り裂く様に飛行する

…彼女はふと、先程まで自身の家で寝ていた寝ていた一人の男の事を思い浮かべていた

(…イタチさんには、内緒でいつも出てきてるけど…バレてないかな…)

…自身の家に居候しているうちはイタチという男、

どこことなく、謎に包まれていて、自分の思っているよりも何か内に秘めたイレギュラーな存在…

(…私の思い過ごしなら良いんだけど…)

金髪の少女、フェイトはそんな不安感を募らせつつも、自分の相棒バルディッシュと呼ばれるデバイスにギュッと力を込めて握り締める…

(…もうすぐ着くよフェイト…)

そんなフェイトの思考を遮る様にアルフからの念話が頭を過る…

静かに頷き、それに応えるフェイト

…そうして、彼女達は再び闇夜へ姿を消していった…

-----

…ここはとところ変わって、とあるビルの屋上…

その場所に腕を組んである光景を傍観しているある第三者の人物がいた…

…黒の魔導服…だろうか、

それを身に纏い闇夜に溶け込む様にビルの屋上にて何かを眺めている人影…

その人影は確信を得た様にとある光景を目の当たりにし頬を緩ませていた…

(…ようやく見つけた…ジュエルシードを集めていた少女!!)

…自然と自身の拳へと力が入る…

ロストギアに認定された危険物を集めている人物をようやく特定し、

…更には今、この様に彼女を取り押さえる状態に自分は立たされている…

なんとかしてでも、今、目の前にいる彼女がジュエルシードを封印したところを取り押さえてやる!!

そんな風な事を意気込み、謎の人物はいつでもそこに飛び出だせるようにと身構える

…だが、そんな意気込んでいた人物を不意な出来事が襲った…

…ふと、自身の真横を掠る様に吹き抜ける凄まじい突風

そのいきなり、吹き荒れた突風に眼を瞑り、その人物は眼の前を両腕で庇い自身に向かいくる風を防ぐ…

それと、同時に両目を閉じた彼の耳に全く聞き覚えのない声が聞こえて来た

「あまり関心しないな…必死で戦う彼女をそんな風に傍観されるは…」

…風が吹き抜けた直後、唐突に自身の後方から聞こえてくるその声…

慌てた様にその人物は後ろにへと振り返る

「夜分遅くにこんな場所に君の様な子供が何故居るかは知らないが…」

…一瞬にして、身体中の血の気がサー、と引いてゆくを感じた…



…そうさせたのは眼の前に現れた男のあの瞳だ…

…三つ巴に輝く妖しい眼光…

…あの眼を見た途端に何故か身体が言う事をきかない…

…それを恐怖だと認識するまでにその人物、

…いや、その少年にはそう時間は掛からなかった

だが、現れたその瞳を持っている男は目の前で硬直している彼を他所に話を続ける…

「…もし、彼女に何かしらの危害を加える…と言つならば…俺はここで君を始末する事になってしまう…」

刹那、男にそのセリフを言い放たれた少年の背筋は一瞬にして凍りついた…

…勿論、言い放たれた言葉にはない…

…その言葉を口にした時のその眼にだ…

…先程まで、妖しく光っていた三つ巴の瞳では無い、

…深い底が見えない漆黒を思わせるその瞳…

その男が醸し出すその殺気に近い凄まじい威圧感に少年はゴクリと唾を呑み込んだ

…だが、すぐに男は瞳を閉じて、先程からずっと少年が傍観していた光景へと視線を移して話し出した

「…どうやら、俺はイマイチ状況がこれと言って把握しきれてないようだな…」

そう言っつて男は溜息を溢し視線を移した先で戦う少女達を見て呟く

…その時、凄まじい威圧感に押し潰されかけられていた少年はその男の言葉を聞いてある仮説が頭の中をよぎった…

… もしや、彼はあれを何かわかっていない？

勿論、そんな確信は無いがあの子が戦う姿を見て状況が理解できていないのならほぼ間違いないのでは無いだろうか？

… それならば、何故、彼女の後ろ盾などするのか全くもって不明だ…

そんな事を頭の中で思案していた少年は再び自身に向けられた視線に考えが霧散した

… 今度は男が少年の前にへと足を進めて来て、目前でそれを止める

「… 悪いが今からする質問にきつちりと答えてもらおうか…」

「… だ、誰が…！」

少年は歩み寄ってきた男の言葉に噛み付く様に反論する…

「… そうか、残念だ…」

――…だが、しかし、

…反論をした次の瞬間…――

彼の瞳の中にはさっき目の当たりにしたばかりの三つ巴の瞳が写し出されていた

そこから、その眼に写し出された少年の意識は一気に遠退いてゆく…

51

――まるで、身体中の意識が一瞬にして刈り取られる様な感覚…

こうして少年の意識は完全に闇の中にへと消えていつてしまった…

…その光景を目の当たりにしていた男はその場からゆっくりと立ち上がり、

早速、情報収集の為にとりあえず今知りたい質問だけを投げ掛ける

「…お前の名前は…？」

「…クロノ ハラオウン…」

「…何者だ…？」

「…時空管理局…」

… 男の投げ掛ける質問に面白いほど淡々と答えるクロノという少年

…

…それは、そうだろう今、幻術を完全に掛けられた彼は男の掌の上なのだ…

… 解除する術を持たない限りはこれを破る事など出来ない…

男は続けて更に質問を重ねる…

「…では彼女、フェイト テスタロッサは何者だ…」

「…魔法…少女…」

「…何故、彼女は戦っている…」

「…ジュエルシードを封印して回収するため…」

男は思わず頭を抱え込む、

…聞き出した情報が魔法少女だの、時空管理局だの、ジュエルシードなどと次々と予想外な事を聞かされたのだ…

…信憑性を疑っても仕方が無いだろう。

…それから、質問を幾つか彼にへと投げ掛ける男…

そこから得た情報もまた、なんともわかには信じ難いものばかりだった

…そして、彼へと一通り質問をし終えた男はゆっくりと手を組み、  
印を結ぶ…

その瞬間、彼の目の前で質問に応じていた少年は…

…まるで、糸切れた人形の様  
に力無く、前屈みにドサリと音を立て  
倒れる…

…それを見届けた男はビルの屋上から、閃光が飛び交う彼女の方へ  
と視線を移す

…空中で移動しながら魔法らしき閃光を次々と繰り出し戦いに身を  
投じている彼女の方へ…

「…魔法…少女か…」

…彼のその眩きは闇の空の中へと消えてゆく

ジュエルシードという名のロストギア、

それは、人間による希望、願望、野望を叶える事が出来る物質…

…だが、同時に戦いを次々と生み出す争いの種…

しかし、その事を知ってもなお、ビルの屋上に立ちその争いの種となる物の為に戦う彼女を止めに入る事など出来なかった…

…我ながら甘いとは自負している…

…だが、必死にジュエルシードを求めて戦う彼女の姿は何かを求めている様に思えてならなかった…

…それを自分が止める権利などあるのだろうか…答えは否である

だから、せめて戦う彼女の邪魔をさせぬ様に見守る事にしよう…

…彼女が自分が本当に欲しかった物を得て、その過ちに気付くまで…

そして、そのときは…

ビルに立つ赤い雲のマントを見に纏う男はゆっくりとその場から踵



を返す

…生き永らえる事

血を流し続けた自分は幸せを手に入れる事を許されるかわからない…

だけど、せめて今懸命に戦う小さなあの少女の幸せでいられるのを  
手助けしよう…

……それが、この世界に來た自分の宿命なら……

## 翠屋の忍（前書き）

んーm（ー）m今のうちに謝っときます

文体に不満、もしくは誤字脱字があるかもしれません、では更新します

## 翠屋の忍

数日後、フエイト テスタロッサの家に居候している男はとある場所  
所で働いていた

海鳴町にある翠屋という名のケーキを置いている店である

男は白黒の執事服の様な格好でテーブルにいる客のカップに紅茶を  
注ぎ込む

「…では、注文が決まりましたらお呼び下さい」

そう言うと客のテーブルから踵を返して他の客のテーブルへと男は  
移動する

働く…と言うのは、実にこの男にとっても都合が良かった…

居候の身でありながら、自分を未だに家に置いてくれている少女

…せめて、何かしらの形で御礼を返したかったのだ…アルバイトと

してお金が貰える事は本当に有難いと言わざる得ない…

端麗な容姿の男、うちはイタチは持ち合わせたそのルックスと客に對してのその振る舞い方により、ケーキを置いてある店の為か、店内には大勢の女性客が脚を運んでいた…

…イタチは正直に言えば人付き合いはあまり得意では無い…

…だが、忍として培われた相手を騙す為の演技力には彼は有る程度は持っていると思負している…

「…お待たせ致しました…モンブランで御座います」

そう言って、片手に持っていたモンブランが乗った皿を注文した女性客の前に丁寧に置くイタチ…

テーブルに座る女性客達からはうつとりした表情で時折、はあ…とため息を溢す声が店のなかから聞こえてくる

正に、その振る舞い方は完璧な執事パトラーと言っても恐らく過言ではないだろう…

イタチはふと、この店で働き出す数日前の出来事を思い出す…

-----

それは、綺麗な月に照らされるある夜の事だった…

とある海鳴町にある公園…

「…ふっ…!」

空中に舞う一つの人影はその人通りの少ないその公園で苦無を放る…

…そう、その人影の正体とはうちはイタチである

彼はこの様に忍としての感覚を忘れない様に毎晩、夜遅くこの様に修行を行っていた…

忍同士の殺し合いや任務はこの町でフェイト達と暮らし始めてから

一切無い…

そんな状況が続いていれば、おのずと自身の腕が落ちて来るのは明白である

…同居人である少女が戦っていると知った今、修行を怠り彼女を危険な状況下で助けられませんでしたでは話にならないのだ…

そういつた事が、今のイタチにこの場所での修行を行わせる要因となっていた。

「…………ふっ!!」

イタチは華麗に宙を舞いながら、次々と手持ちの苦無を放る

彼が放ったそれは、キン!! と音を立てて、次々と最初に彼が公園の中に設置した的の中心にへと吸い込まれる様に突き刺さる

…そして、見事な着地

…

一切、息を切らさず、事を終わらす一連の動作は正に芸術と言って  
も良いだろう…

…だが、イタチの表情は何処か浮かない…

彼は自身の的へと苦無を放ったある場所にへと視線を移してため息  
を溢す…

(…やはり、まだ完全…と言う訳では無さそうだな…)

そこには、見事なまでに的に突き刺さる苦無が…

…だが、数ミリほど中心から多少ズレている…

イタチはその的を暫く見つめた後に静かな夜に浮かぶ月を見上げる

そして、次の瞬間、その月を見上げたまま呟く様にその場で言い放  
った

「…そろそろ、隠れてないで出てきたらどうだろう…」

そう一言、イタチが言い放った瞬間、彼の背後にある木の物陰から

ビクッ　と何者かが驚いた様に飛び上がる

暫くして、その物陰から覗いていたであろう人物は慌てた様子で夜空を見上げるイタチの前にへと飛び出してきた

「…あ、あのえっと覗くつもりはなかったんです!!」

そう言っつて現れた人物に夜空を見上げていたイタチはゆったりとそちらにへと視線をやる

…そして、自身の目の前に写し出された人物に彼は思わず目を丸くした

「…君、は……」

「…た、高町なのはって言います!!」

それもその筈だ、まさかこんな自身と共に暮らしているフェイトと  
同じ年ぐらいの女の子だとは予想もしていなかったのだから…

イタチは頭を下げて丁寧に自己紹介までしてくる少女に若干、戸惑



っていたがすぐに冷静さを取り戻し、

とりあえず彼女が何故この場にいるのか聞いてみる事にした

「…それで、何で君みたいな子供がこんな時間に何故ここにいる？」

「…えっと！！　そ、それはですね…」

イタチの唐突な質問に口どもる高町なのはと名乗った少女

彼女の肩に乗っているアレはオコジヨか何かだろうか…

時折、不安気な彼女と自分へとキヨ　ロキヨ　ロと視線を変えて何処か  
落ち着きが無い様に見える。

そして、彼女は先程からあつと、えつと、と同じ様な言葉ばかりを  
繰り返して話が進展する様な気配が無い

なんだか、焦った少女をこれ以上問い詰めるはなんだか気が引けて  
くる…

…とイタチは深くため息を吐き、とりあえず彼女にこんな時間に出歩く事を忠告しておく事に見てみた

「君みたいなお可愛い子供がこんな時間に出歩いていたら両親が心配するだろう…」

「ええっと、御免なさい…」

イタチの目の前の少女は縮こまる様に落ち込む

「…じ、実は前々からこの場所で夜中に、家の外から何か音が聞こえてきたから気になって…」

「……何？」

少女の唐突な言葉にイタチは思わず眉を潜めた…、

確かに、こんな時間にこの公園の近くを出歩く人は少ないが、

苦無を放り接触する金属音の事をすっかり配慮し忘れていた

少女の話の詳細を聞かせて貰うとその音はどうかやら近くにある彼女の家に届いていたらしい

…そう考えると自分はどうかやら彼女の様な音に敏感な人々に対して何かしらの迷惑を引き起こしている可能性が出てきている…

イタチはこの時、自身の思慮が足りない事を思わず悔やんだ

そうとなれば完全にこちら側が悪い…

そして、素早く彼女にへと丁寧な頭を下げる

「…すまない、てっきり聞こえない思っていた、こちらの配慮が足りなかった…」

「…え、…いや、あの…！ そうでは無くてですね…！ なんと言うか…たまたま不思議に私の耳にだけ聴こえてきた様な感じだったんです…」

…偶々彼女の耳にだけ聴こえてきた？

イタチは焦る彼女の言葉に違和感を感じる

「…つまり、苦無同士の接触した時の金属音が君にしか聞こえなかったという事かな…？」

「…うーん、と言うか、貴方が誰かを呼ぶ様な声…かな？」

そう言つて、イタチから視線を外し、頬を人差し指で掻きながら困った表情で返答する高町なのは…

イタチは更に意味が分からなくなった

…全くもって、謎が深まるばかりである

自分はこんな少女を呼ぶ様な行為は一切した覚えなど無い…

「…勘違いでは…」

「…でも確かに聴こえてきたんです間違いないありません！」

頑固なまでにそう言い張りイタチに迫るなのは…

だが、思わず過ぎた事をイタチに言い過ぎたと感じて申し訳なさそうに一步後ろにへと下がる

「…す、すいません…でも聞こえてきたのは確かなんです」

イタチは大きいため息を吐いて、目の前で縮こまる彼女と同じ位に屈み、それで？ とその事について詳しく聞かせてもらう為に話を促す様に促す

「…さ、最初は夢だったんです…」

「…夢？」

イタチがそう言うと、彼女は静かに頷いて話を続ける

「…月が出ている夜に真つ赤な血塗れのまま呆然と月を見上げて泣いていた貴方の夢だったんです…」

「…!!」

刹那、彼女の話聞いていたイタチの顔色が変わった…

…血塗れのまま立ち尽くしていた俺の…夢

真剣な面持ちでイタチは静かに彼女の話に耳を傾ける

「…それで、それから暫くして貴方の誰かを呼ぶ様な声が聴こえてきたんです」

「…なるほど…」

妙な事を聞いたものだといタチは心の中で呟く

…例え、夢だとしても下手にこの少女に自分の事を知られる事はあまり好ましくない…

イタチはとりあえず、彼女の身元だけを確認し、翌日訪ねるとい  
形でその夜は彼女を自宅にへと送り返した

—————そして、今

「…お待たせ致しました…」

この様にアルバイトとして、彼女の家にある翠屋という所で働かせ  
られているという訳だ

翌日、訪ねたイタチを彼女らの家族から妙に気に入られた事から話  
がとんとん拍子に進んでこうなってしまった…

…彼女からの紹介では友達の優しいお兄ちゃんという設定で話を進  
めてもらったが、まさか雇われる話まで飛ぶとは考えていなかった…

(…ふう、とんだ災難だ…)

イタチはそう思いながらも黙々とアルバイトとしての仕事をこなす

…だが、彼の中でこの店で働く事は少しも苦痛ではなかった

むしろ、此処で働く事が心休まる様に感じる

まあ、暫くはこんなのも悪くない

そんな、事をイタチが考えていると翠屋の扉が開き、元気よい声が聞こえてくる

「…イタチさーんただいまー」

「こらこら、イタチさんに迷惑をかけちゃ駄目よー」

注意されるその声の主は真っ直ぐに働いていたイタチの方に向かうと腰に抱きつき、

嬉しそうにイタチの腹部に顔を沈めた…

イタチは突然の事に多少同様するが、その声の主がこの店で働くきっかけになった少女の姿だと分かると、やれやれ と声を溢し優し



く微笑む

「あのね今日ね、先生に褒められたんだ!!」

「本当か？　そうか、凄いじゃないか…」

微笑みながら、あたまを撫でてくるイタチが掛ける言葉に頬を綻ばせるのは、

すると、彼女の姉、高町美由紀が現れ彼女をイタチから引き剥がした

「…こーら、仕事だから邪魔はしたら駄目よ、御免なさいねイタチさん」

「…いえ、構いませんよ、」

そう言って、なのはの引き剥がし謝る美由紀に微笑みながら答えるイタチ…

彼女から無理やり引き剥がされたのはは何処か残念そうな表情を浮かべて落ち込んでいる…

すると、イタチは仕事に戻る前にそんななのはの前に立ち、身を屈めて彼女と同じ位の目線になり…

「……………そして…

トン と人差し指と中指で彼女の額を優しく突いてこう言った

「……………っ?!」

「…許せ、なのは、また今度だ」

唐突に額を突かれて、思わず眼を閉じて驚くなのは、

しかし、暫くして彼女は眼をゆっくりと開いて微笑むイタチを見ると嬉しそうに笑った

「…うん！ それじゃイタチさんまた今度話そ！」

イタチは、ああ と言だけ頷いて再び翠屋の仕事にへと戻って行く…

無邪気に笑う彼女の顔は自分にはやはり眩し過ぎる…

イタチは翠屋の窓から見える空を見上げる

平和でほのぼのとした翠屋での一日…

こんな平和な日々がいつまでも続いてくれたら…

「イタチさん七番テーブルにお願いね」

「…分かりました」

…せめて今だけでも、皆の笑うこの幸せな時間を精一杯、味合わせてもらおうとしよう…

イタチは心中にそんな想いをひっそりと忍ばし、こごうして、翠屋の  
仕事へと再び勤しむ…

…翠屋の窓から見える虚空の青空

それは、翠屋で働く彼にとってどこまでも美しく、高く澄んで見え  
た…

血に染る忍（前書き）

うげえ（T―T）バイトダルイなう

死ぬかも、でも更新したいと思います

そして駄文なう

## 血に染る忍

少女、フェイト テスタロッサは夢を見ていた…

夢に出るそこは、海鳴町とは違う何処か遠い場所…

そんな場所に一人で立ち尽くしている人影があった

その人物の足元には重なる様に血だらけで倒れている二人…

…ひたすら真っ赤だった…

池溜まりの様に朱色の血が辺りを浸し…

そこには、ただひたすら静寂な空間しか広がらない

そんな、血だらけで重なり合う二人を見下している人物もまた紅蓮の様に衣服が血の色に染まっている…

…暗く重苦しい空気が辺りを漂う…

————そして、その人物が此方にへと振り返るその瞬間だった

フェイト テスタロッサは何かを引きずり上げられる様に目が覚め

寝る為に掛けていた自身の布団から跳ね起きた…

「…はぁ…はぁ…」

彼女の頬からは伝う様に汗が垂れ落ち、呼吸が安定せずに荒々しい…

そうなってしまうのも無理もない…

彼女にとって、あれは今までに無い様な何処か現実味のあるような  
夢だ

…それも、死体などが出てくる血生臭く吐き気がする様な恐怖を抱  
かせる残酷な夢

すると、そんな跳ね起きた彼女の音を聞いてか、隣の床で寝ていたはずのイタチが上半身を布団からゆっくりと起こした

「…どうしたフェイト？ 眠れないのか？」

表情を曇らせて跳ね起きた彼女にへと訪ねるイタチ

彼女の額や頬を伝う様に流れ出る汗をみればただ事では無いのは間違いない

イタチは心配な面持ちで呼吸を乱す彼女を見詰める…

暫くして、フェイトは荒くなった呼吸落ち着かせて、深く息を吸い込んで深呼吸をする

そして、イタチはそんな彼女に台所から冷水が入った水を渡して、落ち着きを取り戻してきた彼女を催促する様に優しく頭を撫でてやった

「…ありがとうございますイタチさん…だいぶ落ち着きます」



「何、大した事はしてはいない…」

イタチはそう言って、俯いて御礼を述べるフェイトに微笑む

イタチに頭を撫でてもらっているフェイトの顔は羞恥心のせいかな  
まで真っ赤に染まっていた

「…どうした？ 具合でも悪いのか？」

「い、いや！！ そんなこと無いですよ！！」

イタチに指摘され、慌てて彼女は顔を左右に振ってそれを否定する

イタチは彼女のそんな様子に首を傾げていたが…

暫くしてその場から立ち上がり、自身の布団に戻ってゆく…

「…今日は遅い、早く休んだほうがいい」

すると、そう言って自身の布団に入ともどろろとしたイタチの足が  
ピタッと止まる

「……………」

彼がゆっくりと後ろへと振り返るとそこには顔を真っ赤にしたまま俯いて、服の裾をギュツと握りしめているフェイトの姿があった…

イタチはそんな彼女の行動に眼を丸くして驚いたが、

ふと、彼女が先程まで夢にうなされていた事が頭を過ぎりその行動の意図を把握した

イタチは俯いている彼女へ振り返ると、身体を屈ませて優しく微笑む…

「…怖いから、今日は一緒に寝たいのか？」

「……………」

俯いて顔を真っ赤にしたまま、イタチのその言葉に静かに頷いて応えるフェイト、

イタチはふう、とため息を吐きながらもそんな彼女にへと優しく応じた…

そして、彼女は暫くして自身の布団にへと戻り横になったイタチの懐にへと潜り込む…

…なんだか安心する…

ふと、イタチの懐にへと身体を丸めて入り込んだフェイトは思った  
イタチの懐は何故か暖かく心地良い、これならば先程の様な悪夢を  
見なくても済むだろう…

すると、彼の懐に潜り込んでいた彼女はふとイタチの顔を顔を真っ赤にしたまま見詰める

「…？、どうした？」

そんな彼女の行動に首を傾げて、横になっ たまま訪ねるイタチ

フェイトはそんなイタチに対して恥ずかしそうに口を開いて話し始める…

「…あの、えっと…この間からずっと思ってたんですけど…イタチさんの事、

…お兄ちゃんって呼んでいいかな？」

「…何？」

…不意を突かれた様にイタチの表情が固まる…

そして、イタチは深刻な面持ちになり、その話をし出したフェイトにへと言葉を述べ始める…

「…生憎だが、俺の様な…」

「…嫌…」

距離を離す為にイタチが発しようとした言葉がフェイトのつぶやく様な言葉によって打ち消される

気が付けばフェイトがイタチの衣服を掴む力も自然と強くなっていた…

フェイトは困った様な表情を浮かべているイタチに続けて話をし出す

「私にとって…イタチさんは優しいお兄ちゃんなんです…」

「フェイト…」

イタチはフェイトの言葉に何も言い返す事をしなかった

フェイトのイタチに対する我が儘…

今まで、親から愛情を与えられず、只々、道具としてジュエルシードという物質を集めていたのだ…

…そう考えるとこうやって、自分に対して甘えてくる事も大体予想がつく…

イタチは自身の服をギュッと握りしめているフェイトに視線を移してにっこりと微笑んだ

「…わかった…、飯ではあるが…今日から俺はお前の兄貴だ…」

「…本当に？」

困った表情で応えるイタチの言葉に思わず聞き返すフェイト…

…それに対して、イタチは静かに頷く…

すると、フェイトの表情は陽光の様にパア、と明るい笑みを溢した

そんな、嬉しそうに笑う彼女の頭をイタチは優しく撫でてやる…

…兄貴…か…

…イタチはふと、自分の死んだ筈の世界に置いてきた唯一の弟の事を思い浮かべた…

…あの時、あの場所で力果てるまで殺し合った…

…あいつは今頃、木の葉に住む彼等の為に駆けているだろうか…

イタチはふと、寂し気になりながら自身の服を握りしめているフェイトへと視線をやる

「……?…フェイト?」

自身の服を握りしめているフェイトに話し掛けるイタチ

…しかし、彼女からの返事は無い

イタチは覗き込む様に丸くなって寝ているフェイトを見る

…すると、彼女は静かに寝息を立てて嬉しそうな表情で寝ていた…

イタチはそんな彼女に対して微笑み、彼女が掴んでいた自身の服からゆっくりと手を剥がし自身の布団から起き上がる

そして、寝ているフェイトへと優しく自身が先程まで使っていた布団をゆっくりと掛けてやる

…ちて…

―――…仕事だ…

…起き上がったイタチは静かに赤雲が入ったマントに袖を通し、

…横に傷が入った木の葉の額当てを身に付ける

そして、儂気な表情を浮かべて寝息を立てているフェイトにへと視線を移して眼を閉じる

「…ありがとう」



…イタチは感謝の言葉をフェイトにへと発した…

…こんな、血で身を真っ赤に染めた自身の事を兄と呼んでくれた彼女に…

そして、彼は部屋の窓を開いて身体を屈める

刹那、彼の姿は目にも止まらぬ早さでその場から疾風と共に消えていた…

本来ならば、暗く静寂が支配する筈の海鳴町の夜…

「…ハアハア…」

…だが、そんな静けさが支配する筈の夜も今夜だけは違っていた…

…ここは、海鳴町から少し外れた山中…

そこでは、土煙と何かから必死で逃げる一匹の使い魔の姿があった…

(…クソ！…なんなんだあいつらは！！)

爆発によって引き起こされた土煙を振り切り、何かから追われている使い魔は悪態をつく

本来ならば、今晚もジュエルシードを軽く探索して早めに帰るつもりだった

…それが、この様…

帰り道に待ち伏せされて、こんな風に無様に追いただされている

…一時は反撃に転じようとした時もあったが敵の数が多すぎて、やりようが無い…

…匂いだけでも大体16人ぐらいは間違いなくいるだろう…

…まさに絶対絶命という言葉がしっくりとくる状態だ…

(…ちくしょう詰んだなコレ…)

こんな、圧倒的に危機に瀕した状況ならば最早打つ手など無い…

彼女は内心諦めかけて、逃げ回っていたその足を止めた

そして、後ろにへと振り返ると、先程から追いかけて回ってくる数人の人影と対峙する…

それに応じてか、急に足を止めた使い魔の前に魔導服を身につけた数人の男が闇の中から彼女の前に姿を現した…

狼の姿だった使い魔は姿を形を変化させて、人間の様な風貌へと変わる

そして、彼女は対峙する魔導服を着た男達を鋭い眼差しで睨みつける

「…あんたら、私を追いかけ回して何が目的だい!!」

殺気が込もった口調で男達に声を荒げる使い魔の少女…

…男達はそんな彼女の問答に感情も何も無い無表情でゆっくりと口を開き話し出す…

「…上からの命令だ、フェイト テスタロッサの使い魔を消せ…とな…」

生憎だが、これから死ぬお前に教えるのはそれのみだ…」

魔導服を身に纏う男の1人がそう言うとそれに呼応する様に周りにいた男達も再び、手に持っているデバイスを構える

…彼女はその瞬間に逃げ道を見つけ出す様に辺りを見渡すが時は既に遅く、

男達に完全に包囲される形になっていた…

…そして、完璧に後が無くなった彼女は何かを悟った様に全身から力を抜いてその場で眼を瞑る…

…これまでか…

…せめて、彼女、フェイト テスタロッサの顔を最後に見たかった…

…自分が疲れ果てても優しい彼女の笑顔が力をくれた…

そんな、あの彼女の笑顔に何度救われた事だろうか…

…これで彼女を悲しませる結果となってしまうのは不本意だが仕方がない…

闇夜の森の中、月光に照らされる彼女は再び拳に力を込めて最後の抵抗をするべく行動を起こそうと、自身の周りにいる彼等に特攻を仕掛けようと構えた

――――とその時だった……

グシヨリ……と何かが裂けて崩れ落ちる様な音が、静寂していた森の中から聞こえた……

……次には……まるで噴水が吹き出る様な音……

そして……その吹き出た様な噴水の音と共に闇夜の中で男達にへと特攻を仕掛けようと構えていた使い魔の少女の頬に、……なにやら冷たいものが付着した……

……突然の事に驚く彼女はゆっくり自身の頬に付着した、何かを、手でなぞる様に確認する

そして…彼女は頬に付着したその、何かを、確認した途端…眼を見開いた

「…血…」

…呟く様に頬を触った手を確認した彼女の全身の背筋が一気に凍りついた…

…先程、グシヨリ…と何かを裂く様な音が聞こえた方へと彼女は慌てて視線を向ける…

「…生憎だが…」

…彼女の視線の先…

そこには、闇夜の中で月に照らされながら、1人の男の頭を片手で  
持ち…

…顔を返り血で真っ赤に染めた赤雲の模様が入ったマントの男…

…そして、彼女は戦慄する…

…その男の姿、そして彼が瞳に宿る無限の闇を思わせる様な眼に…

…自分の良く知る人物がそこにはいた…

「…イ…タチ…?」

片ことながらも自身の良く知る人物の名前を呼ぶ使い魔、



彼は自身が持っていた男の頭を捨て、彼女に構わず真っ赤に血で染めた顔でまっすぐに先程の頭を掴んでいた男の仲間たちへと話を続ける

…冷たく、感情も何も込もっていない様な表情で…

「…彼女を殺すのは無理だ…」

魔導服を身に纏う彼等は突然、自身達の前に現れ、仲間の一人を殺した赤雲を身に纏う男のその一言に一気に動きが固まる

「…貴様…何者だ…」

「応える義理はない」

訪ねる彼等に対して、冷徹な表情を崩さずにイタチは応える

彼等にとって…完全にイレギュラーな存在が目の前に現れ、

その上、仲間の一人を一瞬の内に葬り去られたのだ…

…実力が底知れない…

そんな、なんとも言えない恐怖が彼等の動きを完全に凍結させていた

そして、現れたその男は、身体を血に染めたまま先程まで魔導師達が追いまわしていた使い魔の少女の前に立つ

その行動を見た魔導師達は得体の知れないその男に対して…すぐさま警戒の体制を取る

「…なんの真似だ…」

現れた男に殺気と警戒を込めた口調で問いかける魔導師の一人…

だが、闇夜に現れた赤雲を身に纏う男は静かにに眼を瞑ると訪ねる男に対して当然の如くこう応える…

「…自身達の仲間が殺され、そして俺のこの行動を見て、それを論ずる事は

…最早、ナンセンスだ…」

…そして…彼の眼がゆっくりと見開かれる…

……三つ巴に怪しく輝く瞳…

両者が対峙し、緊迫する状況が更に拍車をかける様に引き締まり、

…一挙に息苦しくなる…

…そんな彼等を包む様な月明かりを覆い隠す様に夜空に雲が掛かる

…その瞬間…既に魔導師の男達の前から赤雲の男の姿が視界から消える

…「ううして、闇夜の中…命の削り合いの火蓋は切って落とされた

暗闇の忍(前書き)

はい久々に更新しますパトラッシュです(^-^)

いやぁ戦闘回なのに短いッスね今回…

んじゃ駄文ですがどうぞ

## 暗闇の忍

暗闇の中で飛び交う魔導服を身に纏う男達と鋭く研ぎ澄まされた眼差しを持つ忍…

…その決着はまさしく、一瞬にしてけりがついてしまった…

…ほんの一瞬…だ

…山中での魔導師達と、自身の内に秘めた眼を開眼した忍、うちはイタチの殺死合い

…まず、行動を起こしたのは魔導師達だった…

構えていたデバイスから、対峙するうちはイタチに向けての一斉攻撃…

イタチが立っていたであろう地面からは魔法での攻撃で、爆風と爆発が引き起こされ…

…一瞬にして彼の姿はその中へと埋れてゆく…

「…手を緩めるな、殺傷設定を完全に解除した状態なんだ…息の根を完全に止め、この場からやつを死体ごと隠滅しろ…」

魔導師達のリーダーらしき男からの冷徹な指示…

男達は只々、イタチに向けての攻撃を手を緩める事無くひたすら続ける…

だが、そんなイタチがいた場所の一点に攻撃をし掛けていた彼等の中から突如、悲鳴が上がる…

「…ぎゃああああああ！！」

咄嗟に悲鳴が聞こえた方に振り返る彼等、

…そして、彼等は眼に映る光景に驚愕する…

「…手裏剣の位置がズレていたか…まあ、いいだろう」

…そこには、眼を手裏剣で射抜かれ、背中から刀で貫かれ、血塗れ  
の変わり果てた仲間の魔導師の姿…

それとその血塗れで絶命している仲間の魔導師の背中に刀を突き刺  
した先程まで、攻撃の対象となっていた赤雲のマントを身に纏った  
男が立っていた

「…では、次はこちらから行かせてもらう」

そう言うと同時に、凄まじい速さで、魔導師達に向かい駆け出すイ  
タチ…

勿論、魔導師達はそんなイタチに向かい近づかせまいと攻撃を集中  
させる…

先程の過ちを何か把握していない彼等…

こうして彼等は自身の破滅への道を辿らされてゆく…



…烏分身…

イタチが最も使用する分身の術の一つ、Cランクの難易度忍術

…そう、魔導師達は先程からイタチがすり替えた烏分身だけを攻撃しているだけなのだ…

しかし、そんな事を彼等はまったく理解していない…

その上、自身達の視界まで魔法での攻撃でより悪くし、イタチにとつては動きやすいことこの上ない…

…また一人、また一人と魔導師達は狩られてゆく…

「…火遁…豪龍火…」

「…後ろだと！！　ぐあああああ！？」

イタチから繰り出される火遁の術に焼かれ、のたうちまわる魔導師の男、

…イタチは更に数人の魔導師達の間合いを一拳に詰め、写輪眼で動きを見極め

手に構えていた苦無を同時に二人の魔導師達の首元を突き刺し、切り裂く…

…吹き出る噴水の様な血…

…だが、イタチは一切表情を変えない…

もう、既に次の標的にへと仕留めに掛かる為、行動に入る…

「…ば、化け物め」

「…生憎だが、その言葉は聞き飽きてる…」

そう魔導師達を統べていたであろう男に対して言い放つイタチは、

次の瞬間には既にもう印を結び終え、

彼の背後から、影分身の一人が術を発動する形になっていた…

「…終わりだ、水遁、水牙弾」

「…何時の間に…！」

背後から、聞こえた声に慌てて振り返る魔導師の男…

…だが、時は既に遅く、彼の顔面を見事に圧縮回転した水の塊が直撃した…

そして、彼の身体は力無く後方にへと吹き飛び…

赤い鮮血をぶち撒けたのちに…

暫く、もがき苦しむと声も発さないまま絶命した…

…それは、そうだ、彼の顔はイタチの放った水遁により、削り取られていたのだから…

そして、そんなグロテスクなイタチによる魔導師達の殺害現場に居たフェイトの使い魔であるアルフは眼を見開いたままその場で立ち尽くしていた…

…辺り一面が血の海…

首元を刀で刈り取られて血を噴き出したまま木に寄りかかる者…

あるいは、首もろとも、吹き飛び身体だけの者…

…そして…人間を生で焼き殺した様な焼死体となった者共…

…その、光景を目の当たりにしたアルフを凄まじい吐き気が襲う…

「…づ…ぶ…ぐ…ぐええ」

思わず、そこから眼を逸らし近くの草むらで胃の中をぶち撒けるアルフ…

…そして、彼等を全員残らず殺し尽くした本人は血塗れのまま月夜に照らされ、彼女の視界の中に映る

…彼女は咄嗟に、そんなイタチとの間合いを詰めて荒々しく彼の胸倉を両手で掴み上げた…

「…あんた！！なに考えてんだ！！」

月夜の中、血塗れのままのイタチに詰め寄り、迫るアルフ

だが、イタチは一切表情を変えずに辺りに散らばる死体を見渡した後、静かに口を開き話し出す…

「…悪いが、質問の意味を理解しかねるな、彼等は君を殺しに来た…俺はそれを阻止しただけに過ぎない…」

…淡々と無表情のまま口からアルフにそう語るイタチ

…だが、それでは納得出来ないアルフは更に声を荒げ、イタチに言い放つ…

「…全員殺す必要なんてなかっただろうが!!」

「…そこまでだ…ここで言い争うだけ時間の無駄だ」

そう答えたイタチは胸倉を掴んでいたアルフから手を引き剥がし、背を向ける

…そして、彼女はそんなイタチの言葉に拳を握り締め静かに俯く

…悔しかった…

あの殺し合いに無理やりにも介入して、止めるべきだった…

…少なからず、彼女は自身が行わなかった行動を心の内で後悔していた…

それに…イタチの正体の事だ…

こんな得体も知れず危険な男をフェイトに近づけた…

それに少なからず、信頼を最近、彼に寄せ始めていた自分がいた

…それが、こんな平気で人を殺し、尚且つ、今まで力を、正体自身を分達に隠していたなんて…

…惨めだ…

「…彼等は俺の姿を見た…俺の存在を知らせる可能性を潰す…忍ならば当然の行動を起こしたただそれだけの事だ」

ふと、彼女の耳にそんな独り言を呟くイタチの声が聞こえた…

それに反応する様に彼女は自身の頭を上げてイタチを見る

「…君は早く帰れ…フェイトが心配していた…、」

月夜の光に照らされてそう言い、自身の殺した死体を担いで運んでいるイタチの表情は何処か哀しげに見えた…

…彼の身体に運んでいる死体の血が服にべったりと付着する…

だが、彼はそれでも死体を運ぶのをやめようとはしない

そして、暫くして彼の分身や彼が持つて来た魔導師達の死体が一箇所に集められた

そんなイタチの異様な行動に眼を見開くアルフ

「…な、何をするきだい？」

「…証拠隠滅の為に彼等の死体は消せさせてもらう…」

冷徹にそう言い放つイタチは一箇所に集められた魔導師達の死体を見て静かに眼を閉じる



…そして、ゆっくりと彼は瞳を開けると、眩く様にこう宣言した

「…万華鏡写輪眼…天照！！」

一箇所に集められた魔導師達は突如、まっ黒な炎に包まれて燃え盛る

イタチが出したであろう異様なその炎にまたもやアルフは度肝を抜かされ唾然となった…

「…な、なんなんだよコレ…」

「…後はほっとけばいい…引くぞアルフ…」

そう言つて天照を目の当たりにて立ち尽くす彼女の真横を通り過ぎてそう告げるイタチ

…だが、彼女はイタチのそんな冷徹無比な行動に通り返した彼の肩を掴み自身の方に彼を向かせると、

…自身の持っている力一杯に彼の頬を思いつきり平手で打った

顔を殴られたイタチは無言のまま、殴る彼女の姿を見つめる…

「…フェイトがどんな風にあんたの事を考えてたのか知ってんのかい！！ あの子を哀しませる様な事を平然として！！ あんなに簡単に他人の命を…！」

「…君が納得出来ないなら別にそれでも構わない…だが、これが現実だ…俺は殺す必要性があると思ったから実行したに過ぎない…君にとっても…彼女にとっても…」

イタチはそう告げると彼女に近づいて、首元に手刀を入れて気絶させる

「…イタチ…チ…あ…んた…」

力無く倒れそうになる彼女をイタチが受け止める

「…このまま、ここにいっても時間の無駄だ…早めに切り上げて足がつかない様にしておいた方がいい…」

…イタチは気絶させたアルフを抱えると、先程、天照で燃やした魔導師達の死体を確認する

…彼の視線の先には既に死体は無くなっており、あるのは黒く燃え上がる炎のみ…

それを確認したイタチは力を足に込めて跳躍しその場から姿を消す…

…そうして、再び、海鳴町の外れにある森には静寂した空気が戻る…

…そこにあるのは…ひたすら燃え盛る真黒とそれを囲うように生える木々のみであった…



暗闇の忍（後書き）

というわけで、大変グロテスクなものとなりましたが  
どうでしたでしょうか？

…色々と今後のストーリー展開は考えていますがリアルがほんと大  
変です…マジ、リアル爆ぜろ的な感じですよ（泣）

ではまた近々更新しますでは（^- - ^）

なのはと忍（前書き）

ではでは更新したいと思います（＾・＾）

いやぁ、更新できて嬉しい、まさに感動の嵐！！

ようやくリアルも最近落ち着いてきました…コレで勝つる…！！

ではでは（＾・＾）ノ

## なのはと忍

…再び、己の手で人を殺めた…

…今でも、あの感触が忘れられない…

アレを思い出すたびにやり切れない…異様な気分になる…

…だが、俺は止まる訳にはいかない…

幸せを願う母親の為に懸命に戦う彼女の為に…

…例えば、彼女のその行動が罪だったとしても…

うちはイタチさん、

私が彼と出会ったのは暗闇を照らすある月夜の晩の事だった…

自然と眠りにつくために布団に横になった私の耳元で微かに誰かが何かを呼ぶような声が聞こえた…

「…な、何？」

「…？どうしたんだいなのは？」

聞こえてきた声に耳を傾けるのはに心配そうに訪ねるユーノという名のいたち

…なのははそんな彼の言葉に反応せず、静かに耳を澄ませる

…だが、何も聞こえない…

…気のせいだったのか、と彼女は首を傾げる



「…なんでも無いよ、寝ようか？」

そして、やはり声は自分の気のせいだという事にしておいて、彼女再び布団に潜り目を瞑った…

…暫くして、彼女は眠りの底につく…

-----

暗闇の底…彼女は何処か違う場所に立っていた…

…森を抜けた湖の畔の様な場所…

…彼女は上、空を見上げる…

そこには、湖に映る美しく綺麗な満月が出ていた

そして、そんな場所で一人の男性が両手で顔を覆い隠し、膝をつい

ていた

…隠していても、その人物の頬からは涙が零れ落ちているのが少し離れた彼女から見てもなんと無く分かった…

…なのはは、膝を地面に着けて顔を両手で覆い隠している人物へとゆっくりと近づく…

…すると、その人物から溢れるように微かに誰かの名前を呼ぶような声が聞こえた…

「……………父さん…母さん…シスイ……………そして…サスケ…済まない…許してくれ…」

…誰か聞いたこともない様な名前を呼びひたすら、流れる涙を両手で隠して懺悔するその人物

…なのははゆっくりとその人物に声を掛け様としたその時だった…

何かを眼で捉えた彼女はピタツと身体が硬直してしまう…

―――…彼女の視線の先…

そこには、先程と変わらず両手で顔を覆い隠す人物の姿だ…

だが、彼女が動きを止めた理由はそこでは無い…

…彼の流す涙の色が真っ赤な血の色になっている事…

そして、涙となって流れ出たそれは綺麗な筈の満月を映し出していた湖に流れ込む

…瞬く間に湖はその映し出していた月に覆い隠す様な真っ赤な血の色に染まる…

…なのはは眼の前で起こるそれを黙って見ているしかなかった…

…本当なら、これはきつと怖くて、恐ろしい夢に違いないのだろう…

… だけど、これを見ていたのははどうにもそうは感じられなかった…

… そうじゃなく、物凄く悲しい気持ちにさせられた…

… 彼は血の涙を流し、照らす月を見上げている…

… ひたすら懺悔する彼のその姿と血の涙で染まる湖…

気がつけば彼女の頬に冷たい何かが流れ落ちていた…

彼女は思わず擦る様にそれを左手で軽く拭き取る

… 透き通った、色のした涙だった…

「…？あれなんで？」

眼から流れ出る涙が止まらなかった… 締め付けられる様な哀しみを

感じている様な感覚…

—————…そして…彼女の意識は再びそこで途切れる

「はあ…はあ…」

勢いよく、先程からの夢から覚めて布団から飛び起きるのは

そして、彼女は何かに引つ張られる様に立ち上がると衣服を着替える  
とすぐさま自身の部屋の扉に手を掛ける

その、彼女が扉を開く音を聞いてか、丸くなって寝ていたユーノは  
慌てて飛び上がる様に跳ね起きると急いで彼女に追いつき、肩に乗る

「…!! 一体どうしたんだいなの?」

「…何か呼ぶような声が聞こえる!」

急ぎ、走る彼女はそう一言だけ述べ、駆ける

そして、玄関の扉を開けて家からパジャマ姿のまま飛び出した彼女は疾風の如く、何かと呼ぶような声が聞こえる方へと向かう…

暫くして、彼女は見通しの良い公園にへと辿り着いた…

勿論、時間帯が夜遅いので人の気配は殆ど皆無

ーだが、ポツリと公園の真ん中に立ち尽くしている人影が一つだけそこに存在していた

彼女はそれに気付いて思わず近くの木の影に隠れる…

そして、彼女は隠れた木の影から覗く様に公園にいる人物を見る…

月夜の光に照らされ人物の姿がはっきりと見える

綺麗な黒髪に凛々しい顔立ちの男性…

彼は眼を瞑ったまま、両手に苦無を持ち構える

…彼女がそんな彼の行動を観察していた刹那…

公園にいた筈の彼の姿が彼女の前から消え去る

彼女は慌てて木の影から彼が何処に消えたのかを眼で追っ…

「…上だよ、なのは」

「…え？」

肩に乗るユーノの言葉にすかさず、視点を上へと向けるなのは…

…そこには、空中で舞う先程の人物がいる…

なのははその信じられない光景に思わずゴクリと唾を飲み込む…

…魅了させられた…

最初は私が聞こえる声の元を探り、その原因を探るのが目的だった

しかし、私は今、こうして月夜の空を舞う人物から眼が離せないでいる…

一体何故…？どうしてだろう…？

理由は簡単だ…ただその光景がまるで一つの芸術品の様に圧倒的に美しく、華麗だったから…

木の影から覗いていた私は思わずその美しい光景に見惚れてしまった…

…月明かりがあるせいかも知れないけど、よりそれは綺麗に輝いて見える

そして、次の瞬間、彼の手元がキラリと光り、何かが放たれた



… 鳴り響く金属音と樹々に次々と何か突き刺さる様な音…

そして、突き刺さる様な音を立てた樹々に私は視線を向ける…

そこには、樹々に取り付けてあるのとそれの赤い円のと真ん中に突き刺さっている鋭利な苦無

幾つものそれが、見渡せば全て私が見た的の様に、的のど真ん中に突き刺さっている

それから、それを放った人物は何事もなかった様に綺麗に音を立てずに着地する…

綺麗な黒髪に月明かりが当たり、凜々しい顔立ちがより一層際立つ…

… 胸の中が熱くなった…

彼のその姿に、先程見た夢が頭を過り重なる…

…この気持ちは何だろう？

苦しい、悲しい、辛い…

…そして切ない…

様々な気持ちが中でごちゃごちゃと渦巻いて…締め付けられる

…木の影から覗いていた私は目頭が熱くなる

そんな時だった…

「…出てきたらどうだ？」

唐突に私の耳に声が聞こえた…

…その声には私は心臓が跳ね上がる…

この時…初めてうちはイタチという人物と私は出会った…

そして、今…彼は私の側に彼は執事服を着て立っている…

…色んな人達と触れ合い、楽しそうに振る舞いながら翠屋で働く彼

そんな彼は、いつも仕事でも仕事が終わった後も私に構ってくれる…

一時は彼に対して焼もちをやいたお兄ちゃんが彼を道場に呼び出してよく、争ったりしたみたいだけど…

今ではすっかりイタチさんの事を認めて、彼の友達みたいに親しい中になっている…

「…イタチさん、今日ね、家庭科の授業で料理作ったんだー」

「…凄いじゃないか、確かになのは器用だから、上手く作れそうだな」

彼はいつもこうやって私の話を聞きながら優しく頭を撫でてくれる…

…嬉しかった…

多分、初めて出会った頃からだろう…

それから、ずっとずっとイタチさんの事を思うと胸が苦しい、

私はこうして毎回イタチさんと会うたびにこの気持ちに確信に変わるの分かった…

…恋…だった

…よく、頼り甲斐のある年上の男性に憧れる様なそう言ったものは別…とは確かに言い難いかも知れない…

…けど、間違いなく、私は会った時からこの気持ちで心の中がいっぱいに満たされていた

「…ん？ どうしたなの？」

「…え？ あ、ちょっと考え事してただけだよ」

私はそう言って心配そうに顔を覗かせてくるイタチさんに答える…

すると彼はそうか、と優しい笑みを溢してくれた…

…綺麗な青空が広がる中に…こうして語り合う私とイタチさん…

この、ひと時は…短くそして切ない…

……でもこれが、この時が…

…初恋をした私にとってのひどく、甘酸っぱい至福の時間だった

なのはと忍（後書き）

いやあ、なんとも言えない展開ですね…とりあえずゴメンなさい m  
（――） m

…初恋は実らない…なんという素晴らしい言葉ですかね…

まあ、私もその一人であるのですが…（泣）

それではまた、近々更新したいと思えますので宜しくお願いします  
m （――） m

魔導師と忍(前書き)

うわぁん(T|T) 駄文乙

では久々に更新したいと思いますm| | ) m

あとごめんなさい(T|T)



## 魔導師と忍

…俺はあんたを殺すためにここまで強くなった！！

憎しみを植え付け、俺を殺すためにだけ生き続けた弟…

そんな、弟に対して俺はこんなやり方しか出来なかった…

…辛かっただろう、苦しかっただろう…

…そう、対峙する弟に対して何度も何度も思った…

…サスケ、俺もまたお前の隣で笑いたかった…

だが…それは、叶わない、

神が…うちが…、俺が殺していった沢山の人間達が許してはくれ

ないだろう…

…最早、身体も病に蝕まれ、永くは無い…

ただ、お前にだけは一言だけでもいい…伝えたかった…

-----

朝日が差し込み鳥の囀りが床で横になり、寝ていたイタチの耳に聞こえてくる…

「…夢か」

そう、一言呟いて布団から身体を起こすイタチ…

だが、その動作はピタリと途中で止まった

「…フェイト…」

「…んー…兄しゃん…」

可愛らしい寝言を呟いているフェイトがイタチの懐にはいっており、しっかりと彼の服に片手でしがみついている…

確か…昨日はアルフを助けた後に、違う布団を被って寝ていた筈だが…

何時の間に入り込んでいたのだろうか？

そんな疑問がイタチの頭を過ったが、自分の側で気持ち良さそうに寝ているフェイトの寝顔を見て…なんだかどうでもよくなってしまう…

イタチは優しく笑み溢して、彼女の綺麗な金色の髪をそっと優しく撫でてやる

「…ふえ…」

「…フフ…、おや？ 起きてしまったかな？」

ゆっくりと瞼を開ける彼女に柔らかく問いかけるイタチ、

そして、瞼を開ける彼女は自分が彼の懐に入って服を掴んでいる事に気付くと、一気に頭の中が覚醒した

フェイトは顔を真っ赤にして優しく頭を撫でてくるイタチの前で飛び起きると綺麗に正座をして頭を下げる

「…！…！ コメンなさい…！」

「…何も謝る事は無いだろう？ 兄妹なんだから、甘えるのは妹であるフェイトの特権だ…！」

イタチはそう言つと正座をして謝る彼女の頭に手を置く…

そして、そんな微笑ましい光景を見ていた第三者は皮肉る様に傍観する

(…よくもまあ、しゃあしゃあと…そんな言葉が並べれるもんだね

…あんな事、昨日しといて…)

…彼女の使い魔、アルフは内心、平然と彼女と触れ合うイタチを見て悪態をつく…

…昨日の起きた出来事…

…それは、彼女を追いまわしていた魔導師達を一人残らず虐殺し、その上、黒い炎により跡形もなく抹消した事…

…あれは…ひどく残虐で吐き気がする様な出来事だった…

(…でもあいつが私を助けたのも…また事実だしな…)

そう考えると、彼等を手に掛けたイタチの事を責める事はできないのも仕方ない…

…彼はああゆう風にフェイトに対して実に優しく接してくれている  
複雑な心境のアルフは溜息を溢して、彼等の微笑ましい光景を見つめる…

…結論を出すにはまだ早い…

とりあえず、アルフは今後の経過に任せる事にした…

-----

時空管理局の執務官のクロノ　ハラオウンは至って真面目で正義感が強い少年だ…

…彼は自分の所属する組織に対して誇りを持ち、行動している

「…あの男…」

…だが、そんな彼が会った中で奇妙な違和感を憶える人物がいた…

…三つ巴の目を持つ人物…

…先日、独自の行動をとっていた彼はその人物と出会い、不可視的な術を掛けられた…

恐らく…自身の情報を彼に話してしまった可能性が高い…

ならば、彼にできるだけ早く接触して、会話を交える必要がある…

それに…彼とは別に動いていた魔導師達との交戦について…

独自に裏で手に入れた情報によると、フェイト テスタロッサの使い魔を殺害の指示を受けて勝手に動いていた十六人の魔導師が行方不明になったとか…

不確かなその情報も出来れば、…謝罪を込めて話を聞きたい…

自分が推測するに、今回のフェイト テスタロッサの使い魔の殺害命令を受けた魔導師達を裏で操っていたのは…恐らく管理局の上層部の薄汚い連中

…自分はこう言った輩が反吐が出るほど嫌いだ…例え使い魔と言えど生きている事に違いないそれを奪う等、人道から外れた様な行動だ

フェイト テスタロッサがその使い魔を大切にしている事もわかっているから尚更、その事を起こした輩がクロノは許せないでいた

そして、そんな連中の中でその薄汚い事を平気でやってのける輩に彼は身に覚えがある…

なんにしてもひとまず、目撃情報等を元にあの三つ巴の目を持つ男と合流しなければ…

「…確か、ここか」

クロノはそう呟き、ある店の前でその足を止めた…

…店前には、翠屋と刻まれたプレートが掲げている

クロノはゆっくりとその店の扉を開いて中へと入る

「…いらっしやませ」

「……………いた…」

早速、目的としていた人物の顔が真っ先にクロノの視線の中に映し出された



…しかも、何故か執事服で丁重にこちらをもてなしている

先日、交戦した時のあのプレッシャーが嘘の様だ…

…クロノはなんとも違和感を抱きつつも、接触したうちはイタチに案内され、店の中にある一角の席に座る

「では、お客様、注文が終わりましたらまたお呼び下さい…」

「…あ、ああ、わかった」

そう言い残して彼はクロノの前から立ち去り次の仕事へと移っている…

そんな立ち去る後ろ姿を見ていたクロノは接触した彼の自分に対しての行動に疑問を抱く

(…こちらに気付いていないのか？…一度は接触した筈で顔を覚えられていてもおかしく無いんだが…)

…そう先日の交戦の際にクロノはイタチから幻術を掛けられ、無理やり口を割らされ情報を聞き出されるといふ出来事だ

…あれだけの事をしといて果たして自分の顔を忘れるものだろうか？

すると暫くして、自分自身が座っている机に何時の間にか一枚の紙が置かれている事に彼は気付いた

クロノは左右を見渡し誰かに見られていないかを確認すると、

先程、自分をこの席へと案内した店で働いているイタチの姿に一度視界を止め、ゆっくりと視線を落として机に置かれた紙を手に取り、

それをゆっくり開いて内容を確認し始める

『 本日、夕方五時に海鳴町の外れにある浜辺にて待つ 』

…短く、至極簡単な文章であったが、それが自分自身の事を既に向こうが把握している事をクロノが悟るには充分な物であった…

…同時に彼は働いているイタチにもう一度視線を戻した…

だが、視線の先のイタチは一人の少女となにやら軽く会話を交わしている…

確か、ユーノが連絡先で言っていた魔法少女の高町なのはだ…

大体ここは、彼女の両親や家族が働いている店だ彼女が居てもなんら不思議は無い

…そう、わかっていた…

だからこそ、疑問があった、彼がこの店で働いている事

…まあ、それは後ほど聞けば分かる事だ

ひとまず、店を訪れたクロノは適当に店にある食べ物を注文し、彼によって書かれた文章が刻まれた紙をジーンズのポケットへと仕舞うと翠屋から静かに姿を消した

その立ち去るクロノの後ろ姿を眼でチラリとだけ確認するイタチ

そんなイタチの視線に気付いたのか、先程まで話していたなのは不思議そうに首を傾げている

「…？どうしたのイタチさん？」

まるで、何かを確認するように視線を外した彼に問いかけるのは、

…イタチはそんな彼女に対して柔らかく微笑み、何事もなかった様にこう答えた…

「……………いや、何…ちょっと小煩さそうな小鳥がいただけだ」

「……………小鳥？」

イタチの奇妙な言動に思わず聞き返すのは、

彼は、そんなのはにああ　と簡単な返事を返すと先程までの言葉を紡ぐ様に話しを続ける

「…色んな事で悩み苦しんでいる哀れな小鳥…さ…」

「……………」

イタチの呟く様に紡ぐその言葉に理解が出来ず目を丸くするのは  
すると、イタチはそんな彼女の表情にクスッと笑いいつも通り、柔  
らかくこう言った

「…さて、仕事に戻らないと…なのは、また後でゆっくり話そう」

そう言ってイタチは素早く店の仕事にへと再び戻り始める

そんな優しいイタチの背中を黙って見つめるのは…

…謎に包まれてばかりの彼は果たして、自分の知らない、何を知っ  
ているのだろうか？

…これまで、彼と話してきて彼の人柄や優しさに触れたのはは、  
魔法少女である自分の事を、そして、自分とユーノが集めているジ  
ユエルシードについてイタチが既に知り尽くしているのではという  
疑惑が少なからず頭の中から離れないでいた

…彼はもしかしたら、何か重大な秘密を自分に隠しているのでは無いか…と

だが、今のなにはそんな事をイタチに問いただす等出来ない

…親しい間柄のイタチとのこの関係をなのはは壊したくない…

(…イタチさん…何者なんだろう…)

心の底でイタチに対する疑問を呟くのは…

彼女は一人、暫く沈黙したまま、働くイタチの背中を見つめたまま、なんとも言えない感情を抱えてその場で立ち尽くしていた…

-----

日が沈みかけ、綺麗な夕焼けが海鳴町を照らす夕刻五時…

一人の少年はとある人物を静かに波を立てる砂浜の近くにて探していた…

(…確か、この辺りの筈なんだが…)

…先程、訪れた翠屋という店で今回の接触するターゲットから他の人物に悟られない様に渡された白い紙…

そこには、簡単な文章の表記されており、現在自分がいる場所が合流地と記されていた訳だが、

それとは他に、何時の間にか場所を細かく表記された用紙が少年自身のポケットの中に忍び込まされていた

(…なんて奴だ…)

こんな、早技を身につけている人物に対して、最早少年は驚きの言葉しか出てこない…

少年はこれから接触する人物が只者では無い事を改めて実感した

そうしている内に、夕焼けが沈みかけた砂浜に腰掛けている一人の人物が彼の視界に入ってきた

…彼は哀しく儂げな瞳で沈みゆく、夕焼けを眺めている

クロノはそんな彼の元にゆっくりと歩を進め、静かに腰を下ろしている彼の側で立ち止まった

「…海の向こうに沈む夕焼け…か、随分とロマンチックだな」

「…そう…だな、久々にこんな綺麗なモノを観た気がするよ…」

彼の側で立ち止まったクロノの言葉に笑みを溢して応える男

そして、男は一息つくと砂浜から立ち上がり、彼に向かってゆっくりと口を開いて話し出した

「……自己紹介がまだだったね…」

立ち上がった彼はそう言っているとゆっくりと彼の目の前に右手を差し出す



「……うちはイタチだ……君は？」

「……クロノ ハラオウンです……」

自分の名前を名乗ると同時に差し出されたイタチの右手に左手で握  
手を交わすクロノ……

「……これが……管理局の執務官である彼と……罪人……うちはイタチ  
との出会いだった……」

少年と忍(前書き)

それじゃ…更新したいと思います(^O^)/

進歩しない駄文ですがヨロシクです…ではではm( ) ( ) m

## 少年と忍

浜辺で合流したイタチとクロノは暫くして、自分達の情報を交換し合い（イタチは自分の素性を多少ぼかしていたが）、

ひとまず目的とした事を聞けたクロノは複雑そうな表情を浮かべていた

「…魔導師、十六人を殺した…か…、君は何をしたのかわかっているのか？　うちはイタチ」

「…彼女の身を守る為だ、今更そんな言葉を言われた所で仕方がない」

クロノの問い詰める言葉に表情を曇らせて視線を逸らし応えるイタチ…

だが、クロノは人を手に掛けたイタチに怒る事はなかった

…イタチと魔導師達が交戦したであろうその時の状況、

少なからずそこそこ経験を積んだベテランな魔導師達が彼女…フェイト テスタロッサの使い魔を追い込んでいた事をクロノは知っていた

…だから、そんな連中が一同に殺す気で向かってきたならば、目の前にいる男が幾ら凄かろうが、十六人全員を生かしたまま気絶させるなど苦戦を強いられてしまつに違いない…

…殺されて当然…という訳ではないが、こればかりは正当防衛という他ないのだ…

それに、勝手に動いて捕まえるべき相手を殺害しようとしたのだ…部下が殺されたのもその指示を煽いだ上の自業自得である…

「とりあえず…彼等の死体は？」

「…消したさ、だが管理局の事だ…既に君以外に、犯人が誰かは目星が付いてるんだろうな…」

イタチは自分の掌を見つめ自嘲する様に笑みを溢してクロノに話す

そんなイタチの言葉にクロノは溜息を溢してゆっくりと口を開く

「…うちはイタチ…貴方は何故、あの翠屋で働いていたんですか？」

高町なのはとうちはイタチ…

彼等はまるで共通点が無く、普通なら出会う事などありはしない二人

だが、何故だか彼等は出会い、親しい中になっていた…

クロノの中ではこの事は最も頭の中で疑問に思った事である

しかし、イタチはそんなクロノに平然とした表情で淡々と答え始める

「…翠屋で働き出したのは本当に偶然だ…偶々、夜に彼女が一人で出歩いていたのを家に届けたら、彼女の両親達から気に入られてな…それで人手が足りない事もあってか、働かせて貰っている…」

平然と語るイタチの言葉に啞然とするクロノ、

すると、彼は深刻な表情を浮かべ、続けてイタチに対して質問を投げ掛ける

「…僕が聞きたいのはこれで最後だ…こことは別の世界で、君は人を何回も手に掛けたのか？」

「…ああ…そういう世界だったからな…こことは違って…」

イタチは深刻な表情を浮かべて訪ねてくるクロノに重苦しい口調で答えた見透かされた様なイタチの言葉に、クロノはああと短く返事をする

イタチはそんなクロノに対して呟く様に話しを始めた

「…少しだけある俺の知り合いの昔話をしよう」

夕焼けが沈む、海を眺めていたイタチの唐突な言葉に思わず目を丸くするクロノ

イタチはそんなクロノに構わずゆっくりと話しを始めた…

…ある所に由緒正しい優秀な一族がいた

自分達の家紋に気高い誇りを持ち、一人一人が強い絆で結ばれ結束された一族だ…

…そんな、一族の中で期待されていた一人の少年がいた…

何から何まで優秀過ぎる上で彼には今までに無い、重圧が押し付けられた…

優秀な能力故に今までに…妬まれ、…恨まれ…そして疎ましいと周りと孤立する事さえあった

彼は不器用だった…あまり表情を表に出さないから、あまり人間関係も良好とは言い難かったし…彼自身もそれを望んでなかったからかもしれない…

…だが、そんな彼にも親友が出来た、かけがえの無い理解者だった…

イタチが語り出すその話しに耳を傾けていたクロノにある疑問が頭を過る

…理解者…？ 友人だった？

ならば、その彼は今はもう既に生きてはいないのだろうか？

「…その方の親友は？　今は？」

思わずクロノは自分が抱いた疑問を話していたイタチに対して口に出していた

そしてイタチはゆっくりと話しを聞いていたクロノに寂しげな表情を浮かべ語る

「…さあ…どうなったんだろう…、ただ、俺はここに来てから、今話していた人物の様に友と呼べる者が少ないんだ…」

語っていたイタチはそう告げるとクロノの方へ視線を向け確認するかのように質問を投げ掛ける…

「…君も…そうなんじゃないか…って思ってね…」

イタチはクロノにそう言って優しく微笑み掛けた…



クロノはその投げ掛けられたイタチの言葉に返答を詰まらせる

イタチはそんなクロノの反応に少なからず心境が理解出来た

そう…何処かイタチはこの少年、クロノと自分の幼い頃が何処か重  
なっ  
て見えていた

幼い頃から、うちは一族の中で優秀と言われ続けて、

重圧を押し付けられたあの頃の自分に…

そして…優秀故に迫られた究極の選択…

裏切り者…と烙印を押されてもなお、イタチは自分が愛した国の平  
和  
を為すに犠牲となった…

何度…平凡な人並みの人生が送れたらと思っ  
た事  
だろう…

愛した国で弟と…そしてなにより家族と…

優秀というのはそれに伴い、それに応じた代価が存在する…

…期待…妬み…恨み…誇り…責任…憧れ…そしてそれらよっての  
孤立…

…容量良く、人間的に寛容で誰にでも楽しく付き合える…そんな人  
間ならば別に支えてくれる人がいるから構わないのだろう…

だが、お世辞にもイタチは特に…人付き合いというのは得意ではな  
かった…

それは、このクロノという少年にも当てはまり節がある…

管理局でのこの年での執務官という名の地位…本当に優秀な人材だ…

だが、自然と執務官としてのポジションに連れて孤立するのもまた  
必然…

彼にもユーノ スクライアという友がいることそして、母であるリ  
ンディ ハラオウンがいることが唯一の救いだらう

イタチは沈む夕焼けを見つめたまま、クロノに提案する

「…どうだろう？ 俺の友人になってくれないだろうか… 年上の俺が君にこんな事を言うのは正直、おかしな話のだが…他の連中より、君は信頼に置きそうな気がする…なにより真面目みたいだからな」

イタチはそう言って眺めていた夕焼けから視線を外しクロノに微笑み掛ける

クロノは何故この人物が昔話をし始めたかを理解した

似ている故に分かる事もある…、

恐らく自分にそう伝えたかったのだらうと…

「…貴方は、なんだろうな…本当に不器用な人なんでしょうね」

「…失礼だな…君もだろ？」

やれやれと言った表情のクロノの返答にそう言って返すイタチ

すると、クロノはそんなイタチに対して改めて頭を下げる…

そう、先日アルフに対して襲いかかって来た魔導師達についてのお詫びだ…

これだけは、はっきりさせておかなければならない

「…先日は管理局の魔導師が君達に対して、とんでもない事をやらかしてしまった…済まない…」

「…君は本当に真面目だな…いや、それよりも俺はその魔導師達に手を掛けたんだ…君に責は無いし、それどころか…俺が君に謝らなければならぬ事だ…」

イタチはそう言って頭を下げて詫びるクロノの肩にポンと手を添える…

すると、クロノは顔を上げ、肩に手を添えて来たイタチにゆっくりと語り出す…

「…貴方と最初に出会った時は、凄く冷たくて、…とてもじゃないが…こうやって会話が出来る人物だと思っていませんでした…」

「…それは、確かに否定しようが無いな…」

イタチは微笑み語るクロノに対して、自嘲する様に言う

そして、イタチは視線を彼から外し、再び海の方へ向くと提案するかの様に彼にある話しを持ち掛け始める…

「…なあクロノ…君にはこちらの情報がある程度用意したいと思う…」

「…情報交換…ですね…」

クロノの納得した様な言葉にイタチは肯定するかの様に頷き応える

…そして、イタチは懐からあるモノをひっそりと探りあるモノを取り出した

…クロノはイタチが懐から取り出したあるモノを見るや信じられな  
いとばかりに目を丸くした

…イタチが懐から取り出したソレ…

自分が回収すべき、その物質…

「…ジュエル…シード…」

クロノは絞り出す様な声でその物質の名を呼ぶ…

イタチはそんな彼に対してゆっくりと自分が考えている事を口で語り出す

「-----」

「-----!!!?!」

イタチの語るその話にクロノは驚愕した様な表情で声を荒げている

…海の波音が彼等の会話をまるで打ち消す様に浜に打ち上がる中…

ひとしきり、話しを終えた彼等は静かに会話を終了させる…

暫くして、本人に確認するかの様にクロノはイタチにへと言葉を掛ける

「君は…正気かい？」

「生憎だが、正気だ」

その言葉に、確認する様にイタチに言葉を掛けたクロノは静かに沈黙する

イタチはそんな彼に対して優しく微笑みゆつくりとその場から立ち上がる…

「…済まないな、とりあえず…今後の行動は今話した通りだ…、自己紹介したばかりだと言うのに突然の話に混乱させてしまったな…すまないクロノ…」

「…い、いえ…大丈夫です…こちらこそ、ありがとうございます…」

…謝るイタチの言葉に、思わずお礼を述べるクロノ

イタチはそんなクロノに対して優しく微笑み話し出す

「…今度、君とはまたゆっくり話がしたい…近いうちにまた会おう  
クロノ…」

「…そうですね、僕もまたイタチさんの話が聞いてみたいです…それじゃ…今日はこの辺で帰りましょうか…」

優しく微笑み提案するイタチの言葉に笑顔で返すクロノ

そうして…執務官…クロノ ハラオウンとつちはイタチは暫くして  
それぞれの帰路へと別れてゆく

イタチと別れて帰路へと道を歩いていたクロノはふと…今日出会う  
たうちはイタチの事を思い返す…

(…彼のあの話…まさか、そんな事を考えていたなんて思いもし  
なかつたな…)



そう…話とはイタチが提示して来たある提案の事である…

最初、聞いたその内容にクロノは思わず信じられずにいたが、嘘をつくメリットが無い事をイタチから悟らされ最終的には納得させられてしまった…

クロノは深刻な表情を浮かべながら、彼から持ち掛けられた話しを思い返す

(…ひとまず…僕を使って何やら悪どい事をやるつもりでは無さそうだ…彼の力量は今日改めて身に染みる程痛感した…)

…クロノは翠屋での事、そして、先日で行われたであろう話しを踏まえた上でそう結論づけた

…自分の今の力量は分かる…対峙した彼とは全くもって及ばない…

それに、今日彼は理解者として自分に接触してくれたのだ…

そんなイタチを裏切るという行動は彼には起こす事の到底出来ない

(…うちは…イタチか…)

クロノは心の中で呟く様に出会った彼の名前を挙げる…

…なんだか…いつもよりも帰る足が軽い…

クロノはそんな事を思いながらも日が暮れた海鳴町の夜空を見上げるのであった…

## 休息と忍（前書き）

うわぁ…遅くなりましたすいません（-\_-;）

今回は無駄無駄無駄ア！といった感じのもものでは〇（^ ^）〇

PS、最近ジヨジヨ集めました。ヤバく面白い！ちなみに今の所シーザーがお気に入りキャラです！

荒木の漫画はアアア世界ーイイイイ！！

## 休息と忍

これはイタチがクロノと接触して別れてから、数日後の話…

イタチは唐突にフェイトに対して提案するようにある話しを持ち掛けた

「…フェイト、今度の休日…アルフと一緒に遊びにでも行かないか？」

「…遊びに…ですか？」

イタチの唐突な提案に対して思わず首を傾げて聞き返すフェイト

イタチはそれに肯定する様に頷き、話しを続ける

「…ああ、フェイトは何処か行きたい場所とかあるのか？」

「…行きたい場所？」

イタチの問いかけにフェイトは色々な場所を思い浮かべながら深く考え込む

そして、何か思いついた様にひとしきり考え込んでいたフェイトは嬉しそうにイタチに自分の行きたい場所を告げる

「…うーん、なら！遊園地に行ってみたいな」

「…遊園地？」

イタチは無邪気に答えるフェイトに対して思わず聞き返す…

遊園地…は確か沢山の乗り物があるアミューズメントパークだったか

イタチ自身、あまりそんな所に…というより今まで一回たりとも足を運んだ事が無いので思わず返答に戸惑ってしまった

まあ、とりあえずどんな場所かは行ってみれば分かる…娯楽施設なのは間違いなさそうだ

イタチはそんな事に思考を巡らせつつ、遊園地に行きたいと告げたフェイトに優しく微笑み了承した様に頷いた

「…分かった、なら今週の休日に遊園地に行こうか…」

「…ホント！　ありがとうイタチ兄さん」

そう言って、フェイトは遊園地に連れて行ってくれると約束したイタチの首元に抱き着き嬉しそうにお礼を述べる

イタチはそんな嬉しそうに抱きついてくるフェイトの頭を優しく撫でてやりながら、リビングに座り雑誌を読んでいるアルフにへと視線を移す

「…なあ…アルフ、勿論君もくるだろう？」

「ん？　そうだね、せっかくだから一緒に着いて行くかな…」

イタチの質問に先程から読んでいた雑誌を手元から机に置きながら答えるアルフ

そんなアルフの返答にイタチはフェイトの頭を撫でながら、優しく

微笑んだ

あの一件から、つい、最近までイタチの事を警戒し、厳しく監視していた彼女なのだが…

イタチがフェイトに対して本当に大切にしている事、

そして、自分の事すらも気に掛けてくれている事をこれまでの彼の行動によって逆に悟ってしまった…

ジュエルシードを封印し集める為に行動を起こしている事、

その目的をイタチの口から言い当てられ聞かされた時は肝が冷えたが、

その事に関して、彼は何も咎めないままこうやって接してくれている

勿論、彼女としてもあれ程何も躊躇なく人を手に掛けて殺すイタチを警戒する対象として外すつもりは無いが、

彼自身のそう言った気遣いに触れた彼女はひとまず日常にもそっい

ったピリピリしたものをイタチに向けてギクシャクした関係にしよ  
うとするつもりは無かった

イタチとしても、アルフと険悪な関係を作り出してフェイトを悲し  
ませたくはない

そうだった互いの思惑があつてか、今はこの様に落ち着いた関係と  
なっている訳だ

アルフから、週末の予定の確認が取れたイタチは首元に抱き着いて  
いるフェイトに告げる様に話し出す

「…そういう訳だ、今週の日曜日に遊園地遊びに行くでしょう」

「…うん！ 楽しみにしてるね！」

優しく頭を撫でてくるイタチの言葉に満面の笑みを浮かべ頷くフェ  
イト

こうして、三人は休日に遊園地に行く事になった…

-----



フェイトと約束した日から一週間が過ぎて、彼女が待ちに待った日曜日  
の休日

三人は交通機関を利用し、一時間程時間を掛けて遊園地へと遊びに来ていた

フェイトは滅多に見せない無邪気な表情を浮かべて同伴者のイタチの腕を引っ張り先導していた

「…うわぁ沢山色んな乗り物があるよイタチ兄さん！」

「…そう言えば、フェイトと遊園地に遊びに行くのはかなり久々だったねえ」

イタチを引っ張り先導するフェイトの姿に思い返す様に呟くアルフ

…こういった彼女の表情はやはり、珍しいモノなんだろう、

普段から優しく大人しい彼女はこういった風に振る舞うなんて事は無いに等しい

それは、彼女と長い時間過ごしたイタチにも分かる事であった

イタチは自分を引っ張り先導するフェイトに視線を落とし、やれやれといった表情を浮かべて言葉を掛ける

「…フェイト、まだ時間はあるからそう急かさなくても大丈夫だぞ」

「あ、ごめんなさい…つい二人と一緒に遊園地に来た事が嬉しくて」

畏まる様にして、引っ張っていたイタチの服から手を引き、謝罪するフェイト

確かに、彼女がはしゃぐ気持ちも分かるしイタチも連れて来た彼女が喜んでくれて正直、嬉しく感じる

今まで、こんな風楽しく遊ぶ子供の様には出来ずに、ずっと容量良く礼儀正しい完璧な娘を彼女が演じる事を自然と強いられていたのだ

イタチはその事に関して、なんとなく理解は出来ていた…

…せめて、自分が側にいる時だけでも、彼女には肩の荷を降ろして

貰いたい

だから、イタチは畏まる様に自分の服から手を離れたフェイトの頭にポン と手を置くと優しく笑う

「そうか、なら早くフェイトが好きな乗り物に乗りに行くとしようか」

そのイタチの言葉に驚いた様に畏まっていたフェイトが顔を上げる

…彼が自分元に来るまで我儘なんて、出来る訳が無かった

楽しい時間も、アルフと二人で過ごした時間だけ

だけど、今は毎日が楽しい…何故なら、こつやって優しく包み込んでくれる彼が側に居てくれるから

アルフと一緒に私自身にとって、かけがえの無い人…

多分、私は彼の事が本当に好きで、好きで、仕方ない

完璧で礼儀正しくて、母さんが求める様な娘の様に私が憧れる優しいお兄さん

本当に自分は彼に救われている、何度、その彼の温もりが欲しくて甘えた事だろうか…

フェイトは頭に手を置いて優しく微笑み掛けるイタチにゆっくりと口を開いて答え始める

「それじゃ…」

-----

遊園地に入ってからあのやり取りから数時間程経過した

イタチはベンチに据わっているフェイトに近くの売店で買って来たフランクフルトを手渡していた

あの後から、フェイトから引つ張り回されて色んなアトラクションに同伴で乗り込んでいたイタチだがこうやって昼時になりようやく

落ち着けた訳だ

「ほら、アルフ君の分だ」

「お、サンキューイタチー流石気が利くねえ」

そう言つてフェイト同様にイタチから手渡されたフランクフルトを受け取りお礼を述べるアルフ

イタチはそんな彼女の言葉にどう致しまして と微笑みながら返す

そんなアルフとのやり取りから暫くして、イタチは自分がして来た腕時計にへと視線を向けた

「もうすぐだな…」

「? もうすぐって何が？」

時計を見て呟くイタチの引っかかる言葉に訊ねるフェイト

だが、その疑問は数分もしない内に無くなってしまった

「…あー！ 居たぁイタチさーん！」

何処かで何度も何度も聞いた事のある様な少女の声

しかも、あろう事かその声の主は自分が兄と思っているイタチの名前を呼んでいる

フェイトは思わずその声のした方へと視線を向ける

「…あの子は！」

そう彼女の視線の先に居たのはなんだか無愛想そうな少年と、何度もジュエルシードを巡って争っていた筈の高町なのはの姿だった

イタチの方へと駆け寄ってくるのはは言葉を続けながらこちらにへとやってくる

「昼時に待ち合わせて言ってたか…ら…」

…どうやら、向こうも気づいた様だ

フェイトの姿をみつけた瞬間、駆け寄って来た脚が自然とゆっくりとなっていた

そして、イタチはそんな驚愕な表情を浮かべる彼女等を横目に何事も無かった様に振る舞い始める

「…おや、遅かったじゃ無いか、クロノになのは」

「…済まないな、ちょっと着くのに手間が掛かってしまった」

そう言つて、何事もなく振る舞うイタチの言葉に何気なく返すクロノ

アルフは何やら警戒した様な面持ちを示し、クロノと何事もなく会話をするイタチをギリリと睨んだ

イタチはそんな彼女に対してすかさず、最近クロノから教えて貰い使える様になつた念話というモノを入れる

『…心配なら要らない、俺の友人だ…今回は管理局とは関係なく来てもらっている』

『…信用できんのかい？ 大体、あんた私達が戦ってる魔法少女に  
会わせるなんてなに考えてるんだよ！』

アルフはイタチの釘を刺すような言葉に警戒を強めた様な口調で問  
いた

しかもこの時、対面している黒髪の少年が管理局の人間だと、イタ  
チの念話を通して初めて知った

『何…フェイトに危害を加える様な妙な輩なら俺が直ぐに排除する  
…問題ないだろう？』

至って冷静な口調で警戒を強めているアルフに返すイタチ

まさしく、そう言い張る彼は本当に躊躇無くやってしまいそうで恐い

アルフはそれ以上、冷静な口調で答えるイタチに問い詰める事は出  
来なかった

そして、そんなアルフの不安を他所に改めてこうやって対面した幼  
い二人の魔法少女達の間にはなんととも言えない雰囲気漂っていた



イタチは言葉を互いに言い出せない二人に対して、代わりに話し出す

「…そう言えば紹介がまだだったな、俺の義妹のフェイトだ」

「い、イタチさんの義妹！」

イタチの信じられない言葉に声を裏返らせて驚愕するなのは

それと、他に隣にいたクロノも同じ反応をしていた

すかさず、クロノはイタチに対して念話で呼び掛ける

『…イタチ、聞いてないぞ』

『まあ、成り行きでこうなった気にするな』

イタチの冷静なその言葉に黙り込むクロノ

確かに大して気にする事では無い様な気もしない訳では無い

これ以上、深く聞き入る必要性が無いとクロノは判断したのだ

イタチは屈み込んでフェイトと同じ程の視線に合わせると優しく微笑みながら話し出す

「そう言う訳だ…今日は俺の友人達が同伴してくれるみたいだから、いっぱい遊んでくるといい…それに俺もちゃんと付き合おうさ」

イタチのその言葉に少しだけ動揺した様な素振りを見せるフェイト  
確かにいきなり、先日まで戦っていた相手と親しく遊ぼうと提案された所で躊躇してしまうのは当たり前である

だが、そんな彼女の心情を察してか、それとも元々彼女に興味があったのか、

イタチが呼んだ少女の方からフェイトに対して右手を差し出し嬉しそうに微笑みながら自己紹介を始めた

「えっと、これで会うのは初めてじゃないよね、私、高町なのはっ  
ていうんだけど、貴女の名前聞かせてもらえるかな？」

「…フェイト テスタロッサ」

恥ずかしそうに手を差し出してくるのはに名乗るフェイト

そんな様子を見ていたクロノはイタチに対して再び念話を使用する

『全く…彼女を説得して連れてくるの大変だったんだぞ、ユーノから友人として紹介してもらったから信じてもらえたものを…』

『恩にきる、クロノ…』

そう言って、念話で愚痴を溢す彼にお礼を述べるイタチ

そして、同伴していたアルフはなのはの身体を見てある事に気づく…

「…そう言えば、あの喋るフェレットの姿が今日は見えないね」

「あー、えっとユーノ君はちょっと用事があるみたいで今日は家で留守番してるの」

困った様に頬を掻きながら、疑問を口にしたアルフに答えるのは  
実の所、ユーノは今日に限ってなのはの母親や姉から連行され、最  
近流行りのペット専用の衣類による着せ替え人形みたいにされてい  
るだとか、

なんとも、哀れな事だと彼の友人であるクロノは思った、  
ちなみに彼が人間だと知っているのはこの場においてイタチとクロ  
ノだけである

「…まあ、それはまた酷い話だ」

クロノから念話でその話しを聞かされたイタチも思わず彼に対する  
同情を込めて、そう呟いてしまった

すると、そんな呟いていたイタチの視線の先にある女性の姿が入っ  
てきた

「あらあら、クロノ、彼が貴方が話してた友人さん？

ずいぶんかっこいいお兄さんねえ」

そうやって微笑みながらクロノの後ろからこちらにへと近づいてくる女性

勿論、イタチは面識も無く全く知らない人物だ

この遊園地に呼んだ覚えもなければ接触した経験も無い

自然とイタチは苦難を仕舞ってある自分のジャケットの懐にへとそつと手を忍ばせた

こう言ったイレギュラーはイタチにとっても充分、警戒に値する

幾ら、女性であるとはいえフェイトやアルフに危険を及ぼす様な人物を近寄らせる訳にはいかない

だが、イタチの前にいたクロノが恥ずかしげに真っ赤な顔をして振り返る様子を見るとゆっくりと苦難から手を離す

「…恥ずかしいからそう言う風に呼ぶのやめてくれよ、頼むから」

「いいじゃない、顔真っ赤にして可愛いわねえ」

互いに親しげに会話を交わしクロノをからかう様に笑み溢す女性

…クロノの姉かなんかだろうかとイタチは思わずその若々しい顔つきを見て考える

見事なプロポーションで黒いスカートに女性用の赤いジャケットが見事に映えてとても魅力的だと言っても過言では無い姿だ

だが、こうしたイタチの考えを覆す様な言葉を次の瞬間に彼女は口にする

「あ、自己紹介が遅れてごめんなさい、クロノの母親のリンディハラオウンといいます」

「…え？」

我ながら間抜けな声を上げたなとこの時イタチは思った、

見た目を大きく裏切ってくれる様なその言葉には流石に驚きを隠せないのも仕方が無い

同じく、声を上げたなのはやフェイトも同様に驚きを隠せないでいたらしい、

…まあ、そうだろう

口にするのは大変失礼だろうが、あの無愛想な顔つきのクロノからは想像出来ない様な人物だ

一般的に見間違えても仕方が無いといえるだろう

…だが、以前見たなのは母親の桃子さんも随分と若い様な気がしたのだが、まさか若い風貌の母親がこんな風にあちらこちらに居られると…なんというか自分の眼を疑ってしまう

忍として、そういった外見を見抜ける様に精進しなければならない

未熟なものだな…俺も…

イタチは自己紹介を終えた彼女を見て、ふと自嘲気味に笑みを溢しながらそう感じた

そして、自己紹介を終えたリンディは早速、自分前にいるイタチに近づいて優しく微笑みそつと手を掴む

単純に親交を深める為の握手というものだ

「いつもクロノが世話になってるみたいね、ありがとう」

「いえ、彼には俺も感謝してますよ本当に助かってます」

そう言っつて、警戒を完全に解いて柔らかく微笑みリンディに答えるイタチ

人柄的にも、彼女はここで問題を起こす様な人物でない事もクロノの反応や自分に対する対応を見ていれば分かる

クロノはなんだか、自分とリンディとの会話が恥ずかしい様だがこの際イタチは気にしない事にした



そして、リンディはイタチの手を掴んだまま続けて話しを始める

「…それで、実はちょっと貴方に聞きたい話があるのだけれど少しだけ時間よろしいかしら？」

「…ええ構いませんよ」

イタチは手を握り提案するリンディに頷き答える

大方、顔には出さないがフェイトとアルフについてだろうとは予想がついていた

管理局の人間なら当然自分から聞き出して知りたい情報もそこそこあるだろう

そして、イタチはリンディの手からそっと手を離して自身の近くにいるフェイトとなのはに優しく微笑みかける

「そういう訳だ…俺は暫く彼女と話しがあるから、アルフとクロノと一緒に遊んで来るといい、」

何、あそこのテーブルに俺達は座ってるから、何があれば直ぐに君達の所に駆けつけて来る…」

「…うん、わかった行く、フェイトちゃん」

「え、う、うんわかった」

屈んだまま話すイタチに対してフェイトの腕をつかんで楽しそうに駆け出してゆくなのは

イタチはそんな二人の後ろ姿を見たのちにすかさずクロノとアルフに視線を移す

フェイトとなのはと違って、二人はなんだか仲はあまりよろしくなさそうだがとりあえず彼女等を今任せれるのは彼等しかない

「…ひとまず、彼女達をお願いするな二人共」

「…こつこつ役回りは慣れてるから別に構わないよ私は、でもこいつはねえ…」

「初対面の人物に対して失礼だな君は…」

そう言っつて、アルフの言動に顔を険しくするクロノ、

まあ、なんだかんだで二人は彼女達を見るついでに遊びに行っ  
てく  
れた…

どうやら、面倒見が良いのは二人共、共通だったらしい

イタチはこうしてリンディと二人っきりとなり遊園地にある野外の  
テーブルと席に座る

とりあえず、まどろこっしい質問などは面倒なだけだ、

イタチは対面している彼女にバツサリと訊ねる事にした

「…それで、俺に聞きたい事とはなんですかリンディさん」

「あら、単刀直入ね…」

そう言っつて、訪ねてくるイタチに微笑みながら答えるリンディ

だが、二人の間には既に見えない様な何か重さがあった

互いに貴重な情報を持ち合わせている事は分かる…

ただ、彼等はまだ会ったばかりで信用を置ける人物かと言われれば  
そうでは無い

クロノとは違いこちらは大人だ、彼も優秀であるが彼女は彼の親で  
ある

…油断ならない

そんな事を互いに思いあつてか、いつしか二人の間には重たい空気  
と静かな沈黙が流れ始めていた

だが、いつまでもこんな風に沈黙しているだけでは何も始まらない

暫くして、そんな重苦しい沈黙を破る様にリンディはゆっくりと口  
を開きイタチに向かい話し始める

「…ジュエルシードと彼女、フェイト テスタロッサについてよ…」

遊園地でのクロノの母リンディとイタチとの出会い…

これがもたらす情報は果たして彼にどういったものを知らせるのだ  
らうか…

遊園地での休息はまだ終わらない

遊園地と忍（前書き）

更新遅れてしまつてごめんなさい（。 - | - 。（

相変わらずの駄文（笑）ですが宜しくです

なかなかしんどかつた（ - 。（ - ;

最近、私はイタチの他にも暁メンバーの中でもサソリと飛段が好きです

作中には多分こないかもしれませんが、サソリの作品もいつか書いてみたいなあ

だつて人間なもの

by みつお

## 遊園地と忍

遊園地の野外で二人の沈黙がリンディによる一言で消えてから数分後

イタチは彼女にフェイトと出会った事の経緯と関係を彼女に話した

それと、引き換えにイタチはリンディの存在について、管理局に付いての事情を話して貰った

話しを聞き終えたリンディは清々しい表情で対面しているイタチに微笑みながら話し出す

「でも、意外と貴方はもつと本来ドライな方の人かと感じただけ  
ど」

「…思っていたより違っていましたか？」

イタチは苦笑いを浮かべて感想を述べるリンディに言う

確かに無愛想で感情を表に出さないイタチは誤解されやすいが、冷

たい人物では無い

何よりも平和を愛し、戦争を嫌う優しい人柄の人物である

「…あまりそれは好ましくない反応だ、外見で人を判断するのは良く無いぞ」

「ごめんなさいね、そうね、人を見かけで判断するのは失礼よね」

イタチの言葉を肯定し自分の非を認めて頷くリンディ

すると、彼女は品定めする様にイタチを見つめ始める

それに対してイタチは彼女のその行動に疑問を抱き、言い難そうに口を開き訊ねる

「…まだ何か？」

「いや、そう言う訳じゃ無いんだけどね…なんででしょうね、改めて貴方を見ると本当に魅力的な男性だなって思ってたね」



ウツトリと見惚れた様にイタチに微笑みながら語るリンディ

確かにイタチは容姿が整っていて、その上物腰が落ち着いていて頼り甲斐のある人物だ

クロノと仲が良いのもリンディにはなんとなく頷けた

…だが、それだけじゃない

彼は何かとてつもなく大きな悲しみの様な何かを背負い込んでいる様に彼女には感じられた

時折、話しているうちに何度か見せる虚無感が漂うイタチの瞳

夫を失ったあの頃…いや恐らく今の自分もしている様な深い哀しみがそこしれない眼

恐らく、彼にはそれ以上の何かがあるとリンディに薄っすらと感じさせられた

しかし、リンディのその言葉にイタチは視線を下に落として呟く様

に話し出す

「…買い被り過ぎですよ、俺の手にはもう何もありません…汚れて  
いるんですよ、人として」

「…そう、」

深刻に哀しげな表情を浮かべて語るイタチのその言葉にリンディは  
それ以上詮索するのはやめた

どうやらイタチが背負うそれはリンディが思っていたよりもずっと  
深い闇らしい

しかし、視線を落として話していたイタチは微笑み付け足す様に彼  
女に明るく話し出す

「だけど、フェイトになのは…あの娘達は、こんな俺にも優しく微  
笑んでくれるんです、

なのははこの間、先生に褒められたと喜んでいまし、フェイトは夕  
飯を作る手伝いをしてくれました…

…些細な事ですが、俺にはとても幸せなんですよそれが」

リンディはイタチが語るその話しに黙って耳を傾けていた

…些細な幸せ

彼の話すその言葉には重さがあった

普通の何気ないやり取りや気遣い、だけでもそこには間違いなく繋がりがあ

彼女等がイタチにとつてでも大切な存在という事がリンディには良く伝わってきた

「…貴方やっぱり魅力的な男性だわ、本当に…」

リンディはそう呟くと語るイタチの手にそつと自身の手を添える…

突然、目の前のリンディから手を添えられ目を丸くして驚いた表情を浮かべるイタチ

そして、リンディはイタチに対して優しく微笑み付け足す様に話を紡ぎ始めた

「貴方が困った時は何かしら力になってあげる、

クロノから聞いたけど貴方は管理局には、あまり好感を持ってないみたいな感じらしいから、困った事があれば私が貴方に個人的に力を貸して上げるわ」

リンディはイタチの耳元に近づいて、囁く様にそう告げる

イタチにはイマイチ、自分に協力してくれると言った彼女の意図が理解できなかった

彼女が自分に告げたそれは何もメリットが無いと言っても良い行動に等しい

…偽善？ それとも何か裏がある？

まあ、どちらにしても彼女の力が後盾の無い自分にとってとてもありがたい事は間違いない

それに、彼女が協力してくれると言ってきてきているのだから、無下にはできないだろう

一応、感謝しておかなければならない…

「それは、助かります 自分に出来る事は限られてますから」

イタチはそう言って手を添えてきたリンディに微笑みながら応える

…すると、テーブルを挟んでやり取りをしていた二人の視界に遠くから数人の人物がこちらにへと向かってくるのが見えた

すぐにそれが連れてきたなのはとフェイト達だと把握したイタチはリンディが手を添えている右手をそっと引いて近づいてくる彼女達にへと視線を移す

「イタチさーん」

イタチの姿を見つけて声を上げながら手を振りながら近づいてくるなのは達

イタチはそれに対して軽く片手を挙げて、彼女達に応える

「…どうやら、話しは終わりみたいね、残念」

「…フフ、そうみたいですな 思いのほか色々と話せて楽しかったですよ」

「あら、私もよ…今度は個人的に会えたら嬉しいけど？」

そう言つて妖しく微笑み、妖艶な雰囲気椅子に腰掛けるイタチに傾げながら訊ねるリンディ

だが、イタチは左右に首を振り彼女のそれに口を開き儚げに答える

「…俺は次に貴方には逢えるかどうか分かりません、生憎、友人の母親に好意を抱くのは筋違いというものと思つてますので」

「あら、クロノも多分貴方みたいな人なら文句は無いと思うのだけれど…」

腰掛けていた椅子から立ち上がろうとするイタチの言葉に自分の考えを述べるリンディ

だが、イタチは断固としてその言葉を曲げようとする事は無かった

…何故なら、

「…俺はもう人に好意を抱く事は出来ません、愛した女性が今も心の中にいます… 自分の手で殺した」

「…!？」

イタチの静かに語った信じ難いその言葉にリンディは思わず目を見開いた

…今、この若者はなんと云っただろうか、

愛した女性を殺したと言わなかっただろうか、

リンディは放たれたその言葉がとても信じられないことに戸惑いを隠せずにいた

イタチはそんな動揺した表情を浮かべる彼女を見て、さりげなく付け足す様に話し掛ける

「…冗談ですよ、ともかく今は余裕が無いのでそう言った時間は取

れそつに無いんです」

「…え、あ、冗談だったの？ びっくりしたじゃ無い」

慌てたリンディの様子にクスクスと口元を人差し指で抑え微笑むイ  
タチ

しかし、微笑んでいる彼の心中はそうでは無かった

…自分はいったい何を口走ったのだろう

今更、こんな他人にこんな事を話した所でどうなる訳でも無い

…無駄なだけだ

それどころか、警戒されるに決まっている

それとも、罪悪感に満たされているこの心の内を話して開放したか  
ったのか？

…話しにならないな



イタチは自分がとった意味の成さない情報を彼女に話す事について  
自虐的な自問自答を繰り返す

そして、ぬるま湯に浸かっていた結果だとしても、これは愚かな行  
動だったとイタチは反省した

暫くして、そんなくだらない彼女とのやり取りの会話がひとしきり  
終わった所で気付けばなのはとフェイト達が既に自身の側にいる

フェイトはすぐさま自分の裾を掴みなんだか分からないが頬を膨ら  
ませていた

何やら御立腹の様だ…

何か自分は彼女の機嫌を損なう様な事をしただろうか？

隣にいるのはも苦笑いを浮かべていたのは言うまでも無い

イタチはすぐさま、彼女が頬を膨らませている事について問いかけ  
る事にした

「どうした？ フェイト」

「…折角遊園地来たのに兄さんと全然遊べて無い！」

優しく問いかけるイタチに速攻で答えるフェイト

確かに…なのは達に任せたままりンディと自分は話し込んでた訳だから当たり前ではあるのだが

とりあえず、非がある事は間違いない彼女を遊園地に誘ったのも他ならぬ自分だったのだから

イタチはとりあえず困った様に微笑み、申し訳なさそうに話し出す

「…それはすまなかった、確かに遊びに来たのに勿体無いな」

イタチはそう言って頬を膨らませて御立腹のフェイトを優しく撫でる

そんな様子を後から来て見ていたアルフは頭をイタチから撫でられているフェイトの様子を見て何やらニヤニヤと笑みを浮かべていた

「フェイトってホントイタチの事好きだよね、あ、あとなのはだっけ？ あんたもか」

「…ふえ！ なんで？」

急にアルフから話しを振られて動揺するのは、

すると、イタチは動揺するのには視線を移して首を傾げて訊ねる

「…なんだ？ なのは遊園地はあまり好きではないのか？」

「い、いやそうじゃなくてですね…えっとなんと言うか…」

イタチの問いかけに人差し指を付き合わせて照れ臭そうに顔を紅くするなのは

そんな光景を見ていたアルフは付け足す様にイタチに説明し始める

「…あんたも鈍チンだねえ、なのはとフェイトはあんたが居ないから遊園地の乗り物に乗ってもなんだかうわの空だったんだよ、びっくりしたよ、絶叫マシンにあんな仏みたいに悟った表情で写真に写ったの見たの私始めてだよ」

そうやって、溜息を吐いて呆れた様に二人を交互に見ながら話すア  
ルフ

当人である二人はなんだか気恥ずかしそうに顔を赤くしながら、沈  
黙している

ふと、先程からげっそりとしているクロノの姿にイタチは気づいた

「…そう言えば、クロノどうしたんだ？一体？」

「…彼女達に付き合っつて絶叫マシンにやられたんだよ…暫く休憩  
させて貰っつ」

クロノはそう言うつとイタチが先程まで座つていた椅子に力無く腰掛  
けグツタリとテーブルに伏す

この時ばかりは、彼に押し付けた事は悪かつたなつとイタチは薄つす  
らと思つた

そして、フェイトは強引にイタチの手を強く引いて、微笑み話し出す

「イタチ兄さん、あそこで写真撮る事が出来るみたいだから記念に皆で写真撮ろっ?。」

「あ、ああ…記念写真か、確かに良さそうだ」

イタチはそう言ってフェイトから引つ張られて写真を撮っている人物の場所にへと向かう

勿論、楽しそうに笑う彼女とイタチの背後からはなのはとアルフが追ってきている

そして、イタチは早速、写真を撮っている人物に話し掛けた

「…あのすいません、写真を一枚撮りたいのですが、頼めますか?」

「…ん? いいですよ、四人ですね 準備が出来たらそこに並んで下さい」

カメラを手に取り、指示する人物に頷き了承するイタチ

彼等はそうして、カメラを持っている人物の指示通りにそれぞれ、場所に立ち始める

そして、イタチの右腕にフェイトが嬉しそうに微笑みながら抱きつく

「えへへ…」

イタチの右腕に掴まり照れ臭そうに顔を若干赤くしながら満足そうな表情を浮かべるフェイト

「あーズルい、フェイトちゃんばかり、私もー」

右腕に抱きつくフェイトを見て、なのはも自分もとイタチの左腕に抱きつき始める

急な彼女の行動にイタチはバランスを崩して揺れるが、すぐに身体を持ち直しやれやれといった表情を浮かべて彼女等にされるがままの状態となっていた

そして、カメラを持つ目の前にいる男性はシャッターを手に掛けイタチからの合図を待つ

アルフは勿論、フェイトの隣で写真に写る為かいつも以上にニコリと良い笑顔を浮かべていた

どうやら、既にカメラに写る準備はバツチリの様だ

そうして、全員の準備が整った事を確認したイタチは静かに頷きシヤッターを手に掛けた男性に合図を出す

暫くして、シャッターのパシャリという音と明るいライトが光る

「はい、撮れましたよー」

そう言って、写真が撮れた事を軽くイタチ達に伝える男性

イタチはカメラを手に持つ男性に近づいて撮れた写真を貰った

フェイト達も写真を手渡されたイタチの側にへとすぐさま近づいて撮れた写真を覗き込む様に確認する

「あ、上手に撮れてるじゃないか二人共」

「ホントだ、綺麗に撮れてる」

アルフが言つたとおり自身が写っている写真を確認して、安堵の言葉を溢すのは

全員が写真の確認を終えた頃にイタチは撮って貰ったそれを自身の懐にへと仕舞いながら話し出す

「…とりあえずこれは俺が預かっておこう、」

「わかった、それじゃ頼むねイタチ」

そう言つて懐に写真を仕舞うイタチに任せるアルフ

二人も同じく頷いて、その撮れた写真をイタチに預かって貰う事に賛成した

信頼と注意力のあるイタチなら、写真を預かって貰うには最適なのはこの二人にもわかつているからだ

記念写真を遊園地のアトラクションで落としたりしないとは思つが、まあ一応、イタチに預かって貰うのが一番彼女達の中で安心感が持てる



「…それじゃ兄さん、行こう!」

「そうだよ、フェイトちゃんの言う通り早く行く、イタチさん!」

「あ、待ちなつてフェイト! なのは!」

写真を撮り終え、元気良く懐に写真を仕舞っていたイタチの手を引っ張るフェイトとなのは

アルフが急かすフェイトを呼び止めるが二人は聞いておらず、楽しみにイタチの両腕を引いてリードしていた

彼女等に連れ回されているイタチは困り顔で微笑んでいるが、仕方が無いと割り切っているのか彼女達になされるがままとなっていた

イタチ自身、あまりこつこつしたフェイト達に連れ回される事は別に嫌な事という訳ではない

むしろ、そもそも彼女のこつこつした顔が見たいが為にこの遊園地に連れて来たのだ

彼女が喜んで笑ってくれているなら、自分が今日をより楽しい思い出にしてやらなければならないだろう

フェイトもなのはと遊園地で遊んでいる内に何処か打ち解け合っている

非常に良い傾向だ…

フェイトには友人が少ないから、彼女と仲良くなった事を機に沢山の交友関係を持って欲しいものだ

イタチは嬉しそうに自分を連れ回す二人を見比べながら、静かにそう感じた

それから、イタチはフェイト達から連れ回されて色々な乗り物やアトラクションに足を運んだ

お化け屋敷、メリーゴーランド、ジェットコースター等、大体メジャーな遊園地乗り物は勿論、

他にも遊園地屋内にある小さな水族館やプラネタリウムといったものを見て回った

最初に、フェイト達から連れ回されて絶叫マシンに乗ったクロノは回復するのに時間が掛かったものの、屋内の施設を回る時には無事に回復してイタチ達と合流し、共に見てまわる事ができた

何気に彼がプラネタリウムでの星座に詳しくかったり、水族館での魚についての豆知識が豊富だった事は余談である

まあ、なにはともあれそれ等をイタチ達が回っている内に既に時間は夕刻頃となってしまふ

イタチと一緒に一日中遊園地を遊び回ったフェイト達は最後の締めにと遊園地の中で一番目立つ観覧車で最後にする事にした

ここで、なのはとフェイトがイタチと一緒に観覧車に乗りたいと言出しジャンケンで決める事となった

結果は今日の所はフェイトが勝つたらしい、なのはは羨ましがつたものの、潔くイタチと一緒に観覧車に乗る事を諦めフェイトに譲った

そして、順番が回り二人で観覧車に乗り込むフェイトとイタチ

「ではリンディさん、あの三人を宜しくお願いします」

「はい、任せてイタチ君 それじゃフェイトちゃん彼と楽しんでらっしゃいね」

「はい！ それじゃ行って来ます！」

観覧車に乗り込む二人に軽く手を振りながら見送るリンディ

そして、観覧車の扉を閉められたイタチとフェイトは互いに向き合う様に座る

イタチ達を乗せたまま徐々にゆっくりと上へ上へと向かう観覧車、

観覧車に乗り込んで暫く時間が経過したぐらいにフェイトはゆっくりと口を開いてイタチに話し出す

「…イタチ兄さん、今日はありがとうございました」

「？ どうしたんだ改まって…」

フェイトの唐突なお礼に対して首を傾げ、微笑み訊ねるイタチ

彼女はそんなイタチに対して今、自分が考えている心境を言葉とし紡ぎ話し出す

「私がこんな風に今日なのはと遊び回ったのも…それにあんな風にクロノ君やリンデイさんに逢えたのも全部イタチ兄さんのお陰…」

「それは俺が勝手にやった事だ…何もそんな大袈裟な事でもない」

そう言つて、何やら落ち込んだ様子で自分に対して感謝してくるフェイトに謙遜する様に述べるイタチ

それと同時に元気の無くなったフェイトに思わずイタチは疑問を抱く

急に落ち込んだりしていったいどうしたのだろうか…？

確か先程まで遊園地では楽しみに振舞つて、とても満足そうだった筈だ

特にフェイトが落ち込んだりする原因にもイタチは一切、思い当たる節は無い

すると間を置いて、疑問を抱いているイタチにフェイトは自身の心

境を淡々と語り始めた

「私は…イタチ兄さんみたいになんでも出来る訳でも無いから、羨ましくて、母さんも私がイタチ兄さんみたいになんでも出来て優しい娘だったらって思ってるんだろ？…って…なんか見ていたら悔しくて」

落ち込んだ表情で淡々とイタチに自身の心の内を明かすフェイト

イタチは静かに黙ったまま淡々と語る彼女のその言葉に耳を傾ける

自分自身に対するコンプレックス…、

フェイトにはフェイトなりに良い所がある彼女の側にいてそれはイタチにははつきりと分かっている

自分やアルフにチカラを与えてくれるあの明るい笑顔

それに、優しい心遣いやひたすらに頑張る姿

これは、誰もが持ち合わせている訳では無い…

だが、そんな色々な良い所を持っているフェイトは自身の母親からただ、ひたすらに認めてもらいたいと思っている

だから、今の彼女にとってはなんでもこなし、なのはやクロノから認められてる自身の目の前に座っているイタチが憧れる様な完璧な姿に見えていた

勿論、そんなものはフェイトの錯覚である

それは、やはり最近のジュエルシードの回収率や母親からの冷遇の酷さからか、彼女には自信というものが削り取られたせいかもしれない

今、彼女の側にはアルフや自分がいるがやっぱり自身の母親からの愛情に餓えて仕方が無いのかと、

淡々と語るフェイトを前にしてイタチは一人、自身の頭の中で思案していた

そして、イタチは自分みたいな人間になれたらと語っていたフェイトに優しく顔を見合わせて…こう問いかけた

「…俺の事を疎ましいと思うか？ フェイト、」

「…え」

唐突に投げかけられたイタチの言葉に間の抜けた様な声を上げるフェイト

だが、直ぐにそれが自身にとって目の前に座るイタチが邪魔で仕方が無いという意味だと理解したフェイトは慌てて左右に首を振りそれを否定する

「…ち、違うよ！ 私はただイタチ兄さんがなんでも出来て羨ましくて……」

「…そして、それができないと感じている自分が嫌で俺を見ていると更に悔しくて腹立たしくなる？ そうだろ？」

「そ、それは！…！」

否定するフェイトの言葉に間髪入れずに解釈した言葉を投げるイタチに彼女はそれ以上、言い返そうとは出来なかった…

イタチのその言葉が完全に自分の的を射ている訳では無い、



しかし、そう考えてしまっている自分がいるのも少なからず事実である

フェイトにはイタチに言い返せそうな言葉が見つからなかったのだ  
なんとも、一方的な酷い感情をイタチに話してしまったのだらうと  
フェイトはこの時になって思い返し後悔した

それから、押し黙ったフェイトに対してイタチは視線を下に落としながら淡々と語り出した

「…フェイト、お前と俺は血は繋がっていない、だが兄妹だ…」

イタチはそう言って重い口調でかつて、自分自身、そして、血が繋がった大事だった唯一無二の兄弟に言った言葉を口に出す

まるで、それは彼女をその過酷な運命を背負わせてしまった弟と重ねるかの様に…

「…お前の越えられる壁として俺は…」

話を区切るイタチは落としていた視線を上げて、優しくフェイトの眼を見つめて優しく微笑みながら言葉を紡ぐ…

その時の眼はかつて無いほど温かく優しくかった

遊園地での楽しい出来事が儚く…頭の中から消え去る様に、

楽しかった今日一日の最後にイタチの放ったその言葉がフェイトの中に深く刻みつけられた

「…俺はお前と共にあり続けるさ、

例え憎まれ様ともな、それが兄貴ってもんだ…」

フェイトはそう語るイタチの微笑みに啞然とすると同時に、自身の胸の中で何かに強く締め付けられた

先程まで、自分は少なからずイタチに対して自身の中にある嫉妬した感情を話した

それは醜いと言っても相違ない

しかし、彼からその言葉を聞いた途端に彼女の中からはそんな感情はもう霧散してしまった

それは、イタチが自分のそれを受け入れてくれたから…

フェイトは優しく微笑んでくれたイタチのその言葉に救われた様な気がした

そして、フェイトは溢れる様にかすれた声でこう言った

「…ありがとう…イタチ兄さん」

夕陽がもたらす紅色に照らされた遊園地での忍と金髪の魔法少女とのひと時、

金髪の少女の新たな運命的なある少女との出会い

そして、観覧車での罪人である三つ巴の眼を持つ忍との儂いひと時

沈む夕陽に照らされた遊園地で忍びと過ごした金髪の魔法少女は何を思い何を感じたのか

それは彼女にしか、分からなかった

覚悟と忍(前書き)

はい、今回は早めに更新したいと思います(^o^)/

最近ナルティメットストームを買ったんですがイタチの格好良さは  
やっぱりハンパないですね

それではどうぞーo(^ ^)

## 覚悟と忍

あのクロノとの接触から二週間が経ち、

イタチは変わらずフェイトとアルフと共に一時、平穏とも取れる日常を過ごしていた…

翠屋でのアルバイトは勿論、こなしている、高町なのはとの関係は非常に良好なものと言って良いだろう…

そして、クロノ ハラオウンとは相談役として度々会話を交わし接触していた…接触するたびに彼から得る情報はイタチにとっても貴重なものと言って良いだろう

そうやって平凡な日常を過ごしていたある日の事だ

「あ、あの兄さん…温泉に行きませんか？」

「…？ 温泉？」

フェイトからイタチは唐突に旅行の話を持ち掛けられた

なんでも、その目的地に自分が手に入れたいモノがあるとか、

まあ、イタチはそのモノがなんであるかは把握しており、止める理由も無かった為、アルフと共に引率として彼女に着いて行く事にした

…そして、旅行先での出来事

夜遅く、フェイトは旅館を抜け出し、ジュエルシードの回収へと向かって行った

そんな、彼女をイタチはばれない様に後を付ける…

暫くして、空中で舞う閃光を見かけたイタチはその足を止めた

そこには、いるはずの無い高町なのはの姿、

それと、彼女と戦うフェイトの姿があったのだ

…だが、イタチはその戦いには干渉せず、彼女達の戦いを眺めていた

…ぶつかり分かりあう

イタチはその戦いにはそんな意思が働いていた様に感じていた

恐らく、その意思の持ち主は高町なのは、彼女のモノだろう

そうして、イタチは彼女達の戦闘が自分が割り込まなくとも收拾がつくと悟り、何事も無かった様に旅館へと戻った

こうした、彼女等の度々の戦闘やジュエルシードを手に入れる為のぶつかり合いに対してイタチは悪化しないかを多少目に掛けながらも、決して無粋な横槍を入れる事だけはしない事になっていた

彼女達はあやまって分かり合おうと足掻き成長しているのがイタチには理解出来た…

ああいった関係はいずれ理解者として、自分を支えるモノになると知っているからだ



イタチは彼女等の関係はそういったモノだと感じていた

成長する彼女等を暖かい眼差しで見守る事が彼が取る最良の選択

それを阻むつもりは今のイタチには微塵も無かった

そうしてフェイトが誘った旅行も終わり、一時の休息が訪れると思  
っていたある日の事

「…今日は随分と帰りが遅いなフェイト…」

イタチはその日、フェイトの為に料理を作り彼女等の帰りを待つて  
いた

いつもならば帰ってくる時間帯なのだが、今日はいつにも無く帰りが  
遅い

イタチはリビングの机に座ったまま、その上に置かれているプレゼ  
ント用に包んで貰った二つの箱へと視線をやり深い溜息を溢す

(…今日は彼女達に恩返しを込めてこうやって準備したんだが…な)

イタチは何処か残念そうな表情を浮かべたまま自分が用意した料理とプレゼントを儂げな視線で見詰める

これ等はイタチがこれまで翠屋で働いたお金で用意したモノだ…

いつも、いつも、世話になっているフェイトとアルフにへと…

彼女達にはいつかお礼がしたいと思っていたイタチはこうした形できとりあえず恩返しをするつもりでいた

イタチはふと窓の外へと視線を移す

(…雨…か…)

…確か、自分が彼女と出会った時もこの様な雨が降る夜ではなかっただろうか

ずぶ濡れで倒れ伏していた自分を彼女が優しく保護してくれた

アルフが自分の事を気に掛けてくれて、この家に共に住まわせて貰

った

あれから、暫く経つが彼女達には何時の間にか感謝しきれない程の恩が積み重なっていた

(…幸せ、なんだろうな今が)

かつて、自分が感じていた満たされた暖かい気持ち

いつもいつも、自分の背中を追いかけてくる可愛い弟…

家に帰ると、優しく微笑み出迎えてくれた綺麗な母

そして、自分が息子である事を誇りに思い、期待や厳しさ…一族の誇り、それに優しさを秘めた父

イタチは自分が歩んだ道を後悔はしていない…

その背中にはちゃんと誇り高きうちは一族の家紋、それと…家族の

想いを背負っている

(…フェイトの前から消える事になった時…俺は彼女に何かを残せるだろうか…)

イタチは今まで、出会った人々の事を思い浮かべる

フェイトは必死に今もジュエルシードを集めている事だろう、

だが、それは明らかに彼女が望んでやっている事では無い…

クロノが話してくれたフェイト テスタロッサの秘密、Fプロジェクト

命を使い己の欲だけの為に作り出された人…

あの話しを聞いただけで…イタチは思わず人間の醜さを改めて知らされたような気がした

(…そういった人間はどこにでもいるものだ、致し方無い事だが…  
歯痒いものだな)

哀しみが籠もる瞳を静かに閉じて、一人で待つリビングの席で沈黙するイタチ

すると、次の瞬間…ボタンと激しい物音を立てて玄関が開く音がリビングにいたイタチの耳に聞こえてきた

イタチはすかさずその音がした玄関の方へとリビングの椅子から立ち上がり向かう

すると、そこには…

「…はあ、…はあ…イ…タ…チ…」

ビシャビシャで雨に濡れ、傷だらけでフラフラになっているアルフがボロボロになっているフェイトを担いでなだれ込む様に玄関で倒れていた

イタチはその光景に啞然とするしか無かった…

何故、こんな風に彼女達が傷つかなければならないのか…

一体誰が――――

そこで、イタチの思考が止まり、哀しげな表情を浮かべた

悟ったのだ、彼女等にこんな仕打ちをする人物に該当する者はイタチの中では一人しか居ない

…ひとまず、イタチはなだれ込み玄関で息を切らしているアルフに冷静な口調で問いかける

「…どうした何があったんだ？」

「…あの女にやられたんだよ、ちくしょう!」

息を切らすアルフは悪態をついて、吠える様にイタチの問いかけに答える

やはり、考えていたイタチの予想通りの返答だった

そう、アルフが名前を呼ぶあの女とは…今までフェイトに関して酷い扱いしかしていなかった彼女の母親、プレシア テスタロッサの事である

イタチはプレシアの情報は以前、アルフから聞き及んでいた…

フェイトにジュエルシードを回収させている元凶と言っても過言ではない

…彼女から詳しく事情を聞くとフェイトはプレシアから呼び出され回収したジュエルシードを提示した所、一方的な暴力を受けたのちにアルフの元に帰って来たらしい、

しかも、プレシアはフェイトを散々痛みつけたにも関わらず、その怒りの矛先を自分にまで向けて来たとか…

なんとも、自分勝手に横暴な仕打ちだろうか…

アルフの話しを黙って聞いていたイタチはその嘆かわしい話に沈黙するしか無かった

身勝手…、自分の欲望の為に心優しい彼女等をこんな目に合わせる権利等あるはずも無いだろうに…

「イ…タチ…兄さん」

意識を取り戻したフェイトの弱々しい呼び声…

彼女は目を開けて直ぐに哀しげな表情を浮かべるイタチが視界に入り、直ぐに繕う様に作り笑顔を浮かべた

「…へ…へ…、ちょ…っと失敗しちゃっ…た」

…そのフェイトの言葉を聞いた時、酷くイタチは心が痛かった…

何故、こんな風にフェイトが傷つかなければならないのか理解出来ない…

そんな、哀しみが今のイタチの心をいっぱい満たしていた

暫くして、沈黙していたイタチは静かにボロボロになった彼女等に近づきゆっくりと腰を落とす

儂げな瞳で彼女達を捉えて優しく微笑むイタチ…



—————そして…

「…良く、ちゃんと帰って来てくれた…」

ポロポロの二人を包み込む様に両腕で抱き寄せ安堵した様に呟いた

そのイタチの唐突な行動に思わず驚いた表情を浮かべるアルフとフ  
エイト

イタチは抱き寄せたそんな二人に淡々と語り出す…

「…正直、二人がこうなって帰って来た事は凄く哀しい…、  
だが、ポロポロになってもこうやって無事に生きて帰って来てくれ  
た、俺にはそれがとても嬉しい…」

抱き寄せられイタチの優しく語られるその言葉に思わず目頭熱くな  
るフエイト、

そうして、彼女の眼からはポロポロと次第に冷たい雫が流れ始める…

まるで、それは今まで溜め込んでいたモノが彼女の中から外に全て溢れ出てしまいそうに感じられた…

イタチは片手で抱き寄せた手で優しく何度も撫でてやりながら優しく告げる

「我慢…しなくてもいいんだぞフェイト」

「…っわああああああん！」

泣き叫ぶ様に声を漏らしながら、イタチの胸元で涙を流すフェイト

そんな、フェイトを横目に、同じくイタチに抱き寄せられたアルフは彼に呟く様に静かに囁く

「…ゴメンね…イタチ、ありがとう心配してくれて嬉しかったよ」

「別に…構わないさ…」

イタチはそう言って抱き寄せた涙を流すフェイトの頭を優しく撫で

ながら微笑む

それから暫くして、

ボロボロになってイタチの胸の中で一時間程散々泣き叫んだフェイトは疲れた様にグツスリと眠ってしまった…

イタチはそんな彼女を抱き運び、優しく自分が引いた布団の上へと寝かせる

余程、酷い目にあつたのだらうとイタチは一時間もフェイトの泣き様を見てそう思った

精神的にも、肉体的にも彼女はまだ幼い…

イタチにはそんなボロボロで泣き疲れきつたフェイトの姿が痛々しく感じられて仕方なつた

一方、傷だらけのアルフはイタチが心配するのに対して、大丈夫だと答え、イタチは落ち着いた彼女に改めてフェイトについての話しをリビングでする事にした

「…今までもこの様な事があったのか？」

「…そうだよ…あの女はあぁやってフェイトを平然と傷つけてるの  
な…」

そう言って、泣き疲れて布団で寝ているフェイトを横目に悲しげに  
答えるアルフ

それに対して、イタチはそんな悲しげに答える彼女に深刻な表情を  
浮かべていた

…決心は着いた、あんな彼女の顔など自分も見たくは無

恐らく、これがもう潮時なんだろう

イタチはアルフ同様にグッスリと寝付いているフェイトに視線を向  
ける

それはまるで、兄と呼んで嬉しそうに笑う彼女の顔を思い返す様に…

イタチはアルフに告げる様にゆっくりと口を開いて話し出した

もう、ここからは後戻りは出来ない…

「…アルフ…」

フェイトを見つめ、沈黙した空気の中で唐突なイタチの呼び声に反応するアルフ

そして彼女はイタチの元にへと、視線をゆっくりと戻す…

刹那、視線を戻したアルフは言い表せないような悪寒が背筋を通り過ぎた

そう、そこにはあの日常で見ていた様な優しいフェイトのお兄さん等では無い

「…悪いが彼女の母親、プレシア テスタロッツサの所まで案内してくれないか…」

冷たく、氷点下の様な雰囲気身を纏い眼が据わっているその姿…

先程まで、優しく自分達を迎え入れてくれたその人物がリビングのテーブルに両手を組み、感情も何も込もっていない声色でそう要求してきた

アルフはそんなイタチの姿に思わず生唾をゴクリと飲み込む

最早、イタチのそれはアルフに有無を言わせないモノがあった

アルフはイタチの身に纏うそれに完全な恐怖の感情で満たされている

自分が無意識の内に身体がその恐怖に反応し、気づけば凍りついた様に硬直していた

動物的勘というものだろうか…

そんな危機的勘を感じ取る場面に直面したアルフは見据えてくるイタチに対して、静かに縦に首をゆっくりと振って応えるしか無かったのだった

雨の降る中、雷鳴が響き渡る…

それは、まさしく、嵐に近い何かが起こる前触れの様に

だが、それをこの場にて知る者は

三つ巴の眼を持つ罪人にしか分からなかった…

## 決断の忍（前書き）

では、早いながら更新させて頂きます（＾・＾）／

毎回感想ありがとうございます嬉しい限りです

さて、そろそろこの小説も盛り上がりを見せて来ました

わたくしは現在、クリスマス編の方も頑張っております

では最後に一言、

…イタチ兄さんは最高です

…それではm（＿）＿（＿）m



## 決断の忍

フェイトとアルフがボロボロになって帰ってきてから一日が過ぎた

この日、イタチは早速ある人物と接触、そして情報を得る為に待ち合わせをしていた

待ち合わせの相手はもちろん時空管理局執務官、クロノ ハラオウ  
ンである

今回、彼とイタチが接触する理由

それは間違いなくフェイト テスタロッサの事だった

彼女の母親であるプレシア テスタロッサの情報はよく知るの  
は管理局のデータベースを扱う事の出来るクロノだけ、

イタチはフェイトとアルフがボロボロになって帰ってきた事もある  
てか、早速プレシアについての情報を彼から得ようと考えたのだ

昨晚、彼に電話してわかったの一言で返事をしてくれた事はイタチ  
にとって本当に感謝のしようが無いほどありがたい事だった

暫く時間が経ち、イタチの待ち合わせ場所に一人の少年が現れる

「やはり、君は来るのが早いな待たせてしまったか？」

「いや何、数分程度前に来たただけだ…あまり待つてはいない」

そう言って、イタチは自分の元に現れたクロノに微笑む

そうして、二人は互いに情報交換すべく、場所を移動し始めた

イタチはその間に、幾つかの質問を彼にへと投げかけていた

ひとまず、管理局の動向…

彼等がどう動く予定があるのか、それによっては自分のプランが大きく揺らいでしまう可能性が出てきてしまう

それはイタチにとってもあまり好ましくない

そういった事を未然に防ぐ為にも、管理局の今後の行動経緯を把握

しとく必要がある

クロノはそんなイタチの心情を知ってか知らずかわからないがとりあえず、自分が得ている情報を彼に話し始めた

「…ひとまず、管理局は僕と母さんにこの事件を一任しているみたいだから、君が考えている様なイレギュラーな出来事が起こる確立は低いとを考えてくれて構わないよ…、君には既にこちらに協力してもらっている様な状態だ、下手に動いて何か不具合があればこちらも困る」

「…そうか、それは助かる」

現状の管理局の情報を話すクロノにホッと胸を撫で下ろす様に感謝するイタチ

そして、とりあえず待ち合わせ場所から移動し終えた彼等は本題に移り始めた

まずは、プレシア テスタロッサがどういった人物か

それと、彼女の持つ力と敵を殲滅する為の攻撃手段

そして、彼女の人柄

それらの情報を綿密にイタチはクロノから聞き出した

クロノから話しを一通り聞き終えたイタチは全て把握し、納得した様に話し出す

「…まあ、それ位ならば多分問題は無いだろう」

「…それ位って、管理局員が彼女にあれだけ手こずらされているのに…君はそれ位で済みますのか、まあ、別に構わないが」

プレシアの情報を聞いたイタチの反応に思わず顔を引き攣らせるクロノ

プレシアはあれでも大魔導師とかつては呼ばれた女性だ

数ある魔法使いの中でも相当の手練れと言っても過言ではない

だが、イタチはそれを大した事が無いと一言で言って切り捨てたのだ

驚かすにはいられないのも無理は無い

すると、クロノから自分の得たい情報を聞き終えたイタチは静かに自身の懐から何かを取り出し始める

「…これが、今回の分だ」

「…ああ、わかったでは頼む」

クロノはイタチから差し出されたそれを素早く自身の懐に仕舞い、

それと同時に交換する様に代わりにイタチに何かを手渡す

イタチは静かにクロノから手渡されたそれを自身の懐に収めた

暫く、二人の間に沈黙が漂う

すると、クロノはイタチに対して話しを切り出しはじめた

「…何か…あったのか？」

クロノは顔を覗かせる様にイタチに訪ね始める

そう感じたのはイタチが浮かべていた何処か元気の無い表情から…

クロノはいつものイタチの様子とは違い彼が何処か後ろ目ている様に暗く見えていた

イタチはそんな自分の事を案じてくれているクロノにおもむろに話しをし始めた

「…クロノ、実はお前に頼みがある」

「…え？」

イタチのその唐突な言葉に眼を見開き間の抜けた様な声を上げるクロノ、

イタチはそんなクロノを他所に淡々とその頼みを語り始めた

クロノは彼のその話しに黙って耳を傾ける

-----  
それから、いったい何分経っただろうか…

その内容はクロノを驚愕させる様な驚くべきものだった

クロノは鬼気迫る様な勢いで声を荒げてイタチに反論する

「…そんな事！できる訳無いだろう！いったい何を考えてるんだ君は！」

「…クロノ、察して欲しいこれは君にしか出来ない事なんだ」

声を荒げて反論するクロノを冷静に宥める様に声を掛けるイタチ

だが、彼は断固として首を左右に振った

「そんな事をできる訳が無い！イタチ！」

「クロノ…」

声を荒げていたクロノは冷静さを取り戻し思わずハッと我に戻る

そして、次に彼が眼にしたモノが信じられずに言葉を失った

「…頼む…この通りだ…」

それは、地面に頭を着けて綺麗に土下座をしているイタチの姿だった

クロノは声が出ない…

年下である自分に対してここまで必至に頭を下げて、恥を晒しているイタチにこれ以上、断る事は出来なかったのだ

クロノはすぐさま自分に土下座をしているイタチに駆け寄りかれの身体を起こす

そして、イタチの身体を起こすクロノは哀しそうな表情を浮かべていた



「…イタチ…そこまでして君は…」

もうクロノはその願いを断る事なんて出来なかった

地面から立たせられたイタチはそんな彼の表情を見て優しく微笑みこつ言った

「…もう十分なんだクロノ…」

イタチのその言葉にクロノは急に目頭が熱くなり、指で眼を抑えた

抑えていた彼の感情が溢れてしまったからかもしれない

イタチはすかさず、彼に自分のズボンのポケットからハンカチを取り出し手渡す

だが、クロノは大丈夫だと言わんばかりにイタチのそれを手で制した

「いや…大丈夫だ取り乱してすまない」

「…そうか、」

クロノのその反応に安堵した様に胸を撫で下ろすイタチ

そして、イタチは最後にクロノにあるモノを取り出して手渡した

その物体にクロノは眼を丸くする

イタチはそんな彼に静かに取り出したそれを手渡しながら微笑みこ  
う言った

「…全ての事が済んだら、これをフェイトとアルフに渡してほしい  
…渡しそびれたからな」

そう言って微笑むイタチを他所に手渡されたその物に視線を落とす  
クロノ

それは、彼がお礼にと彼女達に用意していた可愛らしいリボンで収  
められている小包みだった

クロノは静かに頷き、イタチから手渡されたそれをしっかりと受け  
とった

そして、イタチは踵を返してクロノに背を向けこう告げた

「…頼んだぞ、クロノ」

そう一言だけ言い残して、疾風の如くイタチはその場から消える

取り残されたクロノはその手渡された二つの小包を見つめながら溢す様にこう呟いた

「…馬鹿野郎…」

それは、風の音にかき消され虚空へと消えてゆく

クロノは暫くして、イタチが消える様に立ち去ってしまったその場から踵を返して去って行った

-----

それから数日、

怪我を負ったフェイトはイタチの看病もあつてか体調がどんどん優れて完治に近いまでになっていた

この様子を見届けていたイタチはもう十分大丈夫だと安堵する

それと同時に、彼女にはもうこれ以上、苦しんで欲しくは無いと心の中で思いながらイタチはその数日間をフェイトと過ごしていた

そして、これはそんな彼女が完治して数日後の早朝の出来事

イタチはアルフと共にプレシアの元に向かおうと用意をし玄関先で靴紐を結んでいた時だった

「イタチ兄さん！」

不意に後ろから声が聞こえてきた

その声の主は紛れもなくフェイト テスタロッサのものだった

イタチはそんな声を掛けてきた彼女を他所に黙々と靴紐を結びながら彼女に訪ねる

「…なんだフェイト、今日は俺は忙しいんだ」

無愛想に後ろから声を掛けてきたフェイトに振り返りイタチは彼女を軽くあしらおうとする

だが、フェイトはそんなイタチの反応に頬を膨らませて不機嫌な表情を浮かべる

するとフェイトはイタチに不満そうに呟き始めた

「…今日は一緒に買い物行ってくれるって約束事してくれたのに」

「今回は大事な用事なんだ察してくれ、なんならなのはでも誘えばいいだろう?」

イタチは駄々をこねるフェイトに困った様な表情を浮かべ靴紐を結び終えて立ちあがる

だが、フェイトはそんなイタチに哀しげな表情を浮かべ視線を下に

落とした

そんな彼女の眼頭には薄っすらと涙がみえる

フェイトは自分に構ってくれないイタチに対して抱いた疑問をぶつ  
けた

「…イタチ兄さんは私のこと、うっとおしいのかな…」

フェイトの発したその言葉にピクリと反応するイタチ

この時、イタチはフェイトの心情を理解した

彼女はいままで、自分の母から必要とされずに道具として扱われて  
いたのだ

手のひらを返した様に自分の事を無下に扱うイタチの反応を見て、  
多分、フェイトは自分からも必要とされていなくなったのではない  
かと感じたのではないだろうか

玄関先で立ちあがり、薄っすらと涙目のフェイトを見たイタチはそ  
う感じた

そんな姿は何処か懐かしいものを重ねてしまった

いつも、修行を見てくれとせがんで来た幼い頃の自分の弟

その姿と今のフェイトがイタチには同じに見えてしまった

イタチはやれやれと困った様な表情でフェイトにこちらに来いと手招きする

そのイタチの行動に眼を丸くするフェイト

だが、彼女は自分がイタチに必要とされていると分かると嬉しそうに彼にパタパタとスリッパの音を立てながら駆け寄った

しかし、彼女が駆け寄ってくるのがわかったイタチは二本の中指と人差し指を立てる

—————そして、

「…許せフェイト、また今度だ」

駆け寄った彼女の額を軽く小突き、優しく微笑みそう告げた

フェイトは突然イタチから額を小突かれ眼を丸くする

「…ふえ」

キョトンとした表情でイタチに小突かれた額を抑えながら声を溢す  
フェイト

イタチはそんな彼女の様子にクスリと笑みを溢しながら、優しく彼女の頭を一回だけ撫でてやる

そして、ゆっくりと彼女の頭から手を離れたイタチは視線を下に落とし、改めて告げる

「それじゃ行ってくる…」

フェイトを背向けたまま微笑み玄関の扉を開いて外へと出て行くイ  
タチ



彼が開いた玄関の扉はイタチが外に出て手を離すと同時に、自然と閉まってゆく

取り残されたフェイトは彼が小突いてくれた額を摩りながら何処か嬉しそうに笑みを溢していた

「…えへへ…」

…嬉しかった、自分はまだ彼に嫌われてない

それはイタチが自分の額を軽く小突いていつもの様に微笑んでくれたのがなによりの証拠だ

ただ彼が自分の額を小突いたあの時、彼は何処か哀しそうだった様な…

まあ、それは流石に自分の考え過ぎかもしれない

フェイトはとりあえず引つかかるその事を自分の考え過ぎというので片付けとく事にしといた

そして、イタチに構ってもらった彼女は上機嫌で玄関先から部屋へと戻ってゆく

だが、この時フェイトは予想もしていなかった

これが、大波乱の予兆になるという事に…

金髪の魔法少女と優しい兄とのひと時の時間それは、夢の様に儂く過ぎ去ってゆくのであった

## 残酷な忍（前書き）

…では、更新したいと思います…

今回はグロデスク、もしくは読んでいただけで苦痛に感じる描写があるかもしれませんが…

それが大丈夫な方どうぞ…

雰囲気的にはNARUTOのBGMから、預言者、飛段、紅炎…そして帰郷を掛けながらお読み下さい

アルフを連れてプレシアの元に向かったイタチはいかに…

ではでは…m( \_ \_ )m

## 残酷な忍

クロノと約束を交わしてフェイトを家に置いて来たイタチ

そして彼はアルフを連れて彼女の母親の場所へ早速向かう事にした

もう迷いは無い断ち切った…後は突き進むだけ

イタチは今朝、自分を送り出してくれたフェイトを思い返しふと笑みを溢した

いつも通りに、自分に微笑みながら甘えてくる彼女

また、自分が頑張る為の彼女の勇気をその彼女の笑顔から貰った

そうして、イタチは先導されるがままアルフの後を追う

彼がアルフに頼んで移動したそこは、静寂な空気が支配する、開けた空間が広がる場所、

うちはイタチはアルフに道案内を頼みその場所にへと足を運んでいた

「ここか…?」

感情らしいものを一つも込もっていない、氷の様な無表情で自身の前に歩いて先導しているアルフに問いかけるイタチ

そんな冷淡なイタチの問いかけに対して、アルフは冷汗を頬に垂らしながらも静かに頷いて応える

「…そうだよ」

イタチの問いかけに肯定する様に静かに頷くアルフ

そのアルフの言葉にゆっくりと辺りを見渡し、鮮明に研ぎ澄まされた瞳で周囲を確認するイタチ

それはかつて、暁時代、そして、木の葉にいた時と同じ生きるか死ぬかの死線を潜り抜けてきた忍の眼

冷たく、温度など無い

そんなものは戦場において、自身の危険を招く一つであるから

イタチにはそれが良く分かっていた

そのせいかピリピリと張り詰めた空気を身に纏う今のイタチはアルフにとって恐怖感を与えるものでしか無い

この状態の彼からは温かさも、いつも通りの優しさも感じられない

あの時、自分を助けてくれた時と同様に今の彼は容赦なく敵と認識した者を簡単に葬り去る

全てがそうである訳では無いだろうが、アルフにはそう感じられた

「確か、時の庭園だったか…まあ別にそんな事はどうでもいいが」

呟く様にその場でそう冷たく語るイタチ

次の瞬間、プレシアへの道案内の為に彼の前に歩いていたアルフ横から風を切る様に見えない何かが通過した

パタリと彼女の髪の毛が数本地面にへと、ポタリ、ポタリと落ちる

彼女はその現象に思わず驚いて、自身の足をピタッと止める

そして、切れた自身の髪の毛を手に慌てた様に真横を通過した何かを辺りを見渡して確認する彼女

突然の出来事に何が起こったのか理解出来ない

だが、そんなアルフに対してイタチは静かにそして先を急かす様に促す

「何をしてるんだ？ 早く先を急いでくれないか？」

「…ちよ、今私の横から何かが！」

慌てた様に先を急かすイタチに切れた自身の髪の毛を見せつけながら話すアルフ

すると、イタチは静かに眼を瞑りある方向へ指差す

沈黙したまま彼の指先へと視線をゆっくりと向けるアルフ、

…するとそこには

「…え？」

明らかに自分等の道の障害となるであろう敵と認識できる二体の人形が額を貫かれて倒れていた

彼らの額に突き刺さっているのは漆黒で鋭利な苦無

勿論、これを放った人物は明らかに一人しかいない

間の抜けた声を上げていたアルフは慌てて、後ろにいたイタチにへと視線を移す

「…あんたもしかして」

「…油断大敵…だアルフ、もう君はここまでで構わない」

イタチはそう言うと静かに閉じていた眼をゆっくりと開く



三つ巴に輝く瞳

イタチのそれを見た途端にアルフが彼に対して反論する事はなかった

自分がこの後、彼について行けば明らかに足で纏いになる事が把握できたからだ

アルフはイタチのその言葉に納得した様に頷いた

「…分かった、ここで待ってるけど、でも何かあったらそっちに駆けつけるからね、あんたが死んでフェイトを悲しませたく無いし」

「…要らない心配だな」

アルフの言葉に静かに冷淡な口調で返すイタチ

彼はそう一言、アルフに話すと彼女に背を向けたまま、時の庭園の深部へと足を進め始める

そして、イタチはアルフの前から刹那、風のような速さで消え去ってしまった

アルフを置いて、暫らく疾風の様な早さで移動したイタチ

プレシアが居るといふ城の様な場所の内部へと軽々と侵入した彼は黙々と目標である彼女に接触すべく脚を進めていた

この場所は侵入者に対して随分と凝ったセキュリティが敷かれていた様だったが一流の忍のイタチの前ではまるで役に立つはずもない彼が移動して来た道を辿ってみると、ただの破壊尽くされた木偶人形が倒れているだけだ

(…所詮はこんなものか)

イタチは自分の進行を妨げようとした侵入者用に完備された、この城のセキュリティを思い返しながら心の中で呟く

幾千もの任務に戦争、そして殺し合いの死線を見てきたイタチにはこの城の護る様に張り巡らされたセキュリティを破るなど造作も無いことだった

忍の世界において騙し合いや罠に相手を引き込み惑わせる等はセオリー、

それだけの場数、経験をイタチは持ち合わせている

まさに、当然と言える結果だろう

暫らくして、時の庭園にある城の奥の玉座がある部屋の中へと侵入し脚を止めるイタチ

どうやら、ここが彼女の母親、プレシアテストロッサの居る部屋らしい

(…成る程、侵入者である俺を観察しているつもりか…)

イタチは未だに侵入した自身の目の前に現れない彼女の考えている事を頭の中で静かに考察する

すると、イタチは自身が持ち合わせている三つ巴の眼を全開にし、その部屋の隅々まで見渡すと鼻で軽く嘲笑う

「…隠れるなら殺気ぐらい消したらどうだ？ プレシアテストロッ

サ

イタチがそう口を開きそう沈黙した空気が漂う部屋で呟いた瞬間、

何か分からないが、閃光の様なものが何処かから放たれて、

イタチのいた場所を一瞬にして焼き払ってしまった

そして、ゆっくりと玉座の前に人影の様なものが現れてその姿をはつきりとさせる

「…あら、侵入者さん口だけみたいね、私の人形達を簡単に殺ってしまったから警戒していたのだけど」

現れた人影のその正体は女性、大人びた雰囲気、黒い衣服に身を包んだ女性だった

彼女こそ、フェイトを生み出した母親、そしてこの時の庭園の主であるプレシアテストアロッサだった

彼女は自身が先ほど侵入者を雷によって焼き払った場所を玉座の前にて見下しながらつまらなさそうに呟く

だが、余裕の表情を浮かべていた彼女の顔色はその雷で焼き払った場所が煙で晴れた途端に変わる

「…勘違いもいい所だな、たかだかそんなモノで仕留められるなんて思っていたのか…？」

そこにいるのは無傷の侵入者である男の姿、

あの眼にも止まらない攻撃をどうやって回避したというのか

煙が晴れた場所に君臨する三つ巴の眼を見開いている男の姿にプレシアは疑問を抱いた

だが、すぐさま持ち前の冷静さを取り戻すと男に対して、この場所を訪れた要件を問いかける

「…貴方はいったいどちら様かしら？ この時の庭園に何の用？」

「愚問だな、貴女は既にご存知だと思いが、俺の名前も彼女とどういった関係なのかも…」

そう言つて、問いかける彼女に対して冷たい視線を投げかけ返すイ  
タチ

イタチは以前から、何者かからの視線を幾度か感じた事があつた

最初は憶測であつたがその視線に気づかれない様に辺りを調べてい  
る内に先程のアルフに襲いかかるうとした木偶人形が見つかった

それが、この場所に来て彼女の物だとイタチは確信し、視線の主で  
ある彼女だという事が把握に至つたのだ

その事をイタチから聞かされたプレシアは眼を見開いたまま黙り込む

この男は只者では無い…

そういつた長年、管理局と渡り合つて来た自分の中にあるプレシア  
の勘がそういつていた

そうしている内に、イタチは言葉を紡ぐ様に冷たい口調で彼女にこ  
う言い放つ

「…今回は彼女をまた随分と酷く痛みつけたみたいだな…満足だっ

たか？ 自分の娘の偶像を痛みつけるのは？」

「…なんですって？」

イタチから聞き捨てならない言葉がプレシアの耳に入り、彼女はピクリと反応すると怒りの込もった声色で蔑んだ様な視線でこちらを見てくるイタチに言う

だが、イタチはそんな彼女に対して言葉を続ける

「…Fプロジエクトだったか？ 自分勝手な都合で娘のクローンを作り出した拳句に自己満足の為に罪の無いその作り出した彼女へと暴力を振るう…笑えるな…」

「…何がおかしいのよ」

イタチの言葉に納得出来ない様な口調で問いかけるプレシア

自分が今まで娘の為に全てを費やしてきた事を馬鹿にされたようなことを言われた気分だった

娘を奪った忌まわしい事件と管理局の上層部、

自分が今までどれだけ苦しんできたのか、こんな男に上辺だけ語られて無性に腹が立った

プレシアは小馬鹿にした様な口調で語るイタチに向かい胸の内をプチまける

「：貴方なんかにはねえ！ 一生分からないわよ！どれだけ私が苦しんできたか、ドン底に居たなんて！」

「：そんなもの当たり前だ」

「なんですって！」

自身の胸の内の不満をイタチにぶつけるプレシアは平然と返す彼の言葉に噛みつく様に声を荒げる

だが、イタチは平然とした様子で彼女に対して感情も何も込もっていない言葉でこう返す

「俺が今話しているのはフェイトについてだ：貴女の過去など正直どうでもいい：失って辛かった？ だから？ それだけの話だ」



「…そう、貴方はそういう人間なのね」

イタチの冷徹なその言葉に最早語るなど無に等しいと悟ったプレシアは開いていた口を静かに閉じる

すると、語るのをやめた彼女の姿を確認した、イタチは更に付け足す様に彼女にこう言い放った

「…俺は寧ろ奪った方の人間だ」

「…なら、語るまでもなかったわね！」

そう言つて、イタチと対峙していたプレシアは彼に向けて雷の魔法を飛ばす

だが、イタチはそれを持ち前の反応スピードと跳躍力で回避する

無論、プレシアは彼を逃がさない持ち前の技術で翻弄し、バインド系の魔法を連発する

プレシア放たれたそれを華麗に掻い潜るイタチ、

すぐさま、近距離へと彼女との間合いを詰める

だが、彼女も無闇にイタチを間合いにへと詰めさせたりはしない

自身の魔法が搔い潜られたのを確認するとすぐさま距離を取り遠距離から連続して魔法を放つ

単なる会話から一変…

既にそこは互いに引かない凄まじい戦闘域へと成り代わっていた

やはり、大魔導師と呼ばれた事があるプレシアは並大抵の魔法使いでは無い

戦闘中に観察していたイタチは改めてそう肌で感じた

しかし、それはあくまで管理局やこの世界で魔法を使える者達の間だけで…

このプレシアとイタチの戦闘もすぐ様決着にまで発展する

「…ようやく捕まえたわよ!!」

そう、イタチがバインド系の魔法に捕まってしまった事により…だ

プレシアは回避していたイタチの動きに合わせなんとか一つ、イタチの脚をバインドで拘束、

そこから身動きが止まったイタチを完全にバインド系の魔法で捕らえる事に成功したのだ

彼女は氷の様な微笑を浮かべて、捕まえたイタチに一步步近づいてこう言い放った

「…無様ねえ、あれだけ言った割にはあっけなかったわ、所詮はこの程度なんて笑物ね」

「……………」

勝ち誇った様にバインド系の魔法で捕らえたイタチにそう言い放つ  
プレシア

だが、捕らえたイタチは沈黙したまま彼女に対して何も答ええない

彼女は捕らえられたイタチがもうあきらめて何も言い返すつもりは無い、そう考えた

そして、無慈悲に自身の持つデバイスを静かに構える

「…そ、何もないならもう死になさい」

そう言つて、魔法を彼女が放とうとしたその時だった

バインドで拘束していたイタチに何やら違和感が感じられる

すると、刹那、彼女の耳元で何かが囁いた

「…無様だな」

思わずその声にビクリと身体が反応するプレシア

だが、彼女が気づいた時はもう既に遅かった

魔法を繰り出そうと構えた右腕が、突如現れたそれに肘と膝で挟まれる

肘と膝に挟まれ関節がミシミシと軋む音を出すプレシアの右腕

「…え？」

起こった事が理解出来ず、その場で間の抜けた様な声をこぼすプレシア

「……………そして…」

不意に何もなかった空間に鈍く嫌な音が響き渡った

その瞬間、彼女の頭は激痛で覚醒させられる

「…っ…あああああ！…！」

彼女の声高い絶叫がその空間を包み込む、

明らかにプレシアの腕はあり得ない方向にへとへし曲がっている、

しかし、それも束の間、

次は彼女の左腕の腱が何かで引き裂かれて勢い良く血が噴き出した

ブランとプレシアの左腕が力無く、血が流れ出たまま宙に垂れる…

彼女は直ぐに頭を反応させて、自分の左腕を切り裂いた人物にへと全身を使い右脚から渾身の蹴りを打ち出して吹き飛ばし距離を取ろうとする

だが、それもまた徒労にへと終わった

その人物はプレシアの繰り出そうとした回し蹴りの脚に合わせて、懐から取り出した苦難を突き刺すと、それを腹筋で受け止め

自分に向けて放たれた彼女の脚の逆の方向に自分の腕の力を加える

イタチから逆に力を加えられ、ギリギリと音を立てて関節が軋むプレシアの右脚

そうしている内に――――

弾みにピタリと軋む音が止み、代わりに明らかに何かが物凄い音を立てて、へし折れる鈍い音が部屋中に響き渡った

「?ああーああああああ!!!!!」

悲痛の絶叫がその場に響き渡る様に木霊する

自分がボロボロにされてゆくのがはっきりとわかった

身体が痛み、喉から声に鳴らない絶叫をひたすら上げ続ける

ついには彼女は力無くその場にばたきと倒れてしまった

痛みが全身を襲う中、彼女は自身の身体をこんな風にした人物を認すべく頭を起す

「……………なん…で…」

「……そこには…」

自分が今までバインド系の魔法で捕らえていた筈の男が立っていた  
冷たく漆黒の闇を思わせる様な眼をしながら腕を折られて、脚を折  
られた自分の前にいた

彼は一歩づつ、彼女へと近づいてくるとプレシアの髪の毛を鷲掴み  
にして膝立ちの状態にする

「…これからする質問に答えるプレシアテストロッサ、」

髪の毛を鷲掴みにされているプレシアは未だに状況が理解出来ずに  
いた

すぐ様、先程まで自分が捕らえていた場所にへと彼女は視線を移す  
そこには何も無い、鳥が飛び散る様に天井にへと羽ばたく姿だけだ  
った

「…一体…どう…やっ…て」



眩く様にそうイタチに向かい弱弱しい声で問いかけるプレシア

そう、プレシアが拘束したと思い込んでいたのはイタチの烏分身

本体は今こうしてプレシアの隙をついて、近づき一気に彼女の身体をこの短時間で使い物にならなくしていたのだ

イタチは容赦なく鷲掴んだ髪の毛を引っ張り上げて、彼女の鳩尾に拳を入れる

「…ゴフッー」

「質問するのは俺だ、貴女じゃ無い…」

イタチのその言葉に自身が抱いた疑問を仕舞い黙るプレシア

髪の毛を鷲掴みにしているイタチは漆黒の瞳を彼女に向けたまま話しを続け出す

「…彼女を作った理由は自分の娘であるアリシアテストロッサを生き返らせる為、間違いないな」

鳩尾に拳を入れられたプレシアは咳込みながらひたすら頷く

それしか、出来なかった

彼女の中では完璧な恐怖が身体を支配し、氷の様にそして深い闇を  
思わせる様なイタチの瞳が背筋を凍りつかせていた

彼女からしてみれば彼からいつ、殺されてもなんら不思議では無い  
のだ

イタチはそんな彼女に対して物を値踏みする様な視線を浴びせる

すると、プレシアは力無い声でボソリ、ボソリと呟く様に話し出した

「わたし、私は只、自分の娘に会いたかっただけ……」

「……その為に……」

今まで自分が見えていたモノまで傷つける……か」

イタチは呟く様に話す彼女に容赦なく、自分の思っている言葉を浴  
びせかける

そして、折れていた彼女の右脚を自身の左足で……

「っ…あああ！……ああああああ！！」

何も躊躇いなく踏み碎いた

骨が完全に音を立てて、崩壊する音が辺りに響く

プレシアの悲鳴が部屋中に振動する様に渡り、彼女の身体に再び激痛が走る

…痛い…誰か、誰でもいい…アリシア…

彼女は無意識に頭の中で助けを必死に求めていた

自分と目の前にいるイタチ以外、誰もいない空間だと分かっている

だけど、彼女は苦痛のあまり求めずにはいられなかったのだ

そんな彼女の様子を見てイタチは踏みつけていた脚をスッと下げると彼女の髪の毛を乱暴に引っ張り直し

城の玉座の壁際にプレシアの身体を寄せる

そして、自身の懐の内から苦無をゆっくりと取り出す

「…そんなに娘に会いたいなら会わせてやろう」

自分に向かい掛けられたイタチの唐突な言葉、激痛で身体感覚がほぼ皆無だったプレシアはビクツと一瞬だけ反応する

だが、それが自分の事を始末する事と把握するとそれ以上考えるのを止めた

しかし、彼女の期待を大きく裏切る様にイタチは彼女の両手を重ねて壁際に貼り付ける

ーーーーーブシュリ

何か突き刺さる様な音が静かに静まり返った部屋に響いた

しかし、刹那…彼女の脳内が再び、身体による痛みにより無理矢理覚醒させられる

「あ…あああああ！…！」

ひたすら、痛みにより悲鳴を上げるプレシア

死を覚悟した彼女にとって、予想外なその痛みはもう頭の中をグシヤグシヤに混乱させていた

痛みにより、もがきたいにも関わらず、自身の四肢がもう使えずそれも叶わない

彼女は思わず痛みの原因を確認する様に頭を上げる

そこには、自分の両手が苦難により貫かれ、壁に突き刺さっている光景だった

その瞬間、彼女の頭が絶望にへと変わる

まだ、いつそ楽に殺してはくれないのだろうか

そんな、もう何もかも投げ出した様な考えが彼女の頭の中を支配していた

すると、そんな彼女の様子にイタチは相変わらず氷の様に深く漆黒の眼を向ける

「…何を勘違いしているんだ？ 俺はまだ貴女を殺すつもりなどない」

「…そ…んな…」

イタチの投げかけるその言葉にもう既に光が無く虚ろになっている瞳のままそう呟くプレシア

そして、イタチは漆黒なその眼を三つ巴の眼に再び変えるとそれを更に変化させてゆく

「…これから、貴女が望んだモノを見せてやる…」

「…いつ…たい…何を…」

プレシアの意識はそのイタチの瞳を見た途端にそこで途絶えた…

――――  
そこは、白と黒の何も色の無い世界

その世界の中でポツリとプレシアは一人だけ立っていた

身体は動く、先程まであれだけあの赤雲の衣服に身を包んだ男にズタバ口にやられたにも関わらず……だ

彼女はおもむろにその白と黒の世界を歩き出す

そして、暫くあるいている内に彼女の脚はピタリと止まった

「花…畑…?」

彼女は自身の目の前に広がる光景に驚愕する

そこには、色が無いが確かに花畑の丘があった、丘の頂上にはポツリと大きな木が一本だけ立っている

プレシアは広がるその光景に見惚れながらも自身の置かれている状

況がイマイチ理解出来ずにいた

何故自分がここにいるのか…

力尽きて死んでしまったのだろうか

そんな考えがグルグルと彼女の頭の中を巡る

そして、そんな彼女の視界の中に――

花畑の丘に向かって走る二人の少女の姿が視界に映し出された

一人は見覚えのある、自分が作り出した娘のレプリカ…

だが、もう片方の少女は――

「…嘘、」

プレシアは思わず唾然と立ち尽くしながらその少女の姿を見て言葉を溢す



今まで会いたかった、望んでいた少女がいた

あの時、あの日失って悲しみにくれていた頃からずっと自分が望んでいた少女

もう一度、この手で抱きしめて上げたいと思いつけていた

プレシアは弱々しく、自分の望んでいた少女の名前をゆっくりと口にする

「アリ…シア…」

そう、アリシア テスタロッサ…かつて自分が腹を痛めて産んだ愛しい実の娘

あんな、フェイトの様なレプリカなんかじゃ無い

「お母さん、早くしないと置いていくよ！ほらフェイトも行こ！」

「うん！ アリシアお姉ちゃん」

そう言つて、自分の方を振り返りながらも嬉しそくにフェイトと共に花畑を楽しそくに駆けるアリシア

本当にそれはプレシアにとって、夢のような光景だった

すぐさま、プレシアは全力で花畑を駆けて彼女達の後を追い捕まえると力一杯抱きしめた

「アリシア！ よかったあ…、夢じゃ無いのね！」

アリシアとフェイトを抱きしめた感覚が確かに彼女の中ではあった

プレシアに抱きしめられた二人は困った様な顔を浮かべながらも嬉しそくに笑っている

そして、それから暫くしてプレシアは花畑の丘の頂上にある木に寄り添って静かにアリシアとフェイトと過ごしていた

「それでね！ お母さんフェイトは…」

「あー！ お姉ちゃん！それは言わない約束でしょ！」

「ふふふ…」ちらちら、二人とも本当に仲が良いのねえ」

嬉しそうに話し合う二人に微笑み掛けながら話すプレシア

本当に幸せな光景だった…

プレシアは自分の作ったフェイトはアリシアにはなれないとそう思っていた

しかし、彼女はこうしてアリシアと共に楽しく笑っている

これが、自分が本当に望んでいた幸せではなかったのか

プレシアはそう確信しつつあった

すると、フェイトと楽しく笑会ってるアリシアは仲が良いと話すプレシアにこう言い放つ

「当たり前だよ！フェイトはだって私の妹だもん！ねー」

「うん！」

そう言っつて微笑み笑う二人がプレシアには何処か眩しく見えた

心の中では何処か分かっていた、そうアリシアが自分にフェイトを傷つける事など望んでいないと

だが、現実では酷い仕打ちをいっばいフェイトにプレシアはしてきた

フェイトは自分からの愛に飢えていると知っていたのにそれでも自分は与えなかった…

プレシアの中でこの時、自分のいままでやってきた事に対して物凄い罪悪感が襲いかかった

それに耐えきれなくなったのか、彼女は思わず眼の前にいたフェイトを優しく抱き寄せた

そして、眩く様にフェイトを抱きしめながら自分に言い聞かせる

「…そう…そうよね、貴女も私の娘よね…アリシアの出来損ないな

んかじゃない、私が産んだちゃんとした娘だったのよね…、ごめん  
なさい…ごめんなさいね」

「…うん…私もお母さんが大好き！」

プレシアの言葉に元気良く応えるフェイト、

その傍ではアリシアが自分も抱きしめてとプレシアにせがむ

勿論、アリシアめ抱き上げて満足そうに全身に幸せを感じるプレシア

「満足だったか？」

不意にプレシアの耳にそして、彼女のいる花畑に感情も何もこもっ  
ていないその一言が響き渡る

花畑の丘から一変、何処か違う場所にへと彼女は立っていた

その唐突な出来事に思考がついていかないプレシア

彼女の立っている場所は花畑からそう遠く無いのか、

丘の頂上でまるで、姿が見えなくなった自分を探すために辺りを見渡すアリシアとフェイトの様子が見えた

彼女は思わず、安堵した様にゆっくりと胸を撫で下ろす

「……だが、それは

「何を安心しているんだ？プレシアテストロッサ？」

ある男の一言により絶望にへと完全に変わってしまった

思わず、冷たく温度の無い声のした自身の後ろを振り返るプレシア

そこには、冷たい眼差しで立っている赤雲の衣服に身を包んだイタチの姿があった

「…な、なん…で」

なんで、この場所に彼のような男が立っているのかプレシアは理解できなかった

確か自分は彼に殺されてこの場所にいる筈ではないのか…

彼女はイタチの姿を見つめながらそう考えていた

だが、彼女のその考えを否定するかのように彼女の前に現れたイタチはプレシアを絶望のドン底へと突き落とす一言を言い放つ

「何を勘違いしていた？　ここは貴女の意識を使い作り出した世界の中だ」

その途端に、彼女は一気に背筋が固まった…

なら、眼の前にいるアリシアは偽物なのか…

だが、確かに抱きしめた感覚も、性格も、格好も、仕草もアリシアの様に…いや間違はなく本物だった

すると、現れたイタチは赤雲の衣服の中から刀をスツと取り出して静かにそれを手にしたまま、花畑の丘の頂上にへと視線を向け始めた

それを見た途端にプレシアに嫌な予感が胸の中を支配する

一体彼は何をするつもりだ…何故、刀を持っている

それは、もしかして…

プレシアは彼の視線の先、アリシアとフェイトがいる花畑の丘の頂上に視線を移す刀を手に持つイタチを見て、それが確信に変わってしまった

プレシアは刀を手に持つイタチに向かって懇願する様に声を上げる

「待つて…止めて！ あの子達を！！」

だが、そんなプレシアの言葉はイタチの耳には届かず彼は一瞬にし



てアリシアとフェイトのいる花畑の丘の頂上にへと移動する

それと、同時に彼女もまた再び、花畑の丘の頂上にいるアリシアとフェイトの前にへと場所が移った

移動した花畑であちらこちらへと見渡し彼女達の姿をプレシアは必死で探しそして捉える

だが、彼女はそれを見た途端に全身の血の気が引いた

「…お母さん」

「…っっ」

そう、それは自分の二人の娘のそれぞれの首元にイタチの持つ刀が押し付けてある光景が入ってきたからだ

プレシアはイタチのそれを啞然とした様子で見ている

そうして、彼女は今にも失ってしまいそうな二人の娘の光景に震えながらも声を発して、娘達に刀の刃を立てるイタチに縋る様にお願いを始める

「お願い…止めて…その子…達だけは…」

「……滑稽」

そうイタチが言い放った刹那、だった…

ブシュリ…と肉を切り裂く様な音と共に彼女達二人の頭がポトリ、ポトリ、とプレシアの目の前に落ちた

切断された首からは血が吹き出し、イタチの衣服に大量に付着する

その血はプレシアの顔面にもベツトリと付着した

そうして、彼女は眼の前で起きたその出来事に愕然とし、力無くその場に膝をつく

その眼は虚ろ…何も映っていない

そうしている内に、座り込む彼女の膝元に二つの頭がコロコロと転がってきた

その瞬間、身体が硬直し、思考が全て停止するプレシア

彼女は転がったその二つの頭が膝に当たり、身体を少しだけ反応させる

そうして彼女は焦点の合わない虚ろな瞳で転がってきた二つのそれを沈黙したまま抱き上げる

そして、二人を殺害したイタチは頭が無くなった二つの身体を座り込む彼女に向かって差し出した

彼はそれから、虚ろな瞳の彼女に話しを紡ぐ様にこう言い放つ

「…今から二十四時間、貴女は自分の眼の前で俺によって彼女達が殺されてゆくのを見続ける事になる……」

既に、そんな自分の声も今のプレシアにはもう届いてはいない事はイタチは分かっていたがとりあえず忠告だけはしておく

そう、ここはイタチの持つ万華鏡写輪眼『月読』の世界

この世界にいる限り、プレシアの絶望は終わらない…

「…っ…あ…」

最早、その虚ろな瞳で声にもならない様な眩きを溢すプレシア

血塗れのイタチはそんなプレシアに背を向けたままその場を後にする

「…ああああああああああああああああああああああああああああ

あ

「!?!?!」

声にならない程の絶叫、叫び声…

彼女は二人を抱きしめながら吐き出しような無い絶望を声に出して  
叫ぶしかなかった

しかし、幻想の世界ではその叫び声も誰にも聞こえない

―――彼女の絶望は始まったばかりだ

## 悪の忍(前書き)

…今回は早めの更新となります (。・1111)

いつも感想をありがとうございます、嬉しい限りですとても励みになります(泣)

さて、とりあえずFLOWのsignでも聴きながら鑑賞下さいませ

プレシアを絶望寸前にまで追いやったイタチはいかに！

では(^O^)/!

## 悪の忍

時の庭園の城内にある玉座の間

そこは、先程の嵐の様な戦闘、それと絶叫が木霊したのがまるで嘘の様に静寂した空気が漂っていた

万華鏡写輪眼、『月読』の幻術の世界にへとプレシアを誘ったイタチは眼が虚ろなまま両手を苦無で抑えられ血を流している彼女の側からそつと立ち上がる

彼の衣服には、先程まで拷問に近い痛みつけ方をしたプレシアの返り血が所々見当たる

ひとまず、プレシアとの戦闘を終えたイタチは静かに開眼していた写輪眼を閉じ、元の瞳にへと戻した

ひとまず一通り事は済んだ…後は、

イタチは虚ろな瞳で苦無により壁に礫になっているプレシアの懐を漁り何かを探し出す

そして、彼はその彼女の懐の中から何か物を触った様な手応えを感じるとそれをそっと取り出した

彼女の懐から取り出したそれを確認する様に自身の視界へと移すイタチ

「…やはり、持っていたか」

彼はプレシアの懐から取り出した物質を見て予想通りといった感じに呟いた

妖しくイタチの掌の上で光るその物質、その名をジュエルシードという

クロノ曰く、あらゆる問題を引き起こす原因と成りかねない危険性があるロストギアらしい

プレシアがフェイトに集めさせていた願いが叶うという品

とりあえず、イタチは彼女の懐から取り出したジュエルシードを自身の袖の中に――



「何…してるんだ…アンタ…」

仕舞おうとした途端、

その声を聞いてピタッとジュエルシードを持っていたイタチの腕が止まった

彼はゆっくりと唐突に声が聞こえてきた自身の背後にへと身を翻して振り返る

そこにいたのは、

驚愕の表情を浮かべて眼を見開いているアルフの姿だった

しかし、イタチは至って冷静でそんなアルフに向かい無表情のまま淡々と答える

「…何って…見て分からないか？ 彼女からジュエルシードを頂いているんだ」

「…そういう事じゃない！ 何でアンタがプレシアをそんな風にしてるんだ！」

彼女は虚ろな瞳のまま壁に礫にされたプレシアを指差し、声を荒げる

プレシアはフェイトの実の母親と知っておきながら、

この現状はあまりに酷く、アルフには目に余るものがあつた

しかしながら、それに対してイタチは平然とした様子で淡々と語り出した

そして、次の瞬間

彼の口から紡がれたその言葉にアルフの中に同時に戦慄が走った

「…興味が無いな…、俺の目的はただジュエルシードの回収だ」

「…なん…だって…？」

イタチが口走るその一言にアルフは喉から言葉が出てこない

それは、彼女の中で同時にイタチにへと抱いていた信用が砕け散った瞬間だった

彼の持つ人としての人間性

それは、自分と同じで形はどうあれ、決してフェイトは傷つけず大切に彼女の笑顔を護る為に行動するとばかり思っていた

しかし、アルフが玉座の間に入って来た時に彼女の視界の中に入ってきた光景

それは…ジュエルシードを回収して、

平然とフェイトの実の母親をこの様に容赦なくボロボロにしているイタチの姿だった

一歩間違えれば、プレシアの身体は取り返しのつかない後遺症が残るかもしれない程の重傷を負っているのが遠目でもアルフにはわかった

そんな事になれば、悲しむのは間違いなくプレシアの姿を見たフェイトである

イタチはそこまで浅はかな考えを持って、プレシアをこんな風に行っているとは彼女は考えられない

そのイタチの真意を確認する為に投げかけた疑問

だが、それはアルフの抱いていた物を崩壊させる物となって返って来たのだった

アルフは怒りを込めた罵声をイタチにへと投げかける

「ふざけるなア！ フェイトの気持ちを全て踏みにじる気かあんたは！」

城内に木霊するその怒りが込もるアルフが発するその罵声

だが、イタチは相変わらず冷静な表情を浮かべたまま彼女を見下す様にこう言い放った

まるで怒りを露わにしてしているアルフを煽るかの様に

「…知らないなそんな事、興味も無ければ関心も無い…」

アルフの怒りに対してイタチの感情も何も込もっていない無機質な言葉

彼女はこの時、確かになにかが自分の中で切れるものを感じた

アルフは感情のままに眼の前のイタチにへと飛びかかってゆく

「…イタチイイい！」

響き渡る彼女の怒号、大声

だが、イタチは飛びかかって来た彼女をヒラリと身をズラして軽く華麗に避ける

そして、攻撃目標を失った彼女の横腹にイタチは容赦無く

「…グハア！」

自身の持つ左膝を突き上げて彼女の身体に打ち込んだ

アルフの身体は宙に浮いて、彼女は口から赤い鮮血を吐き出す

だが、そこでイタチの追撃は終わらない…

次に彼は両手を組んで宙に浮いている彼女の首の後ろに狙いを定め  
てそれを振り下ろす

組まれ振り下ろされた両手はアルフの後頭部にある首元にヒット

彼女は身体を地面に叩きつけられて意識を失う

その様子が見えたイタチはアルフを思いっきり自身から遠ざける為、  
右脚で彼女の身体を蹴り上げた

…玉座から大きく吹き飛ばすアルフ

彼女の身体は地面に叩きつけられるとそこから二転三転と何も反応  
を示さないまま転がってゆく

そして…ある程度、転がった所で彼女の身体は失速し力無く地面へと伏した

それを、玉座の上からまるで見下す様に黙ったまま見るイタチ

地面に倒れ伏した彼女は咳き込みながら、血反吐をぶち撒ける

「ハア…ハア…イタチ…あんたは一体…」

「…言った筈だ、俺はジュエルシードを回収するしか興味は無い…と…」

上体を上げて横腹を抑え苦しみながら訪ねてくるアルフに冷たい視線を向けながら答えるイタチ

そして、この時彼女は全てを悟った

それを把握した彼女はなんとも言えない憎しみ、怒り、悔しさを胸に秘めポツリ、ポツリと語り出す

「…そうかい、今全部わかった」

自分にプレシアの所に案内させた事、自分達に近づいた事

そして、管理局の関係者であるクロノとの繋がり、利用していた事

彼女の中で全てのピースが当てはまり繋がった

「…あんだ鼻っから…」

全ての事がわかったアルフは怒りで身を震わせながら、イタチにボロボロにされた身体を無理矢理地面から起こす

そして、自身が導き出した真実、彼の思惑を暴露し始める

「…私達と管理局員であるクロノを利用して、ジュエルシードを全て回収し己の願いを叶える算段だったんだね！」

苦しみながらアルフは声を上げて、そのイタチが抱いていた野望を語る

そう、考えると全てがだいたい辻褄が合う



まず、フェイトと自分に何気なく接触し行動を共にしたこと

管理局員であるクロノの信頼を集めていた事

よくよく考えてみるとおかしな事だらけである、そしてその事から考えられるものは一つ…

自分達が集めていたジュエルシードを全て横取りし、

——イタチ自身の願望を叶える事

彼女はようやく悟ったのだ、この偽善者ぶった人物が腹黒く自分達を騙していた事に

声を荒げながら導き出した真実について語る彼女にイタチは変わらず平然とした態度で話し出す

「…愚かだな」

彼女をまるで馬鹿にするかのように見下しながらそう言い放つイタチ

すると、彼は自身の懐に手を突っ込み何かを取り出し始めた

そして、片手で取り出したそれをアルフの前に堂々と提示する

その瞬間、アルフの顔が驚愕の表情にへと変わった

「…そ、それは！」

啞然としながらイタチが提示したモノに驚愕の色が隠せないアルフ

イタチは変わらずの無表情のまま取り出したそれについて語り始める

「…本当に随分と簡単に拝借出来た…儲けモノだなこれは」

そう…イタチが取り出したのはそれぞれの色の光を放つジュエルシ  
ード

それは確か、全てフェイトが封印し持っていたモノだ

つまり、イタチがフェイトから盗み取ったという事である

無表情でそれを提示するイタチにアルフの表情が一気に怒りで満たされていった

「……イタチイイイイイ！」

「……ほう、まだ吠えるだけの力は残っていたか、その精神力は高く評価してやるわ」

イタチは怒りを露わに吠えるアルフに冷たい視線を投げつけながらそう呟くとゆっくりと倒れている彼女にへと近づいてゆく

当然ながら、自分に近づいてくるイタチに警戒を強めるアルフ

そして、彼は独り言の様にアルフにへと話し出した

「……人は誰もが己の知識や認識に頼りに縛られ生きている……」

それを、現実という名で呼んでな……」

イタチは変わらず冷たく重たい口調で言葉を区切り、紡ぐ様に続ける

アルフは沈黙したまままるでイタチのその話しに吸い込まれる様に、  
彼が紡ぐ言葉に息を呑み沈黙し痛む身体を横たわせながら静かに  
耳を傾けた

「…しかし、知識や認識とは曖昧な物だ、その現実は何かもしれない…人は皆、思い込みの中で生きている…そうとは考えられないか？」

「…何…言っただけだ」

イタチの問いかけに意味が分からないと言わんばかりに表情を曇らせて言葉を発するアルフ

彼女に近づきながら語っていたイタチは暫くしてその足を止め

倒れているアルフを冷たく突き刺さるような視線を向け、見下す様な形で静かに口を開いた

「…お前にはとりあえず静かにして貰うとしよう…真実はどうせ見えてきやしないのだから…」

「あんた一体なにをッ…」

アルフが自分を見下しているそうイタチに訪ねたその瞬間、

彼の眼、三つ巴の視線がアルフの視界の中に入ってくると同時に、腹部にとてつもない重い衝撃と激痛が同時に襲いかかった

思わず苦痛に歪む表情で顔を曇らせるアルフ

彼女の身体は暫く宙に舞い、落下すると共に激しく地面に叩きつけられて軽く弾ける

そして、咳き込みながら口から赤い血を吐いた

イタチはそれを見て、再び彼女にへと近づくと身体を無理やり立たせて腹部に向けて、自分が構えていた拳をめり込ませる

アルフの意識はイタチが自分の腹部に拳を加えた所で真っ白になり、完全に途絶えてしまった

イタチはゆっくりと彼女にめり込ませた拳を引く

そうして、イタチから拳を引かれ支えを失ったアルフの身体は、まるで崩れる様に地面にへと音を立てて倒れ伏す

それを横眼に確認した彼は開いていた三つ巴の眼をゆっくりと閉じる

…これで、役者は揃った後は主役を待つだけ…

イタチは倒れ伏したアルフから踵を返して、ある場所にへと静まり返った玉座の間に足音を立てながら歩いてゆく

…先程の戦闘やアルフの叫び声が嘘の様に沈黙した空気が辺りを包み込んでいた

そうして、踵を返して歩いていた彼は進めていたその足をピタッと止める

—————玉座の前、

静まり返った玉座の間の中で唯一、部屋を一望出来る中央に位置する玉座

その玉座にイタチは静かに腰掛けると足を組んだまま静かにその眼を閉じる

…玉座に座る彼の傍には苦難により、出血しボロボロのまま壁に貼り付けになったプレシアテストロッサの姿

そして、その部屋の片隅には傷だらけのまま横たわるアルフが力無く倒れ伏している

この部屋を支配しているのはイタチだけ…

沈黙だけがこの部屋を支配し…

赤い雲の忍は足を組んだまま静かにその時を待つ

彼女達が自分の前に現れるその時を…

彼女達と過ごした楽しかった日々はこうしてイタチの中で完全に幕を降ろす

どうなった道筋をこれから彼が歩んでゆくのか

それは最早、誰にも分からない…



(特別編) 聖夜と忍(前書き)

はい…クリスマス編更新ねえー、今年もメリー苦しみます！

…去年が本当に懐かしい…

いいや！限界だ彼女欲しいね！

そんな、自分に希望を持たせるに近い話しを今回作ってみたり！

まあ、これはアリエッティとありますが…ではハッピークリスマス  
ス(^o^)/

私からのクリスマスプレゼントです！

(特別編) 聖夜と忍

クリスマスイブ、

この国にはそういう習慣が毎年あるらしい、

その日を恋人や家族と過ごし、楽しい一日にするそうだが

だが、俺にはそんなものは全て失ってしまった

そんな日に楽しく過ごせる傍に居るべき人はもう居ない

―――けれど、

冬の冷え込む十二月二十四日、クリスマスイブ

うちはイタチは雪の降る中、一人綺麗な色で飾られたミッドチルダの街を闊歩していた

あちらこちらには幸せそうに寄り添うカップル

そして、クリスマスプレゼントを買ってもらい嬉しそうにはしゃぐ  
子供達の姿があちらこちらにみえた

イタチはそんな光景を見て、何処かふと寂しさを感じた

それは、その楽しそうに過ごしている家族が見える度に、

自分の手で殺し失ってしまった家族の事を重ねているからかもしれ  
ない

「…寒いな…」

そう呟くイタチはミッドチルダの中心にある大きなクリスマスツリ  
ーの前のベンチに腰を降ろした

…虚しい一人だけの時が過ぎてゆく

眼の前を過ぎてゆき行き交う沢山の人々

特にイタチはこの日誰とも待ち合わせをしているつもりも無い

聖夜の習慣が無い自分には特に過ごしたいと思う人も居なければ、  
恋人もいないからだ

だが、イタチは一人だけ虚しく過ぎるこの時間は嫌いでは無かった

(…本当に綺麗だ)

何故なら、街を彩るイルミネーションを初めて目の当たりにしたイ  
タチはそれを見るだけで満足していたからだ

すると、そんな風に一人だけベンチに腰を降ろしているイタチの側  
に一人の女性がやってくる

「…隣、よろしいかしら？」

いきなり、ベンチに座っているイタチに訪ねる女性

イタチはそんな彼女の声に反応し、ふと振り返る

「…ええ…別に構いませんよ」

一人、孤独にベンチに座るイタチの横にそう言って腰掛ける女性

だが、イタチはそんな彼女を気に留めずに再びイルミネーションで彩られた街に視線を移し変えた

女性はそんなイタチにたいして他愛ない話しをし始める

「…一人で過ごす聖夜…というものなかなか趣深いですね」

「…そうか…確かにそうかもしれないな…」

イタチはそう言って、自嘲する様に彼女の言葉に笑みを溢す

そんな、イタチの様子を顔を覗かせる様に見た彼女はふと悲しげな表情になった

彼のしている哀しい瞳…

何かを見失った様なその眼を見た途端に彼女はふとを彼の中にある

冷たく深い闇を感じた

そして、そんな様子のイタチを横眼で見ていた彼女はまるで独り言を呟く様にイタチにある事をゆっくりと話し始める

「私は実はね、教会に働いているんですよ」

淡々と語り出すベンチの隣に座る彼女のその言葉に黙ったまま耳を傾けるイタチ

彼女はそんなイタチに対して紡ぐ様に話しを続ける

「私は司教様ではありませんが、今日は聖夜です、キリスト様の  
：： 聖誕祭ですから、特別に今、私が貴方の懺悔をお聞きして上げます  
よ?。」

そう言つて、女性はイタチに優しく微笑みながら言う

イタチはそんな彼女の意図がわからなかった

先程まで他人にも関わらず、彼女は自分の抱えるモノを話してくれ  
と言ってきた

だが、これは簡単に人に話せる様なモノでは無い

しかも、キリストとは今始めて聞いた名前だ自分の世界にはそんな神など存在していなかった

あるとしたら、暁にいた時の仲間であの不死身の馬鹿が信仰していた、ジャシン教とか訳が分からないものぐらいだろう

まあ、別にこの女性にならば自分がいままでやってきた事を話しても別に問題あるわけではない

今夜はクリスマスという特別な日なのだからつつかり独り言を溢してもどうという事は無いだろう

イタチはそんな浮き足だった気軽な気持ちで彼女に自分の事を語り始めた

「…俺はいままで、沢山の人間を裏切つて来ました…、家族、知人、恋人…」

「……………」

淡々と語るイタチの話しに耳を傾ける女性

イタチは寒い風が吹く中、話しを紡ぐ様に続け出す

「…彼等と過ごした毎日は本当に幸せでした、

でも彼等はもう居ません…何故なら…」

イタチはそこで一旦言葉を区切った、それはこの事を話して隣にいる彼女がどういった反応をするのか予想がついていたからだ

これを話せば間違いなく自分に対する見方が大きく変わる

だが、イタチは彼女が真剣に自分の話しを聞き入っている様子にもう話すを自分自身でやめる事が出来なかった

イタチは覚悟を決めたようにその言葉を自分の口から語った、

「…俺が…皆を殺してしまったから…」



「…!？」

イタチが発したその言葉に彼女は眼を見開いた

家族、知人、恋人…イタチはその全ての人間をその手に掛けた

一族の誇り、その下らない事のせいで平和だった国を戦場にしないと阻止しようとした結果だ

イタチは眼を見開いたまま自分の話しを沈黙し聞いている女性に自身心の内を話し始めた

「…もう自分には何も無い、家族も親友も恋人も…だけど、それでも俺は歩みを止める訳にはいかなかった、その結末は…大切だった弟との殺し合い…」

「…そんな…」

気軽な気持ちでイタチの懺悔を聞こうとしていた女性の顔は驚愕しか無かった

それ程にイタチが背負っているものの大きさにそうするしか無かったのだ

「…俺は弟に怨まれて来ましたが、当たり前前の事です、実の父親と母親を殺されたのだから…」

そして孤独のどん底に叩き落としたのも俺なんです、その辛さは計り知れない」

イタチは一通りそう語り終えるとそのベンチから立ち上がった

もう、自分の事をこれ以上語って、救われない事が分かっていたから

イタチはベンチに座る彼女とは別に彩られた街を見つめながら、最後にこう言い放った

「だけどわかった事が一つだけある」

淡々と静かに彼女に語り出すイタチ、彼の語る言葉とその眼とその姿にベンチに座っていた彼女は釘つけになった

「…俺は幾つもの惨劇をこの眼で見えて来ました」

イタチが語るその話しに引き込まれてゆく彼女

それは、イタチが経験して、彼女に語りたいままでの哀しみ、怒り、そして後悔が込められた話しによるものからかもしれない

イタチは静かに眼を閉じて話しを紡ぎだす

「この世で死にゆく事は全て予定調和」

そう語るイタチの眼は哀しく、そして彼女には美しく見えた

丁度、その時…彼女の頬に冷んやりとした何かが当たった

それは、自然が作り出した白い結晶の集まり

イタチはクリスマスの夜に降り出した雪を見上げながら、こう言った

「殺し、殺されまた殺し、そうやって…世界は廻ってゆくんだから」

彼が語り終わると同時に、雪が降り出した空を見上げていた彼女は

ベンチから立ち上がったイタチの姿に視線を向ける

その時、確かに彼女が見た彼の頬には雫が流れていた

雪がただ彼の頬に当たって、それが溶けて流れただけかもしれない

たけれど、それは彼女には彼の流した涙に見えた

今まで、誰にも話した事が無かったイタチにとって、自身の犯したそれを他人に話すことで心の中にずっと溜め込んでいたものが出て来たのかもしれない

イタチはすかさず、自身の頬に流れていたそれを何事も無かった様に手で軽く拭き取った

そして、イタチは優しい笑みを浮かべたまま自分の独り言を黙って聞いてくれていた彼女の方に振り返る

「すみません、下らない事をべらべらと…」

「……………」

そう言つて、イタチはベンチに座る女性を置いて踵を返してその場から立ち去ろうとする

だが、その女性はそんなイタチの右腕を咄嗟に掴んだ

なんだかわからないが彼女自身、よくわからないが気付けば身体が勝手にそういつた行動を自然にとつていたのだ

腕を掴んだ彼女は次に強引にイタチの服を引っ張り、

そして、優しく彼の頭を抱える様に抱き締めた

イタチはそんな彼女の行動に思わず眼を丸くして驚く

「…一体なにを…」

だが、彼女は何も答えず抱き寄せたイタチの頭を何回も撫でる

彼女は暫くして、抱き寄せられたイタチに対して慈愛を込めた声で

優しくこう言った

「…言った筈ですよ、今日は聖夜です…貴方のその罪は赦されない事かもしれませんが」

彼女はそこで一旦言葉を区切り、ゆっくりとイタチの頭を撫でていた手を止める

そして、微笑んだまま静かな声色でこう言い放った

「…私が貴方を許して上げます、哀しい事を背負いこれまで生きてきた貴方の人生は想像できないくらい壮絶なのは感じました」

「…そうですね…」

イタチは一言だけそう呟くと彼女の肩に右手を乗せてゆっくりと身体から引き剥がす

そして、自身の事を優しく包み込んでくれた彼女に優しく微笑みこ  
う言った

「…少しだけ、貴女に心が救われた様な気がします、ありがとう」

それは自分が背負う物を少しだけ理解し、行動をもって癒してくれた彼女への感謝の気持ちだった

イタチは改めて白い雪が降り注ぐ空を見上げ、視線を自分の掌に移す

「綺麗な雪ですね、初めて見ました…」

イタチはそう呟くと満足気に微笑み、再び踵を返すと背を向けたまま彼女にこう問いかけた

「貴女の名前…まだお聞きしていませんでしたね」

イタチのその問いに思わず自身の名前の事を教えていなかったのを思い出す女性、

それ以前に、彼が自分の名前を聞いて来た事に彼女は驚いていたが、なんだかイタチが自分に興味を持ってくれたのが嬉しかったのか気付けば口元が綻んでいた

そして彼女はゆっくりと口を開き自分の名をイタチにへと告げる

「ドゥーエ、私はそう呼ばれています、そう言う貴方は？」

嬉しそうにイタチに名前を名乗る彼女、ドゥーエはそう言って微笑みながらイタチに名前を訪ねる

イタチはそんな彼女にゆつくりと口を開き答える

「…うちは…、うちはイタチです」

「うちは…イタチさん？ 何だか良い響きの名前ね…」

彼女は背を向けたまま名前を名乗るイタチに優しく微笑みながら感想を述べる

父と母が自分に授けてくれた名前…

彼は自分の名前を彼女に褒められて少しだけだが、嬉しく感じられた

そして、名前を名乗り終えたイタチは再びその場から一言だけ告げて彼女の前から立ち去ろうとする

「…またどこかで会えると良いですね、俺はこれで」



「…待って」

だが、立ち去ろうとしたイタチは彼女から右手を掴まれ制されてしまふ

もう話す事は無いのにも関わらずにだ…

イタチは手を掴んだドゥーエの方に首だけ回し振り返った

そこには、優しく微笑んでくる彼女の笑顔…

彼女はイタチを呼び止めた理由について語り始める

「…クリスマス、お暇でしょう？ エスコートして貰いたいんですけど」

そう言つて、彼の手を握っている右手とは別に柔らかな手つきで左手を差し出すドゥーエ

立ち去ろうとして呼び止められたイタチはその手に視線を落とし、

仕方ないと深いため息をつく

そうしてイタチは身体を返し、自身の目の前に差し出された彼女その手を優しく包む様に右手を添えた

イタチはエスコートしてくれと要求してきた彼女に微笑みながらこう付け加える

「…ふふ、構いませんが力不足かもしれませんか？」

「…あら、別に構いわよ、単に私は貴方と過ごしてみたくなっただけだから…」

色っぽく優しく自身の左手に右手を添えて応えてくれたイタチにそう答えるドゥーエ

暫くして、イタチは添えた右手を一旦離し彼女の手を改めて掴み直す

「…では、いきましようか…」

ドゥーエから促されて、そうして冬のミッドチルダの街へと消えてゆく二人…

しかしこれは…フェイトやなのは達が知ることがなかった、いつかの空白の記憶…

この時がドゥーエとイタチが初めて出会った日であった

雪降る街の奇妙な出会いと奇跡…

それはきつと、冷たい世界で身を置いてきた彼にとっての心温まる時間だったに違いない

一人宿命を背負う彼の血塗られた過去と記憶

これからもイタチはそれと向き合わなくてはならない

とある冬の日の遠い記憶と出会い

それが果たしてイタチになにをもたらしてゆくのか

雪降る街に消えて行った彼にしか、それを知る者はいなかった…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8011w/>

---

万華鏡と魔法少女

2011年12月24日03時47分発行